

平成22年度 奉仕活動・体験活動の推進・定着のための研究開発

Research Report 2010

体験活動ボランティア活動支援センターの 役割に関する調査研究報告書



文部科学省
国立教育政策研究所 社会教育実践研究センター

はじめに

ボランティア活動への人々の関心は、今ますます高まっています。3月11日に東北地方を襲った東日本大震災の被災地の復旧復興や避難所での支援においても大勢のボランティアが駆けつけ活躍していることはご承知のとおりです。

ボランティアは、「個人の自由意思に基づき、その技能や時間等を進んで提供し、社会に貢献すること」です。また、「その基本理念は、【自発（自由意思）性】、【無償（無給）性】、【公共（公益）性】、【先駆（開発、発展）性】にある」とされています。（平成4年 生涯学習審議会答申「今後の社会の動向に対応した生涯学習の振興方策について」）

自己の想いを基調にしつつ、「誰でもが、いつでも、どこでも自分にできることを社会の中に還元していく」一つの方策として、今日、ボランティア活動は大変広がりを持ったものとして多くの人々に受け入れられています。

こうしたボランティア活動は人々の学習した成果を活かす場として、また地域におけるリーダーなどを育てていく場として、今後さらに大きな役割を果たすものと考えられ、ボランティア活動の支援や推進は一層重要になっていくものと思われま

「国立教育政策研究所社会教育実践研究センター」では、平成13年に学校教育法及び社会教育法が改正され、全国的に体験活動ボランティア活動支援センターの設置奨励がなされたことを踏まえ、平成14年7月から組織内に「全国体験活動ボランティア活動総合推進センター」を開設し、地方公共団体におけるボランティア活動の推進やセンターの支援に努めてまいりました。特に地方自治体におけるセンターのコーディネーター養成のための調査研究やセミナー等の実施、ボランティア活動に係わる情報提供、相談活動などの取組みを行ってきたところです。

本調査研究はそうした活動の一端として、今後に向けて「地域におけるボランティア活動と地方公共団体の体験活動ボランティア活動支援センターとの関わり」などを検証するために、聞き取り調査を中心とした事例調査を行ったものです。

ボランティア活動は、本来自発性を基調としており、地域によっては様々な課題もあることから、多様で広がりのある活動とならざるを得ません。そうしたボランティア活動を事例調査することには限界もありますが、固有の実践事例を丹念に見ていくと、そのテーマ設定、運営やアプローチの仕方、行政との関わりなど様々な側面について普遍性をもった事象なども抽出できるのではないかと考え、そうした問題意識の下に委員の協力を得て調査研究を行いました。もちろん、ここに掲載された事例は全体の活動の中ではごく限られた範囲のもので、また必ずしも喫緊の政策課題に即したものとも言えませんが、地域における各々の実践を踏まえたものとなっており、地方自治体等がボランティア活動を支援していく上で数多くの示唆を与えてくれるものと思います。

本報告書が今後一層地域の学習活動やボランティア活動の推進に当たって、お役に立てれば幸いです。

最後になりましたが、本調査研究報告書の作成に当たって大変お忙しい中ご指導をいただきました常磐大学元教授の吉永宏委員長をはじめ各委員の皆様、ならびに本調査研究にご協力をいただきました地域のボランティア関係者や教育委員会の方々に厚く御礼申し上げます。

平成23年3月

国立教育政策研究所
社会教育実践研究センター長 服部 英二

目次

はじめに	i
第1章 調査研究の概要	
1 調査研究の目的	1
2 調査研究方法等	1
3 調査対象	1
4 調査研究期間	2
5 調査研究組織	2
第2章 豊かな地域を育む－体験活動・ボランティア活動の推進と定着	
1 調査研究に至る経緯	3
2 調査研究にあたって	4
3 事例についての調査方法	10
4 調査研究への期待と学び	10
第3章 全国の実践事例の聞き取り調査から	
1 「人形浄瑠璃で地域をつなぐ」－徳島県那賀町青年団－	13
2 「チューリップのお庭」－水戸プレーパーク♪をつくる会－	24
3 「仕事人と語ろう」－おうみ未来塾『仕事人と語ろう』グループ－	34
4 「子どもによる子どものための情報誌づくり」 －さって子どもセンター(埼玉県幸手市)－	48
5 「ビッグ・フィールド大野隊の活動と彼らを支える行政と地域」 －大野子どもクラブ(広島県廿日市市)－	52
第4章 特色ある全国の実例	
1 「地域課題の解決と学生ボランティアの活躍」 －NPO法人クラブパレット(石川県かほく市)－	63
2 「英国青年ボランティアの受け入れ」－北海道洞爺湖町洞爺国際交流協会－	66
3 「地元青年団員の中学校への訪問活動」－大阪府泉佐野市青年団協議会－	69
4 「高月小学校で夢を語る会」－滋賀県長浜市立高月小学校－	72
5 「子ども大学かわごえ(CUK)」 －NPO法人子ども大学かわごえ(埼玉県川越市)－	75
6 「こばやし発! はしれ ぞうれっしや」－宮崎県小林市青年団協議会－	78
7 「ヤンボラにいつる」－福島県会津美里町新鶴公民館－	81
第5章 まとめ －地域活動から学ぶ－	
1 事例の特徴と活動の意義	85
2 活動推進の鍵	87
3 活動事例から得られる示唆	89
4 結びにかえて	91

第 1 章 調査研究の概要

第1章 調査研究の概要

1 調査研究の目的

全国の体験活動ボランティア活動支援センターの活動の実態を把握するとともに、各地域のボランティア活動の取組から特色ある事例の情報収集を行い、体験活動ボランティア活動支援センターの役割や充実方策等を明らかにする。

2 調査研究方法等

各委員から推薦のあった事例及び社会教育実践研究センターがこれまでに発刊した「体験活動ボランティア活動支援センター活動事例集」の中から、以下の視点で特徴のある事例を抽出した。

分類1 地域課題の解決に寄与するボランティア活動（地域課題の解決、地域社会のニーズに応える事例）

分類2 住民のニーズから生まれたボランティア活動（地域に生じたニーズがボランティア活動に発展する経緯が明示できる事例）

分類3 ボランティア活動とネットワークづくり（組織化や協働により地域のネットワーク化に役立つボランティア活動の事例）

分類4 ボランティア活動への行政支援（体験活動ボランティア活動支援センターがきっかけとなり、様々な工夫で地域と一体となって活動している事例）

3 調査対象

（1）聞き取りによる調査対象

ア「人形浄瑠璃で地域をつなぐ」－徳島県那賀町青年団－

イ「チューリップのお庭」－水戸プレーパーク♪をつくる会－

ウ「仕事人と語ろう」－おうみ未来塾『仕事人と語ろう』グループ－

エ「子どもによる子どものための情報誌づくり」

－さって子どもセンター(埼玉県幸手市)－

オ「ビッグ・フィールド大野隊の活動と彼らを支える行政と地域」

－大野子どもクラブ(広島県廿日市市)－

（2）参考事例

ア「地域課題の解決と学生ボランティアの活躍」

－NPO法人クラブパレット(石川県かほく市)－

イ「英国青年ボランティアの受け入れ」－北海道洞爺湖町洞爺国際交流協会－

ウ「地元青年団員の中学校への訪問活動」－大阪府泉佐野市青年団協議会－

エ「高月小学校で夢を語る会」－滋賀県長浜市立高月小学校－

オ「子ども大学かわごえ(CUK)」－NPO法人子ども大学かわごえ(埼玉県川越市)－

カ「こばやし発！ はしれ ぞうれっしや」－宮崎県小林市青年団協議会－

キ「ヤンボラにいつる」－福島県会津美里町新鶴公民館－

4 調査研究期間

平成 22 年 6 月 18 日～平成 23 年 3 月 31 日

5 調査研究組織

国立教育政策研究所社会教育実践研究センターに設置された、学識経験者等により構成する「体験活動ボランティア活動支援センターの役割に関する調査研究委員会」が、調査を実施した。その委員は、次のとおりである。

興 梶	寛	昭和女子大学コミュニティサービスラーニングセンター長 社会福祉法人 世田谷ボランティア協会理事長
藤 井	誠	一般社団法人 くまもと教育プロジェクト代表理事・教育 プロデューサー
松 澤 利 行		八潮市健康スポーツ部長
山 本 信 也		財団法人日本青年館 総務部長
○ 吉 永 宏		常磐大学元教授、財団法人たんぼぼの家理事 (以上五十音順、○は委員長、所属等は平成 23 年 3 月現在)
服 部 英 二		国立教育政策研究所社会教育実践研究センター長
工 藤 朝 博		国立教育政策研究所社会教育実践研究センター社会教育調査官
荒 井 博 文		国立教育政策研究所社会教育実践研究センター専門調査員

第2章 豊かな地域を育む 一体験活動・ボランティア活動の推進と定着

第2章 豊かな地域を育む—体験活動・ボランティア活動の推進と定着

1 調査研究に至る経緯

平成14年に発表された文部科学省中央教育審議会答申に次のような文言が記述されている。

個人や団体が地域社会で行うボランティア活動やNPO活動など、互いに支え合う互恵の精神に基づき、利潤追求を目的とせず、社会的課題に貢献する活動が、従来の「官」と「民」という二分法では捉えきれない、新たな「公共」のための活動とも言うべきものとして評価されるようになってきている。また、青少年の時期には、学校内外における奉仕活動・体験活動を推進する等、多様な体験活動の機会を充実し、豊かな人間性や社会性を培っていくことが必要である。そのような機会の充実に資することが、社会に役立つ活動に主体的に取り組む、新たな「公共」を支える人間に成長していく基盤にもなると期待される。(平成14年7月29日中央教育審議会)

この答申に基づき、国立教育政策研究所社会教育実践研究センター内に「全国体験活動ボランティア活動総合推進センター」が設置された。

一方、平成14年度には都道府県レベルのボランティアセンターに対する国としての予算措置がなされたが、その後の行財政改革の中で打ち切られ、各地方自治体においてボランティアセンターに対する取組の異なりを生じさせる現状を招くこととなった。

以上の経緯と現状を踏まえ、全国の体験活動ボランティア活動支援センターの活動の実態を把握し、特色ある活動事例、特に地域への貢献という視点を含め調査研究を実施することになった。

調査研究を進めるに当たり事務局から提供された先行情報・資料などを参考とした。その内容は以下の通りである。

「新たな『公共』の形成に資する社会教育の在り方に関する調査研究報告書」(国立教育政策研究所社会教育実践研究センター 平成21年3月)では「新たな公共」という視点から意欲的に取り組んでいる各地の8活動事例をとりあげ、その取組と構造について分析している。

「平成20年度ボランティアに関する基礎資料」(上記センター 平成21年3月)は昭和46年以降におけるボランティア活動(奉仕活動も含めて)等に関する答申の抄録を記載している。

これらの調査研究の淵源を辿るならばその過程において興味ある事実を見出す。

例えば社会教育審議会は「急激な社会構造の変化に対処する社会教育のあり方について」(昭和46年4月)の答申において、増大傾向にある余暇時間を自然との接触、スポーツ、レクリエーション、社会奉仕等に積極的に活用されることが望ましいと指摘している。この中で奉仕活動を例示しているが、その後、地域におけるボランティア活動への関心を高め、我が国において青少年の参加を促進する契機の一つとなったと考えられる。

「青少年と社会参加」についての総合的研究(松原治郎研究グループ 昭和54年)は参加概念の系譜、分析、参加論仮説、諸外国および日本における青少年の地域活動への参加の歴史を含めた総合的研究である。地域活動への参加に対して示唆し、その後の各

地での取り組みに大きな影響を与え、時を超えて参考に^{あた}値すると考える。

2 調査研究にあたって

すでに前章において本調査研究の実施要項(課題、趣旨、調査研究事項、実施方法、実施期間、所管・事務局)を説明したが、ここでは調査研究委員会としての理解と確認した内容について述べる。

(1) 調査研究課題についての理解

示された調査研究課題は「体験活動ボランティア活動支援センターの役割に関する調査研究」である。この課題は鍵となる三つの事柄によって構成されている。それは「体験活動」「ボランティア活動」「支援センターの役割」である。

キーワードでもあるこの三つの事柄の個々についてどのように理解すべきかが問われるであろう。それぞれの概念について考えるが、専門用語としての概念を定立することがここでの目標ではなく、共通理解として把握するための作業であることを前提としておく。

ア 体験活動について

体験とは、実地に身をもって経験することだが、単なる経験ではないとされる。

すなわち、体験は直接性や生々しさ、強い感情の彩り、体験者に対する強力で深甚な影響、非日常性、素材性などのニュアンスを持つとされる。(岩波哲学・思想事典)

この短い説明の中に出てくる構成的修飾表現は直接性、生々しさ、強い感情、深甚な影響、非日常性、素材性などであり体験の特性についての指摘である。

日頃、体験としてとりあげ実施している活動は果たしてそのように表現される影響を参加者に与えているであろうか。この点は調査研究に際して留意すべき重要事項である。体験活動への参加が直ちに影響を参加者に与えていると思いついておられるならば、その実際に照らし合わせて確認しなければならない。

体験が千差万別であることはいまでもない。一人一人の顔かたちが異なると同じように出会う事柄、参加する内容など一つとして同じものはない。したがって、体験活動のある基準によって分別することは統計上の処理としては有効であるとしても学習の契機、成長の過程、出会いの発見などの重要な側面を見過ごしかねない。

体験している時間、状況、そこでの参加者構成など体験に影響を与える諸要素について十分に把握しないまま体験について評価しかねない。実際には前後の時間、他の場所での体験、直接・間接にかかわっている人々などの広がりによって体験は存在している。

体験によって様々な広がりのある事柄、すなわち個人の領域で捉えると自己実現、集団として考えると新しい公共の志向を獲得する。一回かぎりの活動であったとしても通常の活動であったとしても再び体験することは考えられないからこそ重要である。

本調査研究において取り上げる事例の体験という側面を学習、地域課題解決など設定したいくつかの視点からどのように汲み取るかが課題となる。その課題に応え

るためには活動事例の始まり、展開、現在に至るまでの経過の細部の把握とその意味について考究しなければならない。

すなわち体験活動およびボランティア活動において、それぞれの経過についての「体系的省察」が本調査研究の基礎となる。

イ ボランティア活動について

外来語としてのボランティアという言葉（用語）が我が国の辞書に記載されたのは1862（文久2）年であり、日本で最初に印刷・発行された辞書「英和对訳袖珍辞書」（堀辰之助編・堀越亀之助補）に記載されている。原本は国立国会図書館に保存されている。

この辞書にボランティアに関して以下のように記載されている。

V o l u n t a r y	=	自由ナル
V o l u n t e e r	=	自由にスル人
V o l u n t a r i l y	=	随意ニ、自由ニ
V o l u n t e e r - e d - i n g	=	軍役に非スシテ軍に出ツル

これらの内容は、後にボランティア＝義勇兵などとして意識される淵源となっている。

言葉としての伝来は史実として上記のとおりだが、それ以前すなわち古代より人々を関わりあわせる“絆”として血縁・地縁による相互扶助行為がなされていたであろうことは想像に難くない。

また、外来文化への接触として16世紀後半にはヨーロッパからカトリックの指導者である司祭職にある人々が九州に上陸する。彼らは長崎などにおいて生活困窮者、難病に苦しむ人々に対して宗教的意図に基づく救済行為を行ったと記録されている。今でいうところのボランティア活動を展開した。その行為が日本におけるボランティア活動の始まりだとする研究者の指摘もある。

しかし、当時の人々はそれらの活動をキリスト教の布教（伝道）であるとし、ボランティアという用語および概念と結びつけて考えることはなかった。

それ以降、20世紀の半ばまで一部の人々や団体を除き欧米型のボランティアとしての活動は我が国において広がることなく、善意による篤志家の働きとして続いてきた。

しかし、1970年代に入り、様々なきっかけを通して社会にボランティアが広がり始める。歩みの詳細は別の機会に譲るとして、国内外の社会変化とともにボランティアに対する関心が我が国において高まったことが指摘されよう。

伝統的な血縁・地縁を基礎とする相互の扶助・互惠行為が地域社会において薄れる傾向に対抗し、自発的意志に基づき他人や社会のために行動する実践型ボランティアが広がってきた。

中でも国際貢献活動、社会福祉の行為、1959年伊勢湾台風および1995年阪神淡路大震災時における救援活動などは我が国におけるボランティア活動に対して社会の関心を集める特記すべき契機となった。

社会教育審議会は1971（昭和46）年4月「急激な社会構造の変化に対処する社会教育のあり方について」の答申（第1部3 生涯の各時期における社会教育の課題）において、社会奉仕等に積極的に活用されることが望ましいと指摘し、以後、各省庁の審議会等においてもボランティアがしばしばとりあげられてくる。別言すれば急激な社会構造の変化がボランティア活動を誘発せざるを得ない必然性をもたらしたと理解することが出来よう。

欧米でボランティアが広がり発展したのはキリスト教思想に基づいていることについて改めて指摘するまでもないが、その背景には質的・量的変化を伴う急激な社会変化に対応した多数の市民たちの行動があったことを史実として採用できる。

当然のことだが歴史的な影響を与えた社会変革は様々な複合要因が重なりあって成立しているのであり、ボランティア行為を発展させた要因の一つとして位置づけなければならないであろう。

ボランティアをもたらした発展させた歴史的出来事をふりかえると、ヨーロッパを席捲したペストの大流行、イギリスにおける産業革命、フランスでの市民革命、北米大陸での独立戦争（南北戦争）などをあげることが出来る。

ボランティアの語源はギリシア語であるとの指摘が定立しているが、その語意は多義的である。先に挙げた歴史的な大事件での一般市民の行動の特性を後に顧みる作業を通して、ボランティア活動及び思想の特性が形成されていったと考えることが妥当であろう。

我が国においてボランティアの特性として一般的に指摘されているのは、自発性、公益性、無償性などであろう。ボランティアの語意についての定義は確定されないまま今日に至っている。多くの場合、社会変化に伴って発揮される行動と考えであると、ボランティアに見られる特性を次のようにまとめることが私見として可能ではないか。

自分の意思で、良いことであると信じ、他者や社会のために、社会が取り組んでいないことを取り上げ、技術、時間、労力などを用い、代償を求めない（無償）で行う行為とその基礎にある考え方。

ボランティアを奉仕と読み替えることができるか否かについての論議が一部の人によって続いているが、主張の異なる点を以下のように簡略的に括ることが出来るのではないか。

- ・かつて奉仕を強制されたという歴史的経験から否定的に受けとめざるを得ない
 - ・奉仕は宗教的背景による行為であり限定した立場に依拠している
 - ・奉仕は地域社会の構成員としての義務と権利による行為であり当然である
- ここではそのいずれであるかについての判断を保留して進める。

昨今、新たな『公共』についての提案や模索がなされているが、ボランティアとの関連についての検討も要請されている。それは“官（行政）”と“民（私人）”の関わり合いすなわち協働の在り方についての考究を意味する。

その前提として“官”と“民”のそれぞれの特性と属性についての検討が求められよう。

本調査研究を進めて行くことによって官と民のそれぞれの望ましい在り方、他者への関わり方についての示唆を得ることができれば一つの成果を獲得したことになるのではないかと。

近年、協働が達成課題としてとりあげられることが多いが、個人、集団、団体、組織、地域社会のそれぞれの他者に対する関わり方の在り方について、まず、個人の次元についての検討から始めることが必要であろう。地域における有効かつ適確な実践活動は特定の個人の思いや信念が実体化し発展したボランティアに繋がる行為であることがすでに先行研究によって指摘されている。

ウ 支援センターの役割について

支援とは他者及び他団体の存在を認め、相手が必要とし望んでいる事柄すなわち未来への展望を理解し、その目標の達成を目指す行為への関わり合いであるとして論を進める。

漢語辞典は支援について支え助けることと説明し、英語辞典ではそれぞれの意味を示すサポートとヘルプをあげている。サポートは港での荷揚げにおいて下から持ちあげることに由来し、ヘルプは食物を分けることであり、双方とも相手にとって役立つ行為であり、いずれも相手に働きかけ、働きかけられるという相互関係を意味する。

働き働きかけられる関係があるとしても、実際に支えることになっているのか早急に断言することはできない。たとえば効果的な運営を行うための環境が不十分であるとした場合、支援センターが機能を有効に発揮することは難しい。

地方自治体が設置している各支援センターについての現状把握、問題点の指摘そして課題の明確化が急務であり、本調査研究を実施している体験活動ボランティア活動総合推進センターの4機能すなわち、情報提供・相談事業・調査研究・指導者養成などの働きが地方自治体設置のセンターと連動することは双方の課題である。

一方、支援センターへの期待とは別の側面があることも見過ごせない。それは支援センターに対する支援についてである。すなわち地域住民や団体からの支援を受けることが可能な支援センターとなっているのかどうかである。支援を受けることも一つの重要な能力として認識しなければならない。

歴史に見出される地域指導者のイメージは、強制、圧迫などの弊害を伴っていたとしても、まさに人々（地域構成員）の支援を実体化する機能を持つ人であったと推定される。強制、圧迫ではなく真摯に地域課題に取り組んだ指導者の多くは篤志的リーダーすなわち今日でいうボランティア的な存在であったことは指摘するまでもない。

今日の社会状況においては支援することは容易ではないが、それ以上に困難なのは地域からの支援を受けることである。行政全般に対する地域からの支援や地域活動を支援するセンターの働きへの地域からの支援という側面が極めて重要である。

そのためには、人々が行っている課題を焦点化し、より優先度の高い切実な課題に対するセンターの働きを積極的に進めることであろう。支援を受けることと

支援するということとは一枚の紙の両表面を意味する。生活に関わる切実な問題に焦点を当てているということが実感されると相互支援の絆がさらに強まる。

近年、地域活動の推進に関わる働きとしてコーディネーション（調整）機能が重視されるようになったが、それはセンター機能の主要な働きの一つであり、その機能が発揮される関わり合いをパートナーシップ（仲間）と呼ぶ。

しかし、ここで注意しなければならないのは仲間としての絆を結ぶきっかけとなるのは必ずしも共通性だとはかぎらないということである。社会が変化し、異質性を持つ人々とつきあわざるを得ない時代が到来し、私たちはその社会に直面している。暫定的表現だが、共通する意識を凝集力とする人々と異質を意識しつつ認め合おうと試みる人々との出会いが新たな公共を開拓するコミュニティ特性として形成されるのではないか。

何を行うかだけでなく、どのように出会いが進行するかを見つめ、新たな方向に向かうことがセンターに求められる働きとなる。

そのためには、センターが開放的コミュニティであることが条件となり、人々が集まってくる求心力と人々を現実に向かわせる遠心力とのダイナミズムによってセンターの支援機能が発揮される。この点について聞き取り調査で光を当てることが重要である。

（２）活動事例の分類

地域で展開される体験活動、ボランティア活動はその目的、活動内容・方法、対象、推進者などによって多彩である。

平成 10 年に公布された「特定非営利活動促進法」は地域で展開されている活動で不特定かつ多数のものの利益の増進に寄与することを目的とするものと定義し、非営利性の特性を持つ以下の 17 活動を例示している。

- 1 保健、医療又は福祉の増進を図る活動
- 2 社会教育の推進を図る活動
- 3 まちづくりの推進を図る活動
- 4 学術、文化、芸術又はスポーツの振興を図る活動
- 5 環境の保全を図る活動
- 6 災害救援活動
- 7 地域安全活動
- 8 人権の擁護又は平和の推進を図る活動
- 9 国際協力の活動
- 10 男女共同参画社会の形成を図る活動
- 11 子どもの健全育成を図る活動
- 12 情報化社会の発展を図る活動
- 13 科学技術の振興を図る活動
- 14 経済活動の活性化を図る活動
- 15 職業能力の開発又は雇用機会の拡充を支援する活動

16 消費者の保護を図る活動

17 前各号に掲げる活動を行う団体の運営又は活動に関する連絡、助言又は援助の活動

今回の調査研究の対象とする事例の選定については、調査研究委員会で分類した下記の4テーマに即した事例を取り上げることとする。

特定のテーマに沿って事例を位置づけするが実際には複数のテーマに関連する内容を持つことがあり、事例の目的、意図、活動展開の特性などの理解によっては他のテーマとして扱うことが可能な場合もある。したがって分類を絶対基準としてではなく相対基準として把握することを確認して調査研究を進める。

具体的には下記の4テーマに基づいて活動事例を位置づけて選定する。

分類1 地域課題の解決に寄与するボランティア活動

地域課題の解決、地域社会のニーズに応える事例

分類2 住民のニーズから生まれたボランティア活動

地域に生じたニーズがボランティア活動に発展する経緯が明示できる事例

分類3 ボランティア活動とネットワークづくり

組織化や協働により地域のネットワーク化に役立つボランティア活動の事例

分類4 ボランティア活動への行政支援

体験活動ボランティア活動支援センターがきっかけとなり、様々な工夫で地域と一体となって活動している事例

なお、活動選定にあたって下記の諸点を参考とする。

ア 活動が具体的であるか

イ 活動の意図と目的が明確であるか

ウ 活動を通して個人、集団、団体、地域社会はどのように変化（発展、成長）することを目標としているか

エ 実績があり将来性を見込めるか

オ 地域諸資源の活用と団体維持機能を備えているか

カ “民”としての発意と行政との協働という視点を持っているか

選定に当たってここで示した留意点の全てを満たしている事例であることを求めるのではない。活動期間が短い事例においては経験を累積するまでに至らないのは当然であり、実績が少ないとしても、未知の部分への期待及び想定を含めて活動事例として取り上げることが考慮される。

3 事例についての調査方法

(1) 基礎情報の収集

活動事例の基礎資料についてのアンケートを実施する。

(2) 聞き取りによる調査

事例担当委員が現地を訪問し、地域現況、活動の時間的、空間的、関係的發展と経緯など下記の諸項目について聞き取る。

- ア 地域概要と特性
- イ 集団または団体の組織と運営体制
- ウ 活動を推進する人々とその属性
- エ 活動開始の契機
- オ 活動の目的と目標
- カ 活動の特徴
- キ 地域社会との連動
- ク 地方自治体とりわけ体験活動・ボランティア活動支援センターとの協働
- ケ 活動展開と学習の関わり
- コ 成果と課題

報告書に記載する内容は担当委員による分担執筆とする。

4 調査研究への期待と学び

(1) 親密なつながり

活動を展開するに当たってまず第一に明らかにしたいことはその活動に参加する人間についてである。地域での活動は必要にしたがって自然発生的に起きるが、なんらかの意図もしくは目的をもって特定の人もしくは人々によって始められることもある。

個人の発意で始まっても活動の目的、目標、方法などが人々の賛同を得ないと広がっていかない。組織化されない。組織化されることは活動に対して人々の同調性もしくは共振性に基づく賛意が示されるからである。

活動の目的、目標、方法に人々が関心を持つことによって参加すると理解されるが、実際はどうであろうか。そこで問題となってくるのが人と人の親密なつながりである。伝統文化が持続している村落や歴史の新しい都市型住宅地であったとしても人と人とのつながりは活動を展開していく上での重要な鍵である。

近年、常会・町内会・自治会などの地域活動への参加が少ないのが一般的だと指摘されるが、数百人の住民が居住する農村地帯の集落で活動を活性化させ持続している事例が報告されている。事例から人と人との親密なつながりの重要性について学ぶことができる。

地域活動に当たって人々と合議することが慣例にとどまっていることが多い。親密なつながりは慣れ合いではない。大切なことについては自分の考えを主張し、相手の意見に対しては誠実に耳を傾ける。意見の違いが問題なのではなく意見を相互に聴きあうことに焦点を当てることができる親密さが保証されているかが大切なのである。

(2) マネジメントへの挑戦

特定の個人に活動がとどまっているかぎり地域に広がることは難しく、集団や団体による活動の運営・展開が必須となる。そこで注目されるのが活動運営のマネジメントである。

マネジメントは経済用語であり財政的な基盤を確立することにのみ焦点を当てて考えられることが多い。しかし、マネジメントの本来の意味は目的に沿って目標を達成するための最も適切な行動をとることを意味している。すなわち、目標に到達するための最も適切な行動を選ぶことが地域活動マネジメントである。

地域活動を活発に展開するためには様々な条件を整えることが必須となる。その一つに財政的基盤の確立が挙げられよう。ともするとお金があれば活動が活性化すると短絡的に決めつけられかねない。この考えに対しての指摘がある。

その一つは財政的基盤を確立し得ないのは活動の目的・目標が地域から支持されていないという指摘である。この指摘に対し、活動が地域からの支持を獲得できないのは地域住民の意識が低いからだという反論が多い。それは事実かも知れないが、活動の目的・目標が誰によって誰のためにどのように設定されたかについての検証が必要である。

第二は財政的基盤確立が他力本願に陥っているという指摘である。他者に頼ることは活動の積極的展開の契機を不明にし、活動低調の責任を他者に転嫁しかねない。地域社会にとどまらず国や国際社会からの影響を地域が受けていることは理解できるとしても直面している地域課題の解決に向かって創意工夫によって潜在資源を活用することが望まれる。

活動推進者の努力によっても果たし得ない事柄があるとしても、取り上げた活動事例から学ぶことが多いことを期待したい。

(3) 変化を実現する地域活動

社会の様々な仕組みによって国民の生活が守られてきたが、その仕組みすなわちシステムが有効に機能し得なくなっており、急激な社会の質的・量的変化に対応する新たな仕組みを模索する時代に入っている。そこで、ボランティア団体やNPO（特定非営利活動促進法による法人）などの働きに関心と期待が寄せられているのである。

深刻な状態への対処は緊急性を伴うので“民”を中心とするボランティアの働きは応急処置として貴重である。その実例として自然災害時の救援活動が挙げられる。しかし、それらの貴重な社会貢献は直面している問題の解決や困難な状態の緩和にとどまり根本的対応とはならない。すなわち変化への対応にとどまらざるを得ない場合が多い。

そのような状況に対しての新たな提案が各地でなされ始めているのではないか。

変化に対応することを基本とし、経験を生かして新しい変化を社会にもたらず働きが新たな“公共”の先駆的な働きの一つの側面になるのではないかと予感されるからである。変化への対応の次のステージは変化を創り出すことへの模索になるという考えである。

変化を創り出すためにはそこに関わる人々がこれまでの考えや行動様式にこだわらず、新しい自己を活動(学習)によって見つけ出すことがこれからの地域における“民”による活動の重要な目標となる。

本稿で選定した活動事例を以上の視点から理解したい。

(4) 事例理解の基礎としての体系的省察

体験を通して学ぶことの意義はすでに学習・教育分野において認められている。本調査研究は事例を原資料とし、活動によって獲得された学習の内容と効果さらにはその意義について考究することを目的としている。このことは体験がどのようなプロセスを経て学習されるかについての体系的省察を意味する。

活動の提案者、推進者、参加者そして活動の対象となった人々の地域に対する感情、付き合い方、考え、価値観、欲求、行動などがどのような過程を経て変化したかを明らかにする体系的省察の方法を用いて取り上げる。

具体的には活動前、活動中、活動後（直後および一定期間の後）において、上記に示した事柄についての比較と変化を明らかにすることである。そのためには、体験学習過程を観察し理解することを通して変化を把握する。体験学習を「経験→指摘→分析→仮説化」の過程の循環として掌握することである。

ただ、限定された期間において長期もしくは全体に及んで観察しその過程を検討する状況ではないため、事例調査担当委員が焦点化した事項にとどめることとなる。

(吉永 宏)

第3章 全国の取組事例の聞き取り調査から

第3章 全国の取組事例の聞き取り調査から

1 「人形浄瑠璃で地域をつなぐ」—徳島県那賀町青年団—

～分類1～

地域課題の解決に寄与するボランティア活動 (地域課題の解決、地域社会のニーズに応える事例)

1 聞き取り調査の概要

今回の調査研究での事例はすでに前章で示したように活動の目的・目標に基づいて大きく4項目に分類して取り上げることになっている。

ここでの「人形浄瑠璃で地域をつなぐ」—徳島県那賀町青年団—は、その活動が分類1にあたる“地域課題の解決に寄与するボランティア活動、地域社会のニーズに応える”事例として位置づけられる。その事例についての聞き取り調査の概要を以下に述べる。

- (1) 目的 地域の課題解決への青年の取組を把握し活動の意義と将来性について学ぶ。
- (2) 目標 地域の伝統文化の保存と継承の可能性を探究する。
- (3) 調査地域 徳島県那賀郡那賀町和色郷字南川 104 番地 1
那賀町教育委員会内那賀町青年団事務局
徳島県那賀郡那賀町川俣字ドラノ前 4 礫神社境内 川俣農村舞台
- (4) 調査日時 平成 22 年 10 月 17 日 (日) 8 時～17 時
- (5) 調査方法 聞き取りおよび観察あわせて入手した資料の読み取り。
- (6) 聞き取らせていただいた方
那賀町青年団事務局長 (那賀町教育委員会) 湯浅悦司氏、その他、青年団団員、地域諸団体の役員、出演者、その他関係者
- (7) 聞き取りの内容
地域現況と地域課題、活動の始まりから発展そして現在に至る過程と経緯、成果と課題、今後の方向性など。
- (8) 取組の特徴
中間山林地区で限界集落、準限界集落を内包する状況を踏まえ、青年の始動による活動の展開は高齢者はじめ複数世代の人々の間に新しい流れをつくりだし未来を展望し、その過程で人形浄瑠璃および農村舞台をはじめとする地域伝統文化継承の道を開いた。

2 組織と運営体制の構成

那賀町青年団事務局を那賀町教育委員会内におき、事務局長は那賀町教育委員会担当職員が兼務している。この形は全国各地の青年団に共通していると考えられるが、そのことについての評価は後述する。

旧 5 町村を支部組織基盤とする那賀町青年団が活動の主催者である。事務局体制は下

けたポイントの第1は、地域に密着していることである。地域には様々な課題がありユニークな発想と懸命な努力とで解決に向かって継続的に活動しているからである。

ポイントの第2は、取り組む活動を通して地域力がさらに増大するよう、青年たち自身の指導力の向上が期待できるからである。

いわゆる“新しい公共”についての一つの展望を開く手がかりを与えるかも知れないが、このことについては他の機会に譲る。

那賀町は徳島県の南東部に位置し、那賀川と坂州木頭川が町内で合流。標高1,000メートルの山々に囲まれ高知県、愛媛県との県境である。良質の杉、ヒノキの産地として知られていたが、1970年代以降、輸入材に押され代替産業も確立しないまま人口減少現象が続いている。平成17年の町村合併後、人口は町全体で約1万1千人である(平成21年7月現在)。

森林面積が約95%強であり可住地面積はわずか5%である。町村合併後、若い世代の流出が増大し結果的には高齢者中心の中間山林地域となっている。高齢化率は那賀町全体で39.3%、地区別では木沢47.8%、木頭46.0%、上那賀45.3%、大字高野77.8%である(平成21年7月現在)。

これらの地域データを見ると若者世代は高齢者の多くにとって極めて重要な存在であることが理解できるだろう。国道を公共交通機関である徳島バスが運行しているといっても1日の運航本数は1路線上下数本、しかもバス停留所から山道を数キロ歩かなければならないところもある。暮らしをさらに困難としているのは高齢者世帯あるいは高齢単身世帯である。

行政としての対応可能範囲を超えている現況から見た将来構想は極めて至難の業である。しかし、それでもなお、それだからこそ青年たちは地域活性化のために何か活動をしたいと日々、努力を続けている。

報告資料によると地域の人たちを対象とする活動は、恒例行事としてX'mas会、節分豆まき、祭などがある。その他、地域団体が合同開催する秋祭り、地域婦人会主催の映画会などもある。

イ 青年たちの声への共振

数年前より、青年団団員の集まりで“ずっとやっていける活動に取り組みたい”“配達でうかがうお宅の一人暮らしのお年寄りに、何かしてあげることがないだろうか”“文化的な活動に取り組みたい”などの声が上がってきていた。

青年団として何かをとという声に共振したかのような出来事が起きた。

それは平成19年「徳島県国民文化祭」の開催である。この国民文化祭は全国各地の伝統芸能を集めて紹介し情報交換をする交流フェスティバルである。第1回は1986年東京都のホストで始まった。立候補した県から選んで主催する持ちまわり開催という文化祭で、公演の全国版である。その第22回開催を徳島県がホストした。徳島の伝統芸能といえば阿波踊りが筆頭としてあげられるが、阿波人形浄瑠璃もその芸術性と庶民性そして長い歴史を持つから伝統芸能である。

徳島県国民文化祭のキャンペーンで報道機関が様々な角度から人形浄瑠璃に関わ

るニュースを積極的に取り上げた。その一つに、昔、人形浄瑠璃は「農村舞台」で公演されていたということについてであった。農村舞台は歴史的な価値を持つ地域住民施設であり、幕末から昭和初期まで盛んに用いられた。集落の近く、林の中、神社境内などに設けられ、盆踊り、集落住民の集まり、人形浄瑠璃奉納などが行われた。

現在、農村舞台は全国に約 100 棟、徳島県に約 90 棟、さらに那賀町の中に徳島県全体の約 50%にあたる 45 棟があることを知った。

一方、那賀町の唯一の人形座は団員の高齢化により、その存続が危ぶまれていることもあわせて知ることとなった。

ちょうどそのころ那賀町役場から連絡があり、“近く、国立人形浄瑠璃文楽座の吉田勘緑さんが来られるのでお会いしないか、その道では第一人者の吉田さんに人形の扱い方や浄瑠璃語りなどをお聞きしよう”という誘いがあり、最初は、「難しそう」「人形浄瑠璃って何？」などの意見が団員の大半を占めたが、徐々に「一回、人形をさわってみてからどうするか決めよう」ということになった。この段階では誰も人形座を設置しようという呼びかけに発展するとの見通しは全く持っていなかったようである。青年団役員の一人名は、“その誘いは青年に対する町の配慮というよりも青年を燃えさせる作戦ではなかったのか”と語っていたが、そのように言える関係が青年と行政の担当職員との間にすでに築かれていたということをも語る。

青年団団員 12 名が吉田さんから人形浄瑠璃についての話を聞き、人形の扱い方の一歩を踏み出した。その結果、月に 2 回（1 回は吉田さんの指導）の練習を実施するという話となった。その際の講師料および新しい人形の製作費を町から援助してもらえることになり、精神的支援に加え実際に必要な具体的支援は青年たちの活動を促進させる力となった。

ウ 人形座「丹生谷清流座」の誕生

練習を続けている頃、マスコミ各社によって那賀町青年団の人形浄瑠璃の取組のニュースが流れ多くの人々の知るところとなり、そのため「人形座」の名前を掲げることが必要となった。川沿いの溪谷を昔から丹生谷と呼び慣わしてきたことをも生かした。

団員から青年団の「青」の字を入れたい、那賀町をアピールしたいとの声を聞き、清流からやがて大海原に出て行く那賀川のイメージを重ねて「丹生谷清流座」と名づけた。

人形浄瑠璃公演の際、会場となる川俣農村舞台へのアプローチにひるがえっている幟にはこのようないきさつがあった。

文化は歴史の蓄積であり、歴史はその時代、その地域に暮らしている人々によって形づくられる。「丹生谷清流座」の誕生は徳島の中間山林地域にまた新しい歴史として加えられた。それは青年たちの青春の軌跡を文化として残すことを意味した。

那賀町の青年団の動きが人形浄瑠璃の世界の中で広がりはじめた。人と人とのつながりの動きである。

徳島にある阿波人形浄瑠璃研究会「青年座」（徳島市本町 5 丁目 2）が、27 年前

に発足してから今日まで後援会会長として支援指導していただいている福島誠浄住職のお寺で、人形浄瑠璃の公演を開催することとなった。この研究会は県立徳島城北高校の民芸部出身者OB・OGで続けられている人形浄瑠璃の研究と公演練習を目標として活躍している団体である。

「丹生谷清流座」に所属しているメンバーが「青年座」公演に友情出演するなど少しずつつながりの輪が広がっていった。

エ 初公演から継承への歩み

平成19年の「徳島県国民文化祭」開催によって人形浄瑠璃に社会の関心が高まり、その刺激を受けた運動が展開された。それは、平成21年に徳島県と文化立県とくしま推進会議の共催で「ジョーリ100公演」というイベントを徳島県全体を巻き込んで開催した事業である。その意気込みに応えて道府県各地から16の人形座が参加した。

その100公演の一つが那賀町にある川俣農村舞台で開催されることになり、徳島の「青年座」との共演による初演が決定した。

川俣農村舞台を使用するのは18年ぶりのことであるが、周辺の草が生い茂っている中の農村舞台は昔の面影を残していたと報告されている。

公演2週間前、舞台周辺の清掃をすることとなった。地元からのお手伝いには80代、90代の方が多く、その土地は準限界集落なのだというのを改めて実感させられたようである。それでも80代男性はチェーンソーで枝を払い、90代女性は鎌で草刈りをするというたくましさそのものであった。

公演当日、川俣農村舞台に観衆500人が地元と各地から集まって開演した。当日の演目、出演者など内容については省略する。大枠の流れは平成22年10月開催の川俣農村舞台公演の詳細から類推できる。

継承公演となる「川俣農村舞台公演一ゆ^{よみがえ}ずの里 今蘇^ふる 襖^{ふすま}からくり」川俣農村舞台保存会主催（会長蔭原義雄）は平成22年10月17日（日）に礪^{つがて}神社境内の川俣農村舞台で開催された。徳島県全国文化祭から数えてちょうど3年目のことであった。

公演のタイトルにある襖からくりとは、表と裏とで違う絵が描かれた襖を三味線

（道具返し）と拍子木に合わせ、襖を巧み

なからくり技術で操り、様々な場面を演出する技法。1つの場面には、通常、襖8枚を使う。表から裏へ一斉にひっくり返す「田楽返し」、襖が左右に開くと後ろに別の襖が現れる「引き分け」などがある。今回の公演では40枚の襖が用いられた。昭和の初めの製作として伝わっているが、特殊な色材を用いているので未だに色鮮や



【公演に参加する青年団員】

かである。

県レベルのイベントと同様に地域内外の各種団体から支援を受けたが、形式的な名義使用ではなく実質を伴っている。以下は当日のプログラムよりの転載、要約。

出 演 丹生谷清流座、桜谷小学校、地元文化団体、川俣農村舞台保存会、
あわ工芸、青年座、ポラリス座、城北高校民芸部、若葉会、ゴンサキ、
天祐連

協 賛 『ゆとり宣言』フェスティバル実行委員会、徳島県文化祭開催委員会
助 成 (財)徳島県文化振興財団、徳島県企業局ダム水源地サポート事業
協 力 那賀町、那賀町文化協会上那賀支部、(財)阿波人形浄瑠璃振興協会、
NPO法人阿波農村舞台の会、裏千家淡交会上那賀教室

後 援 徳島県、那賀町教育委員会、徳島県PTA連合会、(財)徳島県観光協
会、(福)徳島県社会福祉協議会、那賀町文化協会、徳島新聞社、読売
新聞大阪本社、朝日新聞徳島支局、毎日新聞徳島支局、日本経済新聞
社徳島支局、日本経済新聞社徳島支局、共同通信社徳島支局、時事通
信社徳島支局、デイリースポーツ社、NHK徳島放送局、四国放送、
ケーブルテレビ徳島、エフエム徳島、エフエムびざん、あわわ

上記 38 団体の他、5 団体が協賛広告掲出

支援・後援を各分野から受けることは当然のこのように考えられるかもしれないが、その意義は単に財的支援、便宜供与、広報周知などを受けることにとどまらない。地域住民として限定されている従来の関わりから更に開かれた関係すなわち人と人の繋がり、絆を新たに構築する契機として重要な意義を有している。

短絡的な表現かもしれないが、農村舞台公演を行うことを契機として人と人の新しいつながりが広がっていくのである。このことにより「新しい公共空間」の創出が可能になる。まさに「可能性のつながり」である。

(2) 特徴ある取組

「人形浄瑠璃で地域をつなぐ」一徳島県那賀町青年団一について、この調査研究委員会では次のような経緯で検討を進めた。

第2章総論で述べたように、本調査研究は活動全体を4分類とし、各分類に適合すると考えられる事例を収集し、その内容を検討し選択した。

那賀町青年団の活動事例は分類1「地域課題の解決に寄与するボランティア活動」(地域課題の解決、地域社会のニーズに応える事例)に相当するとして分類づけされた。

那賀町青年団の方々の受け入れによって調査を実施することが出来た。感謝し、この欄をお借りしお礼を申し上げたい。

那賀町青年団の活動事例の特徴を述べるにあたって、那賀町という地域についての情報の整理を試みておく。

行政区 那賀町 平成17年3月1日に5町村(鷲敷、相生、上那賀、木沢、木頭)
が合併

人 口 10,540人(平成21年7月現在)

面積 694.86 km² 可住地面積 34.93 km² 町全体の約 5 %
高齢化率 町全体 39.3% 木沢地区 47.8% 大字高野 77.8% (平成 21 年 7 月現在)
通勤 町内 84.5%
通学 町内 68.8% (平成 17 年国勢調査)

ア 思いを基礎とする活動

那賀町青年団発行資料に、活動を展開している青年たちの思いが率直に綴られている。

“私たちを育ててくれた地域に感謝し、恩返しをしたいと思います。また、子どもたちに青年の目線から古き良き伝統や風習を伝え、素晴らしい風景やつながりに気付いてもらい、若い世代からも新しい感覚で町に対しての喚起を促せるようになれば、私たちの町、那賀町がより良い町になるのではないかと考えています。” (部分転載)。

お年寄りのケア、子どもたちの育成など地域課題は多く深刻な問題となっている。そうした事態に対するハード（経済的支援および心身と暮らしのサポート、必要な法律、制度、施設などの整備）な局面が極めて重要であることは指摘するまでもない。そうした面での地域対策は漸進的であっても進めなければならない。

しかし、人びとからの求めに対応するソフトなアプローチがより必要な事態となっている。それは先に引用した青年たちの思いを真摯に受け止めることに通ずる。

このように主張するとその考えに対して、観念的であり情緒的な方法では事態の解決にはならないと反論されるかも知れない。では、川俣農村舞台での今年の公演を観に来ていたお年寄りの女性が、“娘のときに観たけど、もう 2 度と見ることはできないと思っていたのに、人形芝居が見られた。こんなうれしいことはない。若者たちに手を合わせます。”と語っていた。

生涯のまとめを行う時期の思い、そして心からの願いを聴き取ることの重みを理解しなければならない。人形浄瑠璃が地域の伝統文化であり重要であることは言うまでもないが、お年寄りの思いはそれ以上に大切なのではないか。

思いを大切にしようことによって地域を支える絆の力が強まる。

イ 意図ある必然的な学びの活動

イベントとは限らないが、地域活動を展開するとき多くの場合はプロデューサーの役割が重視される。その役割は環境を整え、必要な条件を整備し、時によってはスポンサーを見つけることもあろう。だが、那賀町青年団はそのような役割を担うという視点から、活動を展開していったのではない。

農村舞台という昔の大切な、しかし、あまり目立たない施設が自分たちの町に多くあることに気づいた。当然だがそのことに青年たちが関心を持ったのはニュースによってであったかも知れない。そして、そのことからその舞台で演ずる阿波浄瑠璃人形芝居を受け継いでいる人形座が高齢化により衰退し継承が危ぶまれていることを知ることとなった。

そこでプロデューサーの役割ではなく、自分自身、自ら人形浄瑠璃を学ぶことを

選んだのである。学習が始まった。これこそ、生涯学習である。

一般の生涯学習は教養講座などカルチャー型が多いが、それらは何かについて知りたいという知識の吸収と獲得を主たる動機としている。しかし、学ぶことによって何が起きるのか、どのような新たな行動が可能になるのかについては考慮しない。

極端な表現をすると学びばっなし、教えばっなしである。

那賀町青年団は人形座の継承という切実な目標によっての学びに取り組んだ。自分のためという動機に基づく学びではない。他のため言い換えれば社会のためである。更に言葉を重ねるならば、新しい公共を創るための学びである。

何を学ぶかではなく、何故、学ぶのか、学んだ後に何か起きることを期待する真摯な学びであった。お年寄りの思いに共振した若者の思いという活動事例である。

ウ ボランタリィな活動

一般的な考えであるかどうかは別だが、ボランティアとボランタリィとは異なるという考え方がある。その違いについては次のような例えであれば容易に理解できるかも知れない。

ボランティアだから他人や社会のために活動するというが、ボランティアでなければ誰のためにも何もしないのか。

そばで人が転倒したらボランティアだから手を出すのか、ボランティアでなければ手を出さないのか。

我が国の文化はもともと互いを思いやり、共に生きるという思想を基底に有している。しかし、社会が大きく変化し、思いやりや共に生きるという思想を顧みないまま進んできた。

限界集落、準限界集落で暮らす人々のみとは限らないが、誰でも様々な状況に遭遇する。その状況に出会うとまず行動を起こす。その行動を起こす気持ちが我が国の文化である。

文化はその地域とその人に与えられた環境によって形成され、言葉、食べ物、共同行動の仕組みなど固有の属性を有する。村のお地蔵さんに見られる原初的宗教性も貴重な文化遺産である。

そばで人が転倒したら思わず駆け寄るというその態度と行動をボランタリィと称する。ボランティアであるかどうかとは別次元にある行為である。

那賀町青年団の青年たちにボランティアですかと聞けば“違う、ただ何かしなければと思ってただ”という返事が返ってくるだろう。何かしなければという気持ちと行動をボランタリィと称するのである。

このような考えに立つと、ボランティア育成、養成などということはどのような意義を持つのであろうか。ボランティアよりもボランタリィな気持ちを持っている人を目標とすることが求められている。那賀町で活動している若者たちはボランタリィな生き方を選んでいる。

4 成果と課題

(1) 成果

ア 活動目標の達成

既に述べたように、この活動の目標は伝統芸能である阿波浄瑠璃人形座の継承と発展であり川俣農村舞台の保存であった。活動の開始にあたって確信はなかったとしても目標に掲げた希望に向かって進んだ。

様々な人々と様々な機会に恵まれ、川俣農村舞台公演を再開し、人形浄瑠璃「丹生谷清流座」を発足することができた。青年及び支援・後援した人々と達成の喜びを分かち合うことができたことが第一の大きな成果である。

イ 人と人のつながりと次世代リーダーシップの獲得

人形浄瑠璃を懐かしい農村舞台で再び見ることができた幸せをお年寄りの方々は感じられた。お年寄りの喜びは青年たちの喜びとなった。

人間にとっての最高であり究極の自己実現は自分のためだけではなく、誰かのために存在し、誰かのために行動する生き方である。

現在の自分にもみ関心を向けるのではなく、地域のお年寄りや社会に関わることを通して新しい自分を実在化させてゆく。

那賀町の青年たちは活動を通して人に繋がり、新しい自分を獲得した。別言すればリーダーシップを身につけたのである。あらゆる地域が懇望している次世代の力となる。

ウ 地域密着型組織化の実現

地域の既存組織あるいは伝統的な体制に対して批判的な見方が強い。現存の地域体制では急激な社会変化に適応し有効な働きを展開することが困難であるということは現実である。しかし、都市化の弊害をまぬかれている地方の地域社会においては新たな社会体制を確立する環境におかれていないうえに緊急かつ具体的に課題を解決することが求められている。

人口過疎地域の問題は国レベルでの対策を要する。例えば、これまでの林業・農業政策の方向を転換しなければならない。しかし百年河清を待つことは出来ないから、とにかく地域が現状を引き受けなければならない。

那賀町青年団の活動は、地域力を十全に引き出すことを試みた。その基盤は伝統的組織を広域的につなげたことにある。

エ 学習から行動へ

この調査研究の役割は、地域での生涯学習を行動に移してゆく仕組みの実体と可能性を明らかにすることである。那賀町の青年たちは現存する農村舞台の数が全国的に見て最も多数であることから、そのことを誇りに思うと同時に人形浄瑠璃の存続が必要と考え、既に見てきたように自ら学んだ。趣味、教養としての生涯学習ではなく直接的な行動目標を目指しての人形浄瑠璃技能の獲得であった。

5 今後の方向性

新たな目標として、地域に現存している伝統芸「吹筒花火」の継承をあげることができる。

すでに、那賀町青年団の組織の中に位置づけられ団長も決定している。

火薬を扱うことから人形浄瑠璃とは異なった取り組みが求められよう。安全対策としての環境条件があれば披露することが可能である。イタリアが消防活動の始まりだと言われており、初期に活動していた人々をボランティアと呼んだという記録がある。その



【吹筒花火】

史実が保存されているイタリア初代消防署の銘板として刻まれている。

江戸の火消し制度は単に防火・消火の役割にとどまらず、様々な形で地域生活にかかわっていた。地域で暮らしている人びとが自分たちを守り発展させるという伝統の復活、復興を「吹筒花火」を通して那賀町の青年たちは目指しているのであろう。

大がかりな人形浄瑠璃公演は数年おきに開催するとし、その間をつないで地域であるいは全国訪問公演も一つの途かもしれない。いずれにしても那賀町の青年たちが選び行動することを期待したい。

6 考察

那賀町青年団活動の調査を担当した立場からの考察が求められているが、多くはこれまで述べ指摘したので、ここでは項目を挙げるにとどめる。

(1) 地域課題を活動の目標に

このことは、趣味、教養、レクリエーション、スポーツにかかわる学習であったとしても、学んだ後に地域でどのように行動するかについて、あらかじめ想定し、仲間たちと討議しておくことを必須とする。すなわち自らが行動を起こし、地域や人々に新しい方向と方法に関わっていくことである。その関わりを「新しい公共」と位置づけることができる。

地域の暮らしにかかわる課題にどのように取り組むかが、今後とも青年たちに期待されていることであろう。

(2) ボランティアよりもボランティアを

災害救援ボランティアのように焦点化された行動をとることが通常であり、社会福祉をはじめ地域課題が山積している。その一つひとつに対応して〇〇ボランティアと区分することは無意味である。地域の暮らし全般にかかわる地域ボランティアという表現もあるが、その意はボランティアに行動するマインドであろう。

青年たちがボランティアとしての態度、思考、行動を示すことに期待がかかっている。

(3) 文明を超えて地域文化を

文明と文化の違いについて述べるいとまはないが、文化はその地域に歴史的に積み重ねた地域特性である。人形浄瑠璃や農村舞台を通じて青年たちはそのことを学んだのではないか。

筆者の私見だが「新しい公共」は地域固有の文化を認め発展させるつながりを内包する。青年たちは新しい公共に一步踏み出したと言えよう。

(吉永 宏)

<聞き取り調査協力者>

所 属	氏 名
徳島県那賀町青年団 事務局長	湯 浅 悦 司

～分類2～

住民のニーズから生まれたボランティア活動
(地域に生じたニーズがボランティア活動に発展する経緯が明示できる事例)

1 聞き取り調査の概要

(1) はじめに

人々の支え合いと活気のある社会。それをつくることに向けた様々な当事者の自発的な協働の場が「新しい公共」である。

平成7(1995)年1月7日に発生した阪神淡路大震災。全国から集まったボランティア。自分がいることで人の役に立てた、そのことが自分の喜びになることを実感した。人は支え合ってしか生きられない。それが「新しい公共」のひとつの原点だ。平成16(2004)年秋に開館した京都国際マンガミュージアム。地元自治体が長年こつこつと積み立ててきた資金も生かされている。自分たちの町は自分たちで創る。その意気込みでみなが応分の貢献をすることで、支え合いと活気のあるコミュニティができる。徳島県上勝町の高齢者によるコミュニティ・ビジネス「いろどり」。町の高齢化率は50%であるが、寝たきりの高齢者が極端に少ない。住民たちが付近の山で葉っぱを採取し、飲食店の料理の“つまもの”として売り出した。コストが低く、活気があり、満足度が高い地域コミュニティが実現した。ホームレスによる人気の雑誌「ビッグイシュー」の街角での販売。ホームレスの人が自信をつけ自立の契機を得る。市場も、人と人との絆を作る「協働の場」になり得る。

このような現場の活動や経験が「新しい公共」宣言の源であり、こうした活動が多く国民の間に広がることを願うものである。以上、平成22(2010)年6月4日、第8回「新しい公共」円卓会議資料・「新しい公共」宣言からの抜粋である。

いま、環境問題をはじめ、人権、国際化、福祉、子育て、食育など、一人一人が自分の問題として考え、その解決に向けて参加、行動する。こうした姿勢が、国民一人一人に強く求められている。「新しい公共」宣言は、「社会参加宣言」とも言える。



【チューリップのお庭】

(2) 住民ニーズから生まれたボランティア活動

都市化や核家族化が進み、子育て経験の継承や子育てを支える環境が大きく変わってきた。家庭の教育力が低下してきていると言われている。本来、家庭は、幼児期に必要な基本的な生活習慣などを身につける場である。しかし、その役割を果たせないと同時に、子育ての不安や悩み、ストレスによる家庭内での子どもへの虐待や暴力が社会問題化している。また、子どもの生活体験・自然体験・文化体験・社会体験などの不足。ゲームや疑似体験などの一人遊びが増加し、ふれあいや交流を通して、コミュニケーション力などをはぐくみ、自ら豊かな人間関係を構築できる力など、子どもの社会性の欠如も大きな問題だ。

『『チューリップのお庭』水戸プレーパーク*1♪をつくる会』（以下：本事例）は、代表者が、第一子を出産後、子どもに外遊びをたくさんさせてあげたいと思い、乳幼児の親子の外遊びサークルを立ち上げるところから始まった。当初は月2回公園での外遊び、月2回室内でリトミックという活動内容であった。その中で水戸市内の子どもの外遊び場を探したが、児童公園にはあまり砂場を設置していないことから、日常的に水遊び、砂遊び、どろんこ遊びができる場所が少ないと感じていた。そこで、どこかの施設のお庭などを借りて、遊び場を作れないものかと考えていた。理想としては、どこかに空き地を借りて、一から遊び場作りが出来たらと思っていた。そうした折りに、平成19（2007）年大学時代の恩師に相談する。恩師の支援により、現在のプレーパークの地主、S氏と出会う。子どもたちの遊び場として使うことを条件に、所有地の使用について快諾いただいた。その後、茨城県共同募金会の配分を受けることとなり、砂遊び、水遊び、どろんこ遊びが思い切りできるように、本格的にプレーパークづくりが始まった。プレーパークには、倉庫、ポンプによる水汲み場、ビオトープ、砂場、東屋、自由広場、駐車場などが整備されている。広さはサッカー場程度である。サークル活動（水曜日・金曜日各月2回程度）と開園日（遊べる日と作業日各月2回程度）を基本に、イベント（月1回）、地元イベント出展（資金調達のため、活動紹介のため）、遠足、日赤救急救命講習会の参加など、幅広い活動に取り組んでいる。

本事例は、子育てをめぐる問題や子どもたちへの思いや願いが、同じ思いを持った人たちに広がり、自発的・受益者負担を基本に、プレーパークを拠点として見事にボランティア活動へと発展した取組と言える。本事例は、私たちに「やればできるんだ」との思い、勇気、自信を与えてくれる、まさに心に響く取組である。

*1 プレーパーク（冒険遊び場）

プレーパークは、ブランコやシーソー、鉄棒などの遊具が設置された公園とは違い、子どもたちが自らの想像力により、遊びをつくる遊び場である。子どもがのびのびと、思い切り遊べるように禁止事項をなくし、「自分の責任で自由に遊ぶ」ことを大切にして、子どもが遊び場にある道工具や廃材、自然の素材を使って、自分のしたいことを実現していく遊び場である。

昭和18（1943）年デンマークで誕生して以来、その考え方はイギリス、ドイツ、スイスなどヨーロッパ各地を中心に広がり、日本には1970年代に初めて紹介された。昭和54（1979）年国際児童年

記念事業として、東京都世田谷区は地域住民とともに冒険遊び場「羽根木プレーパーク」を開設した。その後「羽根木プレーパーク」は現在まで、世田谷区が事業として位置づけ地域住民が運営するというスタイルで続く、日本で最初の常設の冒険遊び場となっている。近年、責任迫及の風潮が広がり、子どもの行動が規制され、子どもの遊び環境が貧弱化していく中で、住民の自発的な運営により、現在 150 を超える団体が冒険遊び場づくりに取り組んでいる。

(特定非営利活動法人日本冒険遊び場づくり協会ホームページより)

2 組織・運営体制

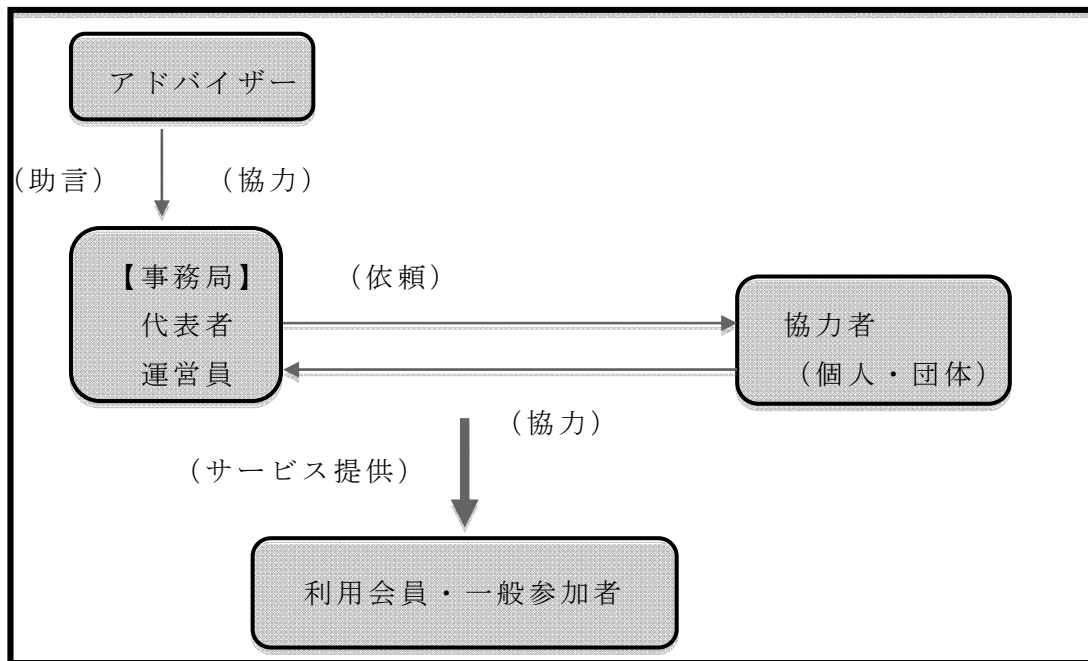
一人の思いや願いがみんなを動かした。本事例は、代表者の心が込められた活動である。思いや願い、メッセージを持つ活動は力強い。また、温かい。反面、一人の思いや願いを組織として機能させることは難しい。代表者は、運営方法に工夫が必要であり、活動を継続させていくことと、活動を広げていくことは難しいと述べている。

(1) 運営システム

基本的にその時の状況に合わせて、組織体制、活動内容、頻度などが決められている。

【表 1】これまでの運営システムの流れ

【平成 19 (2007) 年度】
・代表者が、第一子を出産後、子どもに外遊びをたくさんさせてあげたいと思い、乳幼児の親子の外遊びサークルを立ち上げる。
・日常的に、砂遊び、水遊び、どろんこ遊びができる場所がないと感じる。
・一から遊び場づくりができないか考え始めた。
・恩師の支援により、活動場所を確保する。
・活動に賛同する人々が集まり、会議、作業を行う。
【平成 20 (2008) 年度】
・運営員を中心に会議、作業を行う。協力者の指導により、運営員ではできない作業を行う。事務は、事務局が行う。
【平成 21 (2009) 年度】
・運営員を中心に会議、作業を行う。協力団体のアドバイス、協力による活動も展開する。事務は、事務局が行う。
【平成 22 (2010) 年度】
・運営員を中心に会議、作業を行う。事務は、運営員で分担する。



【図1】水戸プレーパーク♪をつくる会・運営システム

(2) 事務局体制・運営スタッフの構成

事務局は、活動を始めてから現在まで、代表者自宅に置いている。運営体制は、毎年度毎に柔軟に改善している。

【表2】事務局体制・運営スタッフの構成

【平成19(2007)年度】	
事務局体制	：代表者を中心に、必要に応じて賛同する仲間が事務処理を手伝う。
運営体制	：運営には、賛同する約10名の仲間。必要に応じて会議、作業を行う。
【平成20(2008)年度】	
事務局体制	：代表者が行う。必要に応じて副代表、運営員がサポートする。
運営体制	：代表、副代表、事務局、アドバイザー、運営員で構成。組織体制が整う。
【平成21(2009)年度】	
事務局体制	：代表者を中心に、運営員が協力する。
運営体制	：代表、運営員、事務局、アドバイザー、協力団体で構成。協力団体は、プレーパークの機能充実を支援する。ビオトープ、花壇づくりなど。
【平成22(2010)年度】	
事務局体制	：代表を中心に、2名の副代表、約10名の運営員が協力する。
運営体制	：代表、副代表、運営員、アドバイザーで構成。

(3) グループ・団体の構成員

平成 19 (2007) 年度は、代表者及び賛同者で構成。平成 20 (2008) 年度より会員制度を導入。会員は 3 種類。「きらきら☆会員」、「るんるん♪会員」、「ぽかぽか○会員」。
平成 21 (2010) 年度には会員を統一する。運営員も会員に含めた。

【表 3】グループ・団体の構成員の流れ

【平成 19 (2007) 年度】
協力者集会：代表者及び賛同者で構成。
会員制度：特になし。
【平成 20 (2008) 年度】
協力者集会：代表者及び賛同者で構成。(代表、副代表、事務局、アドバイザー、運営員)
会員制度：きらきら☆会員・・・運営、企画を担う。運営員用のメーリングリスト登録。
るんるん♪会員・・・活動参加会員。また、協力者として活動を支援。活動案内やイベント情報、協力者募集案内などの情報を提供。メーリングリスト登録。
ぽかぽか○会員・・・活動を資金面で支援する。支援会員。
【平成 21 (2009) 年度】
協力者集会：代表者及び賛同者で構成。(代表、運営員、事務局、アドバイザー、協力団体)。
会員制度：平成 20 (2008) 年度と同様。
【平成 22 (2010) 年度】
協力者集会：代表者及び賛同者で構成。(代表、副代表、運営員、アドバイザー)
会員制度：会員制度を統一する。会員登録者には、活動予定案内を提供。運営員には、専用メーリングリスト有り。

(4) 過去 3 年間の収支状況

平成 19 (2007) 年度は、主に寄付金、茨城県共同募金会の配当金が収入源である。平成 20 (2008) 年度から会費、参加費収入(受益者負担)を収入源とする。

【表 4】過去 3 年間の収支状況

年 度	収入の部	支出の部	差 額
平成 19 (2007) 年度	573,000 円	不明	不明
平成 20 (2008) 年度	643,467 円	592,727 円	50,740 円
平成 21 (2009) 年度	218,564 円	201,356 円	17,208 円

3 活動の内容

(1) 活動の概要

ア 設立に至った経緯

代表者が、第一子を出産後、子どもたちに外遊びをたくさんさせてあげたいと思い、乳幼児の親子の外遊びサークルを立ち上げる。月 2 回公園での外遊び、月 2 回室内でリトミックという活動内容であった。その中で、水戸市内の子どもの外遊び場を探したが、児童公園には砂場を設置しているところが少ないことなどにより、日常的に水遊び、砂遊び、どろんこ遊びができる場所が少ないと感じていた。

そこで、どこかの施設のお庭などを借りて、遊び場を作れないものかと考えていた。理想としては、どこかの空き地を借りて、一から遊び場づくりが出来たら楽しいだろうな、と思っていた。

平成 19 (2007) 年 4 月、そのことを大学時代の恩師に話をしたところ、その話をご友人の H 氏にされ、H 氏をご友人の地主の S 氏を紹介。S 氏は、子ども達の遊び場に使うのであれば、所有地を使ってもかまわないということで、快諾してくださった。

平成 20 (2008) 年 4 月、契約期間 10 年、返却時には、更地に戻すこと、きちんとした団体をつくり運営していくことなどをお約束し、契約書を作成した。連帯保証人として、H 氏がなってくださった。

当初、外遊びサークルで使用できればと思っていたが、空き地を遊び場として整備しなければならず、お母さん達の力だけでは不十分であったため、新しく団体を立ち上げることとなった。

遊び場の作り方など全くわからなかったが、代表が学生時にボランティア団体を立ち上げ活動していた経験があり、その時のつながりからの協力者がいたことから、活動の展開に見通しがつき、この活動を始める勇気と自信が得られた。

5 月に茨城県共同募金会の配分金の申請があり、砂代と水道の新設代を申請する。

8 月に総額 432,000 円の配分が決定する。そこから、本格的に活動を開始する。運営員を募集、既存の冒険遊び場を見学する。

9 月水戸プレーパーク♪をつくる会を設立する。

イ 設立の意図・目的

乳幼児が砂遊び、水遊び、どろんこ遊びを思い切り出来る遊び場をつくる。将来的には、小学生以上の子どもも遊べる遊び場へと広げていくこと。

ウ グループ・団体の主な事業の概要

主な活動は、プレーパーク「チューリップのお庭」を拠点とした活動である。また、地元イベントなどへの出店など、拠点外活動に大別される。

【チューリップのお庭の活動（拠点活動）】

(ア)：サークル活動

- ・まっくろけっけサークル（金曜日 14:30～、月 1、2 回程度）
- ・そよちゃんサークル（水曜日 10:30～、月 1、2 回程度）

(イ)：開園日

- ・遊べる日（作業やイベントのない開園、月 1、2 回程度）

(ウ)：ワーキングデイ

- ・子ども達と遊びながらのお庭の作業（月 1、2 回程度）

(エ)：イベント

- ・様々なイベントを企画（月 1 回）

【その他（拠点外活動）】

(ア)：地元イベント出店

- ・活動資金調達のための出店（2010 年度 10 月 23、24 日）

(イ)：地元イベント出店

- ・チューリップのお庭の出張企画（2008、2009 年度）

(ウ)：フリーマーケット出店

- ・活動資金調達のため出店（年 1 回）

(エ)：救急救命講習会

- ・運営メンバーが日赤の講座を受講（2009 年度）

(オ)：遠足

- ・アスパラ狩り（2008、2009 年度）



【フリーマーケット】

エ 発行物

目的、対象者別に様々な発行物がある。

- (ア)：初来園者・・・ 団体概要、活動計画、会員申込み、利用ガイド。
- (イ)：広報用・・・ リーフレット、活動予定表。
- (ウ)：会員・・・ 報告書、活動計画書。

(2) 特徴ある取組

ア 自発的・受益者負担が基本

一般的な定義として、ボランティアとは、ボランティア活動に携わる個人（人）のこと。「自発性（自主性）」、「無償性（無給）」、利他性（社会、公共、公益）に基づく活動とされる。

本事例は、代表者が実生活の中で感じた子育て環境のニーズから生まれた。代表者の思いや願いが賛同者、協力者との連携で、見事に自発的・受益者負担を基本に取り組みられている。

イ 無償力の特徴を生かして

一般的に、地域活動の資源は、「人」、「もの」、「金」、「情報」と言われる。また、4つの資源に加え、「協働」、「ネットワーク」の活用も大切だ。昨今、「協働」については、行政や企業が注目している。「協働」とは、複数の主体者が、何らかの目標を共有して、お互いに持てる資源を合わせた活動とされる。

特に、ボランティア活動における資源活用では、「無償力」の特徴を最大限に生かしたい。「無償力」の特徴を生かすことで、営利活動では得られない成果を上げることが可能である。

本事例では、実に見事に無償力の特徴が効果的に生かされている。具体的には、活動拠点のプレーパークの場所の確保、様々な器材、備品などの調達、日常の活動資金の確保、活動管理、運営などである。

ウ 夢がある、夢が広がる、生かし合う

ボランティア活動では、ボランティアはボランティア、最初から最後までボランティアで終わっている場合が多い。最初はボランティアだが、学習や経験を積み重ねることで、ボランティアからスタッフへ、そして自らNPOを立ち上げて実践していく。こうした成長できる人材活用が大切だ。

本事例では、賛同者が本活動を通して、お互いに学び、経験をしながら、やがて運営スタッフとして中心的な役割を担う人材に成長している。ボランティアに夢を与え、夢が広がる、夢あるボランティア活動である。また、他のボランティア団体との連携がスムーズに図られている。ウクレレ教室で学ぶ人たちのボランティア団体の協力によるミニコンサートをはじめ、お互いに生かし合うことで、活動の充実が図られている。



【ミニコンサート】

4 成果と課題

(1) 成果

何と言っても一番の成果は、代表者を中心に、当初の思いや願いが「形（プレーパーク）」となり、継続した賛同者や協力者の社会参加の機会が得られていること。

第二に、地域の子どもたちに、砂遊び、水遊び、どろんこ遊びなどの機会が提供されていること。

これからのまちづくりに大切な「人と人とのつながり」、「お互いの協働」、「自分た

ちで何とかしたい気持ち」など、実践を通じた人的な成長、心の広がり、地域の活性化にとっても大きな貢献だ。また、子どもたちだけでなく、活動を通して出会った親と親の間にも、新しいつながりが生まれ、子育てに関する不安や悩み、ストレス解消などにつながっている。さらに情報交換などにより、本活動だけでなく、他のプログラムや活動へ参加するなど、行動範囲が広がっていることだ。

一人の思いや願いが、多くの人たちの社会参加を後押しするとともに、地域の活性化につながっている。とても素晴らしい、貴重な成果である。

(2) 課題

これまでの活動における課題は、他団体との関係であった。プレーパークを整備する中で、複数の団体から指導、支援をいただいた。結果、当団体が求める内容と、団体が指導、支援したい内容に食い違いが生じた。また、必要以上に活動内容に干渉するなど、団体間との関係、調整には苦労した。その後、自発性の観点から、「お願いする関係」から「協働する関係」に考え方を転換した。

今後の課題は、代表者が再来年度から仕事を始めることや、他にもやってみたいことがあるなどの理由により、現代表者が中心となり、このままの運営の仕方では活動を継続すること、活動を広げていくことが難しいことである。課題解決にむけて、来年度からの方向性をどうしていくか思案している。

5 今後の方向性

代表者にとって遊び場づくりをすることは、自分のやりたいことであった。しかし、再来年度から仕事を始めることや、他にもやってみたいことがあるなどの理由により、現代表者が中心となり、このままの運営の仕方では活動を継続すること、活動を広げていくことは難しい。そうした中、代表者としては、下の子が小学生になるまで、あと4年ぐらいは遊ばせてあげたい思いがある。また、運営員にとって、有意義な活動である。各運営員は、それぞれの思いや考えがあって活動に参加している。しかし、諸般の事情により、活動に関わる頻度が少なくなっている。特に中心メンバーは、小さい子どもがいるお母さん達であるため、代表を引き継ぐことは難しい。

こうした状況であるが、遊びに来る子ども達が思い切り遊べる場であること、これからもたくさん子ども達に思い切り遊んで欲しい、子どもを遊びに連れて来るお母さん達も楽しく過ごせる、子どもたちと共に楽しんで欲しい、などの思いがある。また、この地域（水戸市）に、野外の遊び場がある意義を考える機会となる。

そのため、協力者、賛同者、協働団体などの考えを聞きながら、すべてが円満になる選択をしたい。選択肢はたくさんあるが、バランス（調和）のとれた活動をするを大切に、検討していく。

6 考察

いくつもの難題を乗り越えて、プレーパーク（拠点）を所有し、素晴らしいアイデアで、楽しいプログラムを提供している。代表者の熱意と努力、賛同者や協力者の温かい

心と支援。さらに参加者がプレーパークを大切にしたいと思い、有意義に利用していること。本当に素晴らしい取組だと感じた。

一人の思いや願いは、多様な人たちの支援と連携があれば、必ず実現することができる。本事例は私たちに教えてくれた。

ボランティア活動では、活動資源である「人」、「もの」、「金」、「情報」、そして「協働」、「ネットワーク」などのマネジメントが課題と言われている。このマネジメントの課題には段階がある。本事例のように、一人の思いや願いと、みんなの知恵とアイデアを出し合い、協働することができれば、素晴らしい取組ができる。しかし、この取組を継続させる、広げるには、専門的に、日常的に関わることができる人材の育成、確保が課題となる。本事例でも同様である。おそらく多くの全国のボランティア活動にとって共通している課題ではないか。

京都では、「産（企業の社会的活動を支える人材）」、「官（公的サービスが求める人材）」、「学（知識と実践の基盤を担う人材）」、「民（新しい公共を担う人材）」が連携して、地域公共人材*2の育成を行っている。こうした地域総ぐるみで、職業人としての地域公共人材の育成を図ることは、これからのボランティア活動を推進していくために大切である。

*2 地域公共人材

「異なるセクター間の文化的・機能的な壁を越えて、協働型社会（マルチパートナーシップ）における地域の公共的活動や政策形成を主導したり、コーディネートできる人材」のことを指します。

（一般社団法人地域公共人材開発機構ホームページより抜粋）

（藤井 誠）

<聞き取り調査協力者>

所 属	氏 名
水戸プレーパーク ♪をつくる会 代表	藤平 理恵

3 「仕事人と語ろう」－おうみ未来塾『仕事人と語ろう』グループ

～分類3～

ボランティア活動とネットワークづくり
(組織化や協働により地域のネットワーク化に役立つボランティア活動の事例)

1 聞き取り調査の概要

「おうみ未来塾*1『仕事人と語ろう』グループ」は、分類3「ボランティア活動とネットワークづくり」(組織化や協働により地域のネットワーク化に役立つボランティア活動の事例)としての選定であり、ボランティア活動が人と人をつなぎお互いを活かし合いながら成果を収めている事例である。

同グループは、おうみ未来塾10期生の中の有志6人で構成される。おうみ未来塾とは、財団法人・淡海(おうみ)文化振興財団が主催して平成11年から実施している事業で、企業や行政だけでは解決できない地域課題に取り組むための地域プロデューサーを養成するために実施している。同グループの事業内容は、小中学生のために様々な分野のプロフェッショナルを招いて仕事の楽しさや厳しさを学び、子どもたちの職業観を開いて、家庭や地域コミュニティを活性化させようとするものである。3の分類で選定されたのは、同グループのメンバーが持つ幅広い職業人の人脈(ヒューマンネットワーク)から講師を依頼し派遣していること、小中学校との連携や、滋賀県教育員会生涯学習課が設置した「しが学校支援センター*2」との連携・協働で、学校現場のニーズを把握しながら事業を実施し地域のネットワーク化に役立っていることによる。

加えて、ニートやフリーターが社会問題化している昨今、子どもたちに仕事の楽しさや厳しさ、やりがいなどを伝える機会が求められており、そのニーズに応えるために同グループが設立され活動しているため、分類1「地域課題の解決に寄与するボランティア活動(地域課題の解決、地域社会のニーズに応える事例)」の要素もある。

聞き取り調査は、平成22年10月20日、大津市立仰木の里東小学校6学年の総合的な学習の時間で、「働く人から学ぶ」というテーマで行われた授業を対象に、現場の状況とグループメンバーの生の声を聞くために実施した。この総合学習は、おうみ未来塾「仕事人と語ろう」グループのコーディネートによるもので、滋賀県教育委員会生涯学習課の協力のもとで開催されたものである。

グループのミッションは、「義務教育修了までに、すべての子どもに、自立して社会で生きていく基礎を育てる」としている。子どもの自立を促すための課題について、この事業を通じて解決に導こうとするものである。

ニート、フリーター問題には、職業観の醸成。

個人主義の拡大には、コミュニケーション能力の育成。

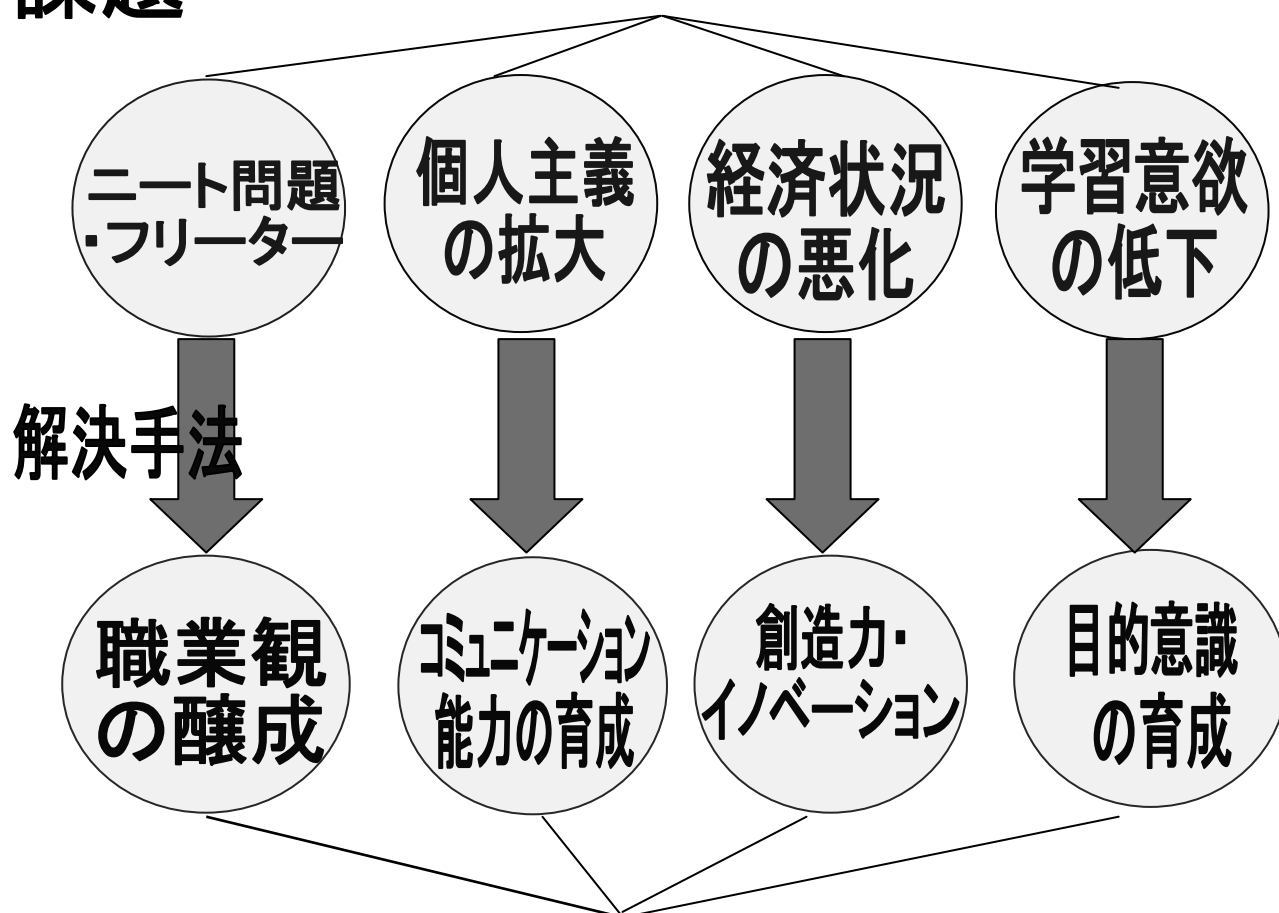
経済状況の悪化には、創造力・イノベーション。

学習意欲の低下には、目的意識の育成。

これら4つの課題に対する解決手法として、「仕事人と語ろう」事業を実施している。

子どもの自立

課題



仕事人と語ろう！

*1 おうみ未来塾

「おうみ未来塾『仕事人と語ろう』グループ」は、おうみ未来塾10期生（平成20年6月～22年3月）の中の有志6人で構成される。おうみ未来塾とは、財団法人・淡海文化振興財団（平成9年に設立した県等の出資による財団。愛称：淡海ネットワークセンター）が主催して平成11年から実施し

ている事業で、企業や行政だけでは解決できない地域課題に取り組むための地域プロデューサーを養成するために実施している。同財団が定義する「地域プロデューサー」は、地域の課題を発見し、解決のための方策を考え、そのための活動の実践や事業を興すことのできる人、としている。応募資格は、18歳以上で地域社会の課題解決や市民活動に主体的に取り組む意欲のある方。県民であるかどうかは問わない。会費は4万円。受講期間は10期までは24ヶ月であったが、平成22年度募集の11期から原則として16ヶ月とした。受講者は、各地のフィールドワークが中心の基礎実践コースと、地域プロデューサーのためのグループ活動を行う創造実践コースの両方を受講する。

同塾では、(1) 塾生の主体的な参加による塾づくり、(2) 多彩な塾生で構成、(3) 地域や活動の現場からの学びと実践、(4) 幅広いネットワークの形成、の4点を特徴として挙げている。

平成13年3月に第1期生が卒塾して以来10期生まで237人が卒塾し、平成22年度現在11期生29人が在籍中である。卒塾生は地域プロデューサーとして、それぞれにグループを構成し、現在約50グループが教育、福祉、環境、防災など幅広い分野で地域課題解決のために活躍している。

*2 しが学校支援センター

平成19年度に滋賀県教育委員会生涯学習課が「地域の力を学校へ」推進事業を立ち上げ、その一環として平成20年度に「しが学校支援センター」が設置され、地域の人々や企業・団体等が学校を支援する仕組みづくりを推進している。具体的には、学校支援メニューを用意し、学校側が必要とする人材の派遣要望に応じてコーディネートする役割を担っている。学校支援メニューは、平成22年11月16日現在で128団体193メニューが登録されており、分野別にまとめられている。分野は、食育、自然・環境、福祉・ボランティア、文化・伝統・芸術、安全、金融・経済、国際理解、科学(理数)、その他となっており、多岐にわたる。「おうみ未来塾『仕事人と語ろう』グループ」も登録団体の一つである。学校支援メニューは、専門的な知識や経験・技能を持つ支援者(地域の人々・企業・団体等)が提供する学校等での出前授業や見学受け入れ等のメニューであり、滋賀県学習情報提供システム「におねっと」を検索するとテーマや内容についての情報を入手できる。

登録数や実績については、下表のとおり年々増加している。

年度	登録団体数	メニュー数	コーディネートした学校数
19	74	99	10
20	94	138	27
21	106	157	39
22	128	193	39

※平成22年度は11月16日現在。

大津市立仰木の里東小学校での事業についても、しが学校支援センターから県生涯学習課社会教育主事の宮崎良一氏と同課学校支援ディレクターの上等根美氏の両氏が駆けつけており、おうみ未来塾『仕事人と語ろう』グループの3人の共同代表とともに授業支援を行っていた。

2 組織・運営体制

「仕事人と語ろう」グループは、おうみ未来塾10期生23人のうち6人で構成され、小中政治氏、松原弘保氏、安藤和人氏の3氏が共同代表を務める。

小中氏は大津市職員。松原氏は民間のビジネスマンとして大阪市内で事業を経営。安藤氏は長浜市職員だが、現在県に出向している。他のメンバーは、石村嘉則氏、中田恵理香氏、山城智恵子氏の3氏。石村氏は県内民間企業の経営者。中田氏はグループ結成当時公民館副館長で現在は民間企業勤務。山城氏は湖南市職員である。

運営システムとしては、自主的にイベントを開催する場合と学校からの依頼によって開催する場合がある。自主的なイベントでは、地域で活躍する様々な仕事人を学校や公民館に招き、グループ形式あるいはパネルディスカッション形式で「その仕事に就いたきっかけ」「その仕事の楽しさや辛いこと」「小中学生のときに何をしておけばよいのか」などの話を親子で聞いてもらったり、実際の職業を簡単に体験していただいたりして、親子で職業に関する理解を深めてもらうことを目的としている。学校からの申込みには、小中学校から直接申し込まれる場合と、県を通じて申し込まれる場合がある。県を通じる場合は、同グループが滋賀県教育委員会生涯学習課の「地域の力を学校へ」推進事業の登録団体であることから、小中学校から県に申込みがあったものの中から、学校支援ディレクターを通じて小中氏に依頼の連絡が入り、その後、グループメンバーが学校担当者と打ち合わせを行い、希望の仕事人が決まると、グループのヒューマンネットワーク（【別表1】p.44参照）により仕事人に出演交渉を行う。

今後は、滋賀県との連携により学校支援（中間支援）をメイン活動として、学習塾や公民館でも要望に応じて実施したいとしている。

年間の活動収支をみると、平成21年度分では、収入はグループ活動費の5万円と公民館からの若干のお礼、支出は名刺・消耗品・通信費等である。収入のグループ活動費は、財団法人・淡海文化振興財団から支給されている。（【別表2】p.47参照）

3 活動の内容

（1）活動の概要

共同代表の一人である小中氏はグループ設立のきっかけを次のように語る。

「小さいときから、テレビのニュースでいろいろな出来事を見てきていますが、このごろ起きている世の中の出来事や事件などは、当時の感覚からすれば『信じられない状況』です。このまま行くと世の中はどうなってしまうのか、日本の将来を危惧しています」。この危機意識は、6人のメンバーも共通のものだった。

折しも、約60年ぶりに改正された教育基本法により、平成20年7月、新たに「教育振興基本計画」が策定された。そこには、今後10年間を通じて目指すべき教育の姿として、「義務教育修了までに、すべての子どもに、自立して社会で生きていく基礎を育てる」ことが掲げられ、また、「教育の振興は、社会全体で取り組むことが求められている」としている。このような国の基本政策からしても、学校・家庭・地域の連携・協力を強化し、社会全体の教育力を向上させることを目的に、「仕事人と語ろう」を事業目的とした青少年教育を行うこととした。加えて、小中氏が大学院在学中に専攻した社会問題化するニートについての研究成果も、グループ設立の理論的裏づけの一つとなった。

小中氏が「仕事人と語ろう」という名称に出会ったのは、平成15年2月に神戸市

で開催された事業だった。空き教室を利用しNPOが主催した催しで、小中氏自身も市役所の仕事人として招かれ参加していた。そして、子どもたちの真剣なまなざしに応えるように語りかけ、気がつけば、小中氏自身が逆に勇気づけられ、講座が終わると何ともいえない達成感を感じることができた。「無償でもこんなに達成感を感じることができるのか・・・」、小中氏の率直な感想だった。その後、こんな事業をいつか滋賀県でもできたら、という思いを持ち続け、おうみ未来塾のグループメンバーに話したところ、快く了承された。今の子どもたちを取り巻く環境はこんなことでよいのか・・・。次の次代を担って行く子どもたちに直接伝えることができないか・・・。志を同じくした6人が、神戸の「NPO法人・ライフ&キャリアサポートセンター」が主催する同名の事業に小中氏が参画した体験談を基に、平成21年1月、「おうみ未来塾『仕事人と語ろう』グループ」を立ち上げたのである。

(2) 特徴ある取組

平成22年10月20日、大津市立仰木の里東小学校では6学年の総合的な学習の時間で、「働く人から学ぶ」というテーマで授業が行われ、今回取材させていただいた。おうみ未来塾「仕事人と語ろう」グループのコーディネートによるもので、滋賀県教育委員会生涯学習課の協力のもとで開催された事業である。

講座は学校側の趣旨に基づいて、同グループが仕事人リストの中から8講座の仕事人を選定して依頼した。職業は、大工、獣医師、保育士、パティシエ、看護師・助産師、救急救命士、農家、テキスタイルデザイナーの各職種。第一部は、午前10時45分から11時30分までの45分間とし、第二部は、午前11時35分から12時20分までの45分間として、子どもたちが複数の話を聞くことができるよう、クラスの入替えを可能にした。

午前10時過ぎ、仕事人、同グループメンバー、県職員、学校職員など20名が校長室に集まり、同校の堤三枝子校長のあいさつと趣旨説明が行われた。その後、会場となる3階に移動してそれぞれ配置についての説明があった。

※ それぞれの感想（資料提供：しが学校支援センター）

ア 「大工」講座

【講師の感想】

仕事への努力は、同じ職に就く人の仕事をよく見ること、昔の仕事を勉強することです。そして人と地域に喜んでもらっているものを作っているという思いやりも大切です。

【子どもたちへのメッセージ】

自然と交わってほしいです。

【子どもたちの感想】

大工さんの授業は、いろいろな木の種類や木の楽しさ、建築のことについて分かりました。体験もできたので楽しかったです。

イ 「獣医師」講座

【講師の感想】

私語もなく、一生懸命話を聞く姿は、知識欲のかたまりに見えました。

【子どもたちへのメッセージ】

君たちの前には、過ぎ去ってしまった道を含め、たくさんの道があります。その道には、たくさんの人たちが様々なことをしています。人との出会いが人生を大きく左右します。じっくりと見つめ、一回しかない人生を楽しむ努力をしましょう。

【子どもたちの感想】

獣医さんの本当の仕事、獣医さんのいろいろなことが分かってよかったです。動物の毛皮に触れられたのも良かったです。

ウ 「保育士」講座

【講師の感想】

子どもたちは、様々な職種の仕事のことや、その仕事をされている人の思いや願い、生き方を直接聞くことができ、とてもよい経験で、意義のある授業であったと思います。話をさせてもらう私も、自分の仕事について振り返ることができ、未来ある子どもたちに希望や期待を持ってもらえる機会を与えてもらったことは、よい経験になりました。どんな仕事でもこれでOKということではなく、努力することは必要です。つらいこともあります。保育士の仕事は子どもたちからパワー（元気と笑顔）をもらい、楽しい毎日です。いつの日か一緒に仕事ができる日を楽しみにしています。

【子どもたちへのメッセージ】

広い視野で興味・関心を持ち、いろいろなことに挑戦することが、将来どんな仕事についても役に立つのではないかと思います。心身ともに健康であってほしいです。

【子どもたちの感想】

保育士さんになりたいので勉強になりました。保育士さんの子どもに対する愛情がよく分かりました。手遊びが楽しかったです。

エ 「パティシエ」講座

【講師の感想】

私の4つの誓いは、1. 真実、2. 公平、3. 友情、4. 人や世間の役に立つ、です。

【子どもたちへのメッセージ】

小中学生が勉強していることは、社会へのルールを学んでいることだということを伝えたいです。

【子どもたちの感想】

パティシエの仕事がどれだけ大変か分かりました。整理整頓、清潔を大切にすることがわかりました。お菓子のことがいろいろわかってうれしく思いました。

オ 「看護師・助産師」講座

【講師の感想】

初めて参加させていただいて、良い経験になりました。各種、職業人の仕事や生

き方を学ぶことは、とても有意義で生きた授業だと感じました。ありがとうございました。

【子どもたちへのメッセージ】

いろいろな体験をして、夢を抱いて生きていってください。

【子どもたちの感想】

助産師さんや看護師さんの大変さが分かりました。人形の赤ちゃんを持った時に、3 kgがこんなに重いことを知りました。

カ 「救急救命士」講座

【講師の感想】

児童たちは皆、熱心に話を聞いており、自分たちの将来の仕事について真剣に考えている様子でした。

小学校の高学年から、様々な職種の人と接し、その職について知ること、将来どのような職業につきたいのか、明確なイメージを持つことが出来ると思います。少しでも救急救命士という仕事について知ってもらうことができ、非常に良かったと思います。

【子どもたちへのメッセージ】

将来、どのような職業を選ぶとしても、その職業の表面的なイメージだけで選ぶことなく、今回のような職業人と接した経験を役立ててほしいと思います。

【子どもたちの感想】

救急救命士の方の、人の役に立ちたいという気持ちが伝わってきて、命を救う事の大切さなどが分かりました。

キ 「農家」講座

【講師の感想】

最後まで熱心に受講していただき、感謝しております。他の講師の方のお話も聞けたらよかったですと思います。

【子どもたちへのメッセージ】

何でも良いので、自分の好きな事（目標）をもって、明るく、元気に活動してほしいと思っています。

【子どもたちの感想】

農業のことがわかりました。お米は大切にしないといけないと思いました。食を大切にすることを心がけていきます。

ク 「テキスタイルデザイナー」講座

【講師の感想】

このような機会を与えられる6年生をうらやましく思いました。私にとっても、大変勉強になりました。小学6年生の文集に書いた夢を思い出し、「今の活動を集約して、夢を10年後に達成していく」という強い思いを持ちました。

【子どもたちへのメッセージ】

たくさんの物と出会い、人と出会い、いっぱい悩み誰かの役に立てる人間になってください。

【子どもたちの感想】

デザイナーになるためにはたくさん勉強しなければいけないのだと思いました。滋賀県では織物が有名だということを初めて知りました。

○ 上記以外の子どもたちの感想

- ・ 社会はきびしいということを感じ、仕事の難しさが分かりました。色々な仕事があって、どれも奥が深いのだと思いました。好きなことをするのがどんなに大切なことなのかがとてもよく分かりました。
- ・ どんなお仕事でも大変な道のりがあるということがわかりました。将来仕事に就く時も一生懸命やりたいと思います。とても分かりやすかったし、とてもおもしろかったです。ありがとうございました。
- ・ 夢をかなえるには時間がかかるけれど、あきらめずにがんばらないといけないと思いました。
- ・ それぞれいろんな人がいろんな考えを持っているということを改めて感じました。いろんな仕事があってどれも奥が深いんだなと思いました。やりがいなども教えていただいたので、とても勉強になりました。

○ 学校側の感想

- ・ 仕事への熱意がいろんな場面で伝わってきました。子どもたちは好きな仕事に就きたいな、と感じると同時に、努力していく大切さも学ぶことができました。ありがとうございました。
- ・ 子どもたちが自分の聞きたい人を選んでいるので、いつもより興味深く話を聞いている気がしました。実物を触らせてもらえたのも良かったようです。
- ・ 自分たちで選んで話を聞くことができたので、意欲的に聞いている子が多かったです。講師の方には2回お話をさせていただくことになりましたが、そのおかげで少人数で聞けたので、自分に話してくださっているという意識で聞けたのはとてもよかったです。
- ・ とてもいいお話で、聞いているこちらの方もすごくためになりました。
- ・ 手と向き合う姿勢や、家族の支え、感謝が大切であることを話してくださり、子どもたちは、これから「大切にすること」を学ぶことができました。ありがとうございました。
- ・ 自分たちの生活の中で、見たことがあっても、生で話を聞く機会などがないので、今日は仕事内容についても詳しく聞けて良かったです。その中で、生き方についても語っていただきました。
- ・ 小学校卒業まで半年となったこの時期に、それぞれの職業で活躍されている方々からお話を伺うことができたことは、これからの自分の生き方を考えていく上で大変有効な学習であったと思います。ありがとうございました。
- ・ 実物なども触らせてもらえて、その違いを肌で感じることができました。少人数だったので意欲的に話を聞くことができました。

4 成果と課題

これまでの主な活動は次のとおりである。

平成 21 年

- 7月4日 米原市立米原公民館 仕事人6人、受講者2人
- 9月5日 長浜市立長浜公民館 仕事人2人、受講者10人
- 10月20日 守山市立守山南中学校 仕事人1人、受講者2年生265人

平成 22 年

- 1月15日 高島市教頭会 仕事人1人、受講者21人
- 1月28日 彦根市立彦根南中学校 仕事人8人、受講者1年生228人
- 2月19日 高島市立今津中学校 仕事人1人、受講者3年生145人
- 6月16日 甲賀市立水口中学校 仕事人1人、受講者2年生79人
- 9月13日 高島市立マキノ中学校 仕事人1人、受講者2年生58人
- 10月4日 草津市立新堂中学校 仕事人8人、受講者2年生132人
- 10月18日 長浜市立鏡岡中学校 仕事人1人、受講者2年生44人
- 10月20日 大津市立仰木の里東小学校 仕事人8人、受講者6年生123人

【3活動の内容(2)特徴ある取り組み 参照】

平成 23 年

- 1月28日 彦根市立彦根南中学校 仕事人10人、受講者1年生、273名
- 2月3日 大津市立瀬田北中学校 仕事人2人、受講者1年生、317名

「仕事人と語ろう・FM版」

放送局：株式会社えふえむ草津（大津市・草津市・守山市など県南部が放送エリア）

番組名：「イブニングロケッツ 785」のコーナー「えつこの部屋」

時間帯：第2・第4金曜日 午後4時10分～4時25分（15分間）

期 間：平成22年6月11日から平成23年3月まで。

内 容：パーソナリティーの石本恵津子氏と「仕事人と語ろう」グループメンバーとが、本事業の意義や内容などについて語り合う。

成果としては前述の感想にもあったように、講師・子どもたち・学校ともそれぞれに手ごたえを感じている。

講師の仕事人たちは、子どもたちに仕事の内容を伝えるにあたり改めて自分の仕事を見直し、分かりやすい言葉で伝えようとする準備を進める中で、教えることによって学ぶということに気づかされる。学校側としても、子どもの生きる力を育てるための貴重な機会になる。そして何よりも受講する子どもたちの瞳が輝いていた。家庭や地域でこうした話を聞く機会が少なくなってしまう



【長浜市立長浜公民館での活動】

た現代社会において、子どもたちが将来どのような道を歩いていくかを自分自身で考える際の貴重な機会であると思う。

今後の課題として、同グループでは、休暇制度の問題、有償化の問題及び後継者問題を挙げる。小中学校での開催は平日となるため、当日スタッフは有給休暇を取得する以外に実施する方法がない。有給休暇は頻繁には取りづらく、今後の活動を円滑に進めていくためには、ボランティア休暇制度の充実が待たれる。特にメンバーの大半は地方公務員であることもあり、公務職場にこそ市民ボランティアの必要性・有効性を認識したうえで制度の充実を図る必要がある。また、活動を続けていくに当たり、将来的には収入につながる展開が必要との意見である。現在スタッフは無償ボランティアだが、スタッフ自身にも謝金程度の活動費用があることにより継続性が出てくる。これは、今後事業の発展を考えたとき検討しなければならない重要な要素である。いまひとつの課題としてあがっている後継者問題も、事業の有償化によりすべてではないが解決に結びついてくる。それには行政や地域企業との有機的な連携が不可欠であると思う。

事業展開の中での課題としては、次のような例を挙げた。

「注文を受けた講師が学校を訪ね、教室に入ったのですが、生徒たちが聞く姿勢になっていないんです」…、メンバーが嘆いたのはある学校の出前授業。講師が教室に入っても、生徒たちは椅子に座らず、走り回っている。授業を始めようとしても私語をやめようとせず、聞く姿勢になっていなかった、とのことだった。その後反省会を開き、学校長にも出席してもらって状況を理解してもらった。学校では早速生徒対象のマナー講座を開催したとのことである。「学校側の事前学習の必要性を感じた。先生が人間的に成長して初めて子どもたちの指導者になれる、先生も成長していかなければいけない」と同グループの松原氏は語った。学校側にメールでやりとりする機能がないことで時間的なギャップがある、とも語る。

学校側もいろいろな意味で開かれていないと連携は図りにくいと思われる。

5 今後の方向性

同グループでは、今後も滋賀県教育委員会生涯学習課との連携により学校支援（中間支援）をメイン活動とし、学習塾や公民館等でも要望に応じて実施したい、としている。スタートして2年という期間での事例紹介ではあったが、同グループの熱い想いと積極的な事業展開により、多くの成果を挙げているところである。今後の方向性については、次の2点が求められると考える。1点目は、同グループが保護者とともに親子で聞いてほしいと始めた事業だが、親子で聞く機会が少ない。事業の性質上、平日学校で開催されることが多いためである。しかし今後は、学校や他の公共施設とも連携を図りながら、親子で聞く機会を増やしていくことができれば、事業終了後に家庭で再び話題にすることもでき、また子どもたちは自分の親の仕事観と合わせて、仕事に対する理解が深まるのではないだろうか。幅広い連携に期待したい。

また2点目は子どもが主役の事業展開である。現在はグループや学校等の主導で事業が進められているが、今後は子どもが聞きたい内容をリサーチした上でそれに合わせた事業展開ができると、子どもたちの理解がなお一層深まり、事業の幅も広がると考える。

6 考察

この地域は近江商人発祥の地として国内はもとより世界的にも知られ、その流れを汲む企業は商社・百貨店をはじめ今日の大企業の中にも数多く挙げられる。また、古くから近江の国・滋賀県では、家庭や地域の中で子どもたちに近江商人の話を伝えていた。現地聞き取り調査の際グループの代表に、近江商人を意識したかどうか尋ねてみたが、意識していなかった、ということであった。社会環境の変化でそうした機会がなくなってしまったこの時代を憂い、子どもたちに仕事の厳しさや楽しさなどについて学んでいく機会を設けるため情熱を燃やすメンバーたちは、無意識のうちにも体に沁みついたその精神を次世代に伝えようとしている。この事例は、近江商人のDNAを持つメンバー6人が、幅広いネットワークを駆使して熱い想いで子どもたちにメッセージを送っている事例である。

同グループは平成21年1月に設立され、学校現場をはじめ多くの関係者から注目を集めている。現地聞き取り調査にご協力いただいた3人の共同代表は、子どもたちの健全育成のためにそれぞれに自分の夢を持ち熱意を持ってこのグループに参加しており、限られた調査時間の中でもその対応にほとぼしる情熱を感じた。大きな可能性を秘めて発展していくこのグループの10年後、20年後が楽しみである。

【別表1】仕事人リスト 登録記号M＝松原氏コネクション、K＝小中氏コネクション

No.	職 業	どんな仕事
M-1	柿渋手描き染め師	デザイナーが羨望するパリ・コレクション、プレタポルテの招待をうける超一流染色家
M-2	会社経営	昔、やんちゃ坊主、今、事務機・備品等の販売会社の社長、公的なお世話役
M-3	僧侶	元中学校の校長先生、今は家を継いで僧侶に。生涯修行に励む
M-4	農業	のこぎり演奏家でもあり、革新的アイデア農法と取り組む篤農家
M-5	農業	元自動車整備士、今農業経営。トラクターの分解組立お手のもの
M-6	獣医、旅館経営	京の老舗旅館「幾松」の経営者であり、獣医でもある
M-7	会社経営(コンピュータ技術)	コンピュータを駆使して、今はやりのアニメーションや画像処理など、なんでもこなす
M-8	魚博士	琵琶湖に生息する魚のことはお任せ、なんでもご存知魚博士
M-9	会社経営(酒造)	新旭の美味しい湧水を使っておいしい酒造りに励む

M-10	会社経営	文房具、衣料品店を運営しながら、ボーイ&ガールスカウトのお世話役
M-11	美術館経営	元大学の先生、いま自分で建てた美術館の館長
M-12	会計事務所	脱税は絶対にだめ、税金のことならお任せ。名前は一度覚えてもらえれば忘れられない
M-13	旅館経営	近江白浜で白浜荘を運営。経営手腕の発揮で、お客様いっぱい
M-14	元会社経営	松下幸之助さんを限りなく尊敬する元経営者
M-15	森林公園管理	朽木の森の生き字引き、植物のことならお任せ
M-16	公認会計士	企業の会計システムづくり、会計監査はお任せ
M-17	声楽家	オペラ座での公演も実績のある素晴らしい声の持ち主
M-18	プラント技術者	100回を超える海外出張で世界を駆けまわり、工場プラントの頭脳の計装システムを作ってきた
M-19	司法書士	会社設立の手続きならお任せ
M-20	弁護士	法律相談、もめごとならお任せ
M-21	大学名誉教授（理学博士）	琵琶湖環境にかかわることならお任せ
M-22	会社経営・ロボット技術者	会社経営者でもある彼がロボットにかける情熱はだれにも負けない
M-23	デコレーション・デザイナー	花の小宇宙を実現、デコレータでもあり有名ホテルなどでの実績を持つ。
M-24	ファッション・デザイナー	パリ・コレへの出展実績も持つファッションクリエーター
M-25	料理研究家	栄養士、ベジタブル&フルーツマイスター、雑穀エキスパートなど多彩な能力の持ち主
M-26	パティシエ	料理研究家でもあり、お菓子料理の本も出版して活躍
M-27	消防士	日ごろのトレーニングが、いざという時役立つ。消防のファイター
M-28	ファッションスクールの先生	ファッションデザインから服が完成するまでの一連のことならお任せ
M-29	工学博士	電磁波計測に関するエキスパート
M-30	各業界の技術者	いろんな業界の技術者とのコネクションがあり、ご要望に応じて対応が可能
M-31	保育士	幼稚園、保育園の先生、女の子に人気が高い職業
K-1	技術士(機械部門)	理系の最高峰の国家資格。プロのコンサルティングエンジニア
K-2	技術士(電気電子部門)	理系の最高峰の国家資格。プロのコンサルティングエンジニア

K-3	技術士（応用理学部門）	理系の最高峰の国家資格。プロのコンサルティングエンジニア
K-4	技術士（化学部門）	理系の最高峰の国家資格。プロのコンサルティングエンジニア
K-5	技術士（建設部門）	理系の最高峰の国家資格。プロのコンサルティングエンジニア
K-6	技術士（水道部門）	理系の最高峰の国家資格。プロのコンサルティングエンジニア
K-7	技術士（環境部門）	理系の最高峰の国家資格。プロのコンサルティングエンジニア
K-8	技術士（情報工学部門）	理系の最高峰の国家資格。プロのコンサルティングエンジニア
K-9	僧侶	知恩院のお坊さん、浄土宗、南無阿弥陀仏
K-10	美容師	美容院の職人
K-11	理容師	理髪店の職人、床屋さん
K-12	料理人	沖縄料理の料理人
K-13	大学院教授	大学院で公共政策の授業を教えている
K-14	弁護士	法律の専門家
K-15	公認会計士	会計業務のエキスパート
K-16	司法書士	まちの法律家
K-17	農業	棚田でおいしい近江米を作る農家
K-18	林業	琵琶湖の水源ともなる林野の育成・保全をしている （植林・間伐・枝打ち・下草刈りなど）
K-19	漁業	鯉・フナ・鮎・諸子など、琵琶湖で漁師をしている
K-20	水道技術者	日常生活に最も必要なライフラインを守る
K-21	ガス技術者	料理やお風呂を沸かすのに必要なライフライン
K-22	消防士	消火活動や防火活動、救急活動でも大活躍
K-23	救急救命士	迅速適確な救急措置で市民の命を守る
K-24	一級建築士	あらゆる建物の設計ができる
K-25	大工	住宅の設計から建設まで自分で行う
K-26	医師	まちの開業医
K-27	看護師	お医者さんとともに働く
K-28	保健師	住宅の設計から建設まで自分で行う
K-29	介護福祉士	福祉施設で老人の介護を行う
K-30	保育士	保育園・幼稚園の先生。女の子に人気の高い職業
K-31	樹木医	木のお医者さん。樹木の診断及び治療など、樹木保護に関する専門家
K-32	サッカーコーチ	クラブチームで小中学生に指導をするプロのサッカーコーチ
K-33	居酒屋店経営	サラリーマンに癒しの空間を提供
K-34	税理士	賢い納税の方法を熟知し、会社の確定申告などを行う

【別表2】平成21年度 おうみ未来塾10期生 グループ活動収支計算書

収入の部

日付	内容	収入金額
5月9日	グループ活動費	50,000
9月5日	御礼（長浜公民館）	2,700
合計		52,700

支出の部

日付	内容	支出金額
5月31日	宅急便（長浜市への補助金申請書送付）	640
7月4日	会議室利用料（米原公民館）	2,320
8月16日	イベント録画用DVD-R	598
9月4日	イベント録画用DVD-R（8cm）	780
10月9日	活動用名刺（6名分）	9,000
11月1日	視察研修「私の仕事館入館料」（5名分）	3,500
2月12日	学校支援メニューフェア準備費（文具等）	6,454
2月21日	会議資料コピー代	780
合計		24,072

収支差額 28,628

（松澤 利行）

<聞き取り調査協力者>

所 属	氏 名
おうみ未来塾「仕事人と語ろう」グループ 共同代表	小中 政治

4 「子どもによる子どものための情報誌づくり」

ーさって子どもセンター(埼玉県幸手市)ー

～分類3～

ボランティア活動とネットワークづくり

(組織化や協働により地域のネットワーク化に役立つボランティア活動の事例)

1 聞き取り調査の概要

埼玉県幸手市(さって)は、関東平野のほぼ中心にあり、千葉県や茨城県と隣接する県境に位置するまちである。東京都心からは約50kmで、国道4号線と私鉄・東武日光線が結ぶ。市の人口は54,550人(21,641世帯・2010年11月統計)で、過去10年間の人口の変動は少なく、埼玉県内の市の中では最も人口が少ない。

江戸時代は、江戸と日光を結ぶ街道沿いの宿場町として栄えた。いまはその歴史的役割を終えたが、家並みには往時を偲ばせる風情が残る。まちは、旧街道添いの商店街を中心にした商業地域、農業地域、新興住宅地域などと大別することができる。

『さって子どもセンター』は、埼玉県幸手市教育委員会生涯学習課によって設置された、青少年のボランティア活動・体験活動や家庭教育支援をすすめる推進センターである。文部科学省の補助によって平成16年度まで実施された『さって子ども体験活動支援センター』事業の成果を引き継いで、市独自の事業として平成17年度に再出発した。

子どもセンターの最大の特徴は、①市民と行政との協働による子どもセンターの運営、②年間テーマを設定した情報提供、③子どもたちの参画による情報誌づくり、④情報誌を媒体にした体験活動プログラムの提供などである。ボランティア活動や体験活動情報の提供を一過性のものに終わらせることなく、提供した情報の中で子どもたちが共感した活動フィールドをバスツアーで訪問するなど、特色のある活動を行っている。

2 組織・運営体制

『さって子どもセンター』は、幸手市教育委員会生涯学習課に設置されており、同課の主事が事務局を担っている。子どもセンターには、教育委員会が委嘱した3人のコー

ディネーターが配置されている。コーディネーターは、市内4つの小中学校のPTAから推薦された有志が担っている。現在、人員不足が課題だ。

コーディネーターが担う主な役割は、①情報誌『わく²幸手っ子プチ』(年3回発行・各8,000部)の編集、②壁新聞『さてライト新聞』(年3回発行・各5,000部)の編集、③子どもの編集部員『サーチ隊』の活動支援、④『夏休みバスツアー』『冬休み体験教室』の運営な



どである。

コーディネーターと生涯学習課職員による定期的な会議は月に1～2回開催され、情報誌等の編集会議をはじめ諸事業の企画運営について協議している。コーディネーターには、会議出席ごとに1,400円（交通費含む）の報償費が支払われる。

3 活動の内容

『さって子どもセンター』は、幸手市教育委員会生涯学習課に設置されている。生涯学習課主事の菊地万里子（きくちまりこ）さんと、コーディネーターの野口紫（のぐちゆかり）さんに子どもセンターの活動について話をうかがった。

『さって子どもセンター』は、2004年までは文部科学省の補助を受けて『さって子ども体験活動支援センター』として事業を行っていたが、補助事業の終了により、2005年からは市の独自事業として再スタートしたものである。

活動の中心となるのは、子どもや保護者のための体験活動情報と活動の機会の提供である。教育委員会の計画書によれば、子どもセンター設立の目的は「青少年のボランティア活動・体験活動や家庭教育の支援に関する情報を収集・提供し、同活動の機会や場の提供をすることにより、子どもの様々な活動を充実させるととともに、家庭教育を支援し、青少年の育成を図る」としている。

子どもセンターによる情報提供やボランティア・体験活動の推進においては、年ごとに学習テーマを設定して、特色ある事業を行うことを心がけている。ちなみに近年のテーマを紹介すると、平成20年度は「科学」、平成21年度は「伝統」、平成22年度は「産業」である。

主な活動を概説すると下表のとおりである。

事業名	内容	特色	その他
1 情報誌『わく ² 幸手っ子プチ』の発行	子ども編集部員が取材・編集し作成。部員は公募による小学4～6年生で編成。年間テーマに基づきコーディネーターが取材先を選定。『サーチ隊』が現場を訪れ体験をしながら取材し、記事と挿入するイラストを描く。それを基に、コーディネーターが校正し作成する。	子どもの意見を取り入れて編集。「さってのあそび」「ちょボラしよう！」（ボランティアコーナー）「映画情報」「幸手のお店めぐり」「鉄道博物館」「おもしろ科学実験」「科学でクッキング」「和太鼓に挑戦」「世界の伝統」「歴史と民族の博物館」「つくってみて」（お料理コーナー）「おせち料理にチャレンジ」「花花マップ」（花祭り）などのたのしい特集記事やコラムを満載。	年3回・各8,000部発行。市内の保育園、幼稚園、小学校の各児童。公民館、図書館、銀行、郵便局、農協、商店街他に配布。
2 壁新聞『さてライト新聞』の発行	コーディネーターが編集し作成。『サーチ隊』の取材内容の報告、主催事業の報告などを中心に編集している。	写真やイラストを多用し、小学生が見やすいように工夫している。印刷紙はすべて、使用済みポスターを活用している。	年3回各5,000部発行。配布先は情報誌に同じ。

3 子ども編集部員『サーチ隊』の活動	毎年3月の公募に応募した小学4年～6年生12人で編成。情報誌『わく ² 幸手っ子プチ』の取材編集を中心に活動。年間7回程度の編集会議に参加している。	『サーチ隊』への子どもへの関心は強く好評。編集部員は、年度ごとにすべて交代する。情報誌の取材の際には、自らが体験してみて、訪問先の人びとにインタビューするよう心がけている。	全小中学校を対象に募集。
4 『夏休みわくわくバスツアー』の開催	夏休み時期に、情報誌で特集した年度テーマを基に、体験ツアーを実施している。	歴史民族博物館、工場見学（ひな人形・五月人形製作工場、うどんなどの乾麺工場、桐箆笥・桐小物製作工場、おもしろ消しゴム製作工場）など。	参加費用はすべて子ども負担。毎年応募者が多く、抽選で参加者を決定している。
5 『冬休み手作り教室』の開催	コーディネーターが企画する体験活動。	世界の伝統食づくり、藍染め体験ほか。	

4 特色ある取組

『さって子どもセンター』の特色としては、体験活動ボランティア活動の推進方策として“情報”を事業の核としていることである。

その情報の収集と提供のプロセスにおいては、子どもたちの参画のチャンスを拓き、子どもの感性を大切にアイデアを活かす工夫に心がけている。その背景には、コーディネーターを担う人びとの、子育て経験や、教育活動の実践に培われた経験と情報収集力、子どもへの深い愛情がある。

また、子どもセンターでは、年間テーマを設定することによって、教育委員会、コーディネーター、子ども編集部員が、共通の目標を持って活動することを可能にしている。

なによりも、幸手市内すべての子どもや保護者、教育関係者、公共施設、職域等が、体験活動ボランティア活動の情報を共有し、地域ぐるみの教育活動が展開されていることが最大の特色である。

5 今後の方向性

生涯学習課の担当者によれば、今後の方向性としては、他に進行している事業「放課後子ども教室」との連携や、学校との活動情報の共有や事業協力を進めていくことを挙げている。また、新たなコーディネーターの人材の確保、中・高校生によるボランティア参加の開発、これまでの事業内容の検証などが課題だという。

6 考察

第一の課題は、事業評価システムである。

市町村の社会教育現場においては、課題となる体験活動ボランティア活動のためのコーディネーションの評価システムに対して、明確な指針を開発することは困難なことではないかと推察する。

現場で活動するコーディネーターが自らの諸事業を評価・検証する視点や方法、それらをプロデュースする社会教育主事が評価活動を指導助言するノウハウについて、例え

ば国立教育政策研究所社会教育実践研究センターなどが研究開発して提供したり、指導助言する方法について研修する機会を提供したりするなどの対策が必要ではないかと考える。

第二の課題は、持続可能なコーディネーターの養成と社会的定着化への取組である。

体験活動ボランティア活動支援センターを効果的に運営するために最も必要な人材は、子ども、家庭、学校、地域社会を結ぶ“縁結び”的な役割を担うコーディネーターの存在である。コーディネーターは、行政と市民との“壁”を克服し、パートナーシップの絆を結ぶ重要な“触媒”でもある。

こうしたコーディネーターに必要な力としては、人間力や社会力はもとより、社会的使命感に基づく企画構想力が求められる。その人材をいかに掘り起こし、参画を求めていくかが最大の課題である。市町村において、社会教育行政と住民、社会教育ニーズと地域住民の社会参加ニーズとを結ぶ“触媒”の役割を担うコーディネーターの役割は、これからますます重要なものになるであろう。

そうした時代の要請に対応するためには、市町村における人材の養成と社会的保障への対策が重要である。しかし、その責任と役割を市町村に委ねるだけでは、根本的な問題解決につながらない。青少年の体験活動の機会の必要性や社会参加意識の向上が課題になっているいま、国がコーディネーターの身分保障の制度化を含めて、抜本的な対策を施す必要がある。市町村、都道府県の役割は重要だが、特に社会教育政策となるとその自己努力には限界がある。

とりわけ、社会教育の振興に情熱を抱き、社会的使命感を持った人材の発掘と確保は急務である。また、その役割を担う人びとへの基礎的研修やスキルアップ研修、コーディネーター相互のケース研究の機会の充実、給与等の身分保障や資格認定制度の充実への取組は、今後の重要な政策的課題であると考ええる。

幸いなことに、幸手市を訪問して、高い使命感と青少年への愛情を持つ、行政担当者とコーディネーターに出会ったことは、最大の喜びだった。このような人びとの努力が社会に確実に根づくように、持続可能な社会システム化が検討されることを心から願いたいものである。

(興 梶 寛)

<聞き取り調査協力者>

所 属	氏 名
幸手市教育委員会生涯学習課 主事	菊地万里子

5 「ビッグ・フィールド大野隊の活動と彼らを支える行政と地域」 —大野子どもクラブ(広島県廿日市市)—

～分類4～

ボランティア活動への行政支援

(体験活動ボランティア活動支援センターがきっかけとなり、様々な工夫で地域と一体となって活動している事例)

1 聞き取り調査の概要

ボランティア活動への行政支援、つまり体験活動ボランティア活動支援センターがきっかけとなり、様々な工夫で地域と一体となって活動している事例のひとつとして、広島県廿日市市大野地域のビッグ・フィールド大野隊(以下、BF大野隊)の取り組みについて以下のとおり視察並びに聞き取り調査を行った。

(1) 調査の目的

地域で行われる子どもたちの自主的な体験活動やボランティア活動と、彼らを支える行政あるいは地域のありようについて明らかにすること。

(2) 調査日時

10月22日(金)14時～23日(土)12時

(3) 訪問先

- ア 廿日市市立大野西小学校(児童数602人)
- イ 廿日市市大野市民センター
- ウ 広島国際大学

(4) お話を伺った方

- ア 川田裕子さん「大野子ども体験活動・ボランティア活動支援センター」(以下、支援センター)(廿日市市大野地区民生委員、主任児童委員、保護司、社会教育委員、社会教育主事)
- イ 正留律雄さん「前大野町教育長で現在同市教育委員会生涯学習課地域連携推進員」
- ウ 浦江辰美さん「大野西小学校長」
- エ 川西董泰さん「見守り隊」代表はじめ、メンバーの皆さん
- オ BF大野隊のメンバーとOBの皆さん
- カ 広島国際大学でのBF大野隊の活動に参加された方 など

(5) 視察調査の状況

- ア 10月22日午後 大野西小学校図書室で行われていた「放課後子ども教室」における「見守り隊」と「子ども遊ばせ隊」の活動

- イ 同日夜 大野市民センターで行われたBF大野隊の連絡調整会議
ウ 10月23日午前 広島国際大学第12回学園祭に招待されたBF大野隊
長巻き隊（長さ40mの海苔巻き作りを参加者に指導する）の活動

（6）活動の特徴

いずれの活動も支援センターの川田さんがコーディネーターとなり、「見守り隊」の皆さんと一緒に、子どもたちの自主的な活動を支えている姿と、その下で自信を持って活動に取り組む子どもたちの姿を目の当たりにすることが出来た。行政・地域・学校・支援センターが一体となって子どもたちを育くむ貴重な実践例だと思う。

以下、伺ったお話と事前調査票、あるいは支援センターの川田さんからいただいた資料の中から読み取ったことを基に報告したい。

2 組織・運営体制

BF大野隊は、大野地域の小学1年生から中学3年生までの45名ほどで構成するボランティア団体で、子どもたち自身が自分たちの楽しみや地域社会のために様々な活動を企画し、資金も自分たちで集めて実施している。結成は、平成16年5月。今年度、日本ボランティア学習協会から優れたボランティア団体に贈られるアレック・ディクソン賞を受賞している。

BF大野隊の運営は、毎月1回開かれる企画運営会議（中学生）と連絡調整会議（小学生）が柱となって様々な活動が展開される。

企画運営会議は、会長、副会長、事務局長、事務局次長、庶務会計、各クラブ部長及び副部長で構成され、年間行事計画や予算をはじめ会の運営を話し合い、連絡調整会議は全員集まり、下記に紹介する各クラブの活動の報告や、様々な活動の準備や打ち合わせなどを行っている。

会の運営費は、平成21年度で70万円あまり。補助金などは全くなく、会の趣旨に賛同して下さる賛助会員の方々からの賛助会費（21年度79名、1口100円、最高10口まで）のほかは、すべて自分たちで集めている。「あじさい祭」や「やってみん祭」など様々なイベントに模擬店（焼きそばや海苔巻き販売など）を出店した売り上げや自分たちで育て漬けた野菜の漬け物の販売、子ども会ジュニアリーダー研修会での講師謝金、そして自分たちで作る行事カレンダー発行のための寄付金（これもグループを作って地域を回り自分たちで集める）などである。

事務局は、市民センターの中にある「支援センター」が担い、そのコーディネーターの川田裕子さんが対外的な交渉の窓口になるなど会の運営に必要なサポートを行うほか、地域のボランティアの方々「見守り隊」を組織し彼らの活動を見守っている。

市の教育委員会は、市民センターを拠点として活動できるようバックアップするとともに、彼らに対外的にも活動しやすいように認証しており、さらに各学校も担当の先生を決めて活動がスムーズに行えるよう協力態勢をとっている。

る。

B F 大野隊と彼らを直接的に支援するグループは次のとおり。

- ・ 隊員：小学1年生～中学3年生

(大野東小学校、大野西小学校、大野東中学校、大野中学校 4校45名)

- ・ 見守り隊ジュニア：高校1年生～大学3年生

(中学校卒業後は、見守り隊ジュニアとしてできる時に参加し、活動支援を行う)

- ・ 見守り隊：趣旨に賛同している地域の方々 他薦で25名登録

3 活動の内容

(1) 活動の概要

広島県廿日市市大野地域(旧大野町)は、県の西部に位置し人口約2万7千人。かつては漁業の町で養殖(アサリ、カキ)が盛んであった。広島市から山陽本線の各駅停車で30分ほどの距離にあり、現在は広島市のベッドタウンとして新旧の住民が混住する地域となっている。自治会組織も比較的しっかりしており、自治会主催による通学合宿を始めて今年で8年目になり、現在では10地区中6地区で実施されている。これも後述する生涯学習啓発事業の成果のひとつだと考えられる。

ア 「大野子ども体験活動・ボランティア活動支援センター」開所まで

平成13、14年と2回にわたり、旧大野町で社会教育委員と教育長そして町の行政とが協働で、生涯学習啓発事業「まちづくりは人づくり」を実施した。

そして、この大会での気づきを具体的な行動に移そうと平成14年には文部科学省の「地域教育力・奉仕活動推進事業」に申請し、大会終了後に「地域教育力・体験活動推進協議会」をたちあげた。同時に“子どもが輝くまちづくり”をスローガンに掲げ、官民協働で未来を担う子どもたちを育てようと同年11月16日「大野子ども体験活動・ボランティア活動支援センター」を開所し拠点とした。

この一連の動きに関わったある区長は、「当時は、子どもたちの目が死んでいた。子ども育成会の会長と区長の話し合いを持ったり、子どもたちに来ることを提案してもらったりと必死だった。」と語ってくれた。

イ 「ビッグ・フィールド大野隊」(B F 大野隊)の誕生

支援センターは開所当初から、“子どもたちをお客様にしない”を合言葉に、子どもたちの自発性・自主性を育てることに主眼を置いてきた。地域の大人たちも「見守り隊」となって“失敗する事も学びのうち!”と、手出し口出しを控え、じっと見守る様に関わってきた。そうした環境の下で体験活動やボランティア活動を実践してきた子どもたちは、大人から信頼され、任される事で自信を取り戻し、自己肯定感や役立ち感を体得していった。そして、様々な事に意欲的に挑戦するようになり、さらに仲間と共に活動する喜びにも目覚

めていった。

そして、支援センター開所から一年半、支援センターでの活動の楽しさに目覚めた子どもたちから声上がり、「この地域の見守りの中で“もっと活動を深めたり広めたりしたい!”」という願いが届けられた。本当に子どもたちが自主的に自立していくためには、子どもたちによる子どもたちの組織が必要と感じていた教育長や「見守り隊」の思いとも一致するもので、平成16年5月16日、大野子どもクラブ「BF大野隊」が誕生した。

BF大野隊の活動は、次項で紹介するとおり体験活動とボランティア活動に分けられる。いずれも子どもたちが自主的に決めたもので、希望するクラブに一つでも複数でも自由に参加することが出来る。さらに、希望に応じて新しいクラブを作ることも可能だ。このほか、毎月の企画運営会議と連絡調整会議、さらには地域の様々な行事に参加・協力するための打ち合わせ、そして時には子ども会リーダー育成研修の講師を務めることもあり、活動内容は幅広く多岐にわたる。

(2) 特徴ある取組

ア 体験活動

- (ア) まきまきクラブ……月に一度テーマを決めて様々な巻き寿司作りに挑戦し、家庭でも作れるようにしている。広島国際大学学園祭での長巻きイベントでは子どもたちが講師を務め、参加者に指導する。長巻きでは45m成功の記録を持っているが、来年3月には直径30cmの太巻きに挑戦する予定。
- (イ) スポーツ倶楽部……毎月テーマを決め、バドミントン大会・バスケットボール大会・おにごっこ・水を入れたペットボトルの缶けり等々、身体を動かし楽しんでいる。人気のクラブだが、現在の部長は小学2年生。学年が上の子どもや中学生たちも部長の下で一緒に楽しく遊ぶ。
- (ウ) 茶道クラブ……茶道の先生をお招きし、基礎的なお茶の作法や心などを習得している。

イ ボランティア活動

- (ア) 美化ぴか隊……大野地区で行われる様々なイベント会場に出向き、ゴミ拾いなどの清掃活動を行って会場をピカピカにしようというもので、全員で協議して取り組んでいる。今年度は、廿日市市トライアスロン大会、やってみん祭、カキ祭り会場などのほか男子駅伝が行われる国道や公民館の清掃など、ほとんど毎月活動している。
- (イ) おもちのチャチャチャクラブ・キャラバン隊……手作りの紙芝居を作って練習し、地域の保育園や未就園児の会に自分たちが連絡を取り、現地に出向いて発表したり、読み聞かせなどを行ったりしている。
- (ウ) つけもの研究クラブ……畑の土作りから教わりながら、季節の野菜を育てて漬け物にし、イベント会場で販売するという一年を通じての活動

で、収益金はBF大野隊の大切な活動費となっている。今年度は、らっきょう、白菜、かぶ漬けなどに取り組んでいる。

- (エ) 「みらい2010」編集局……地域や学校（小学校、中学校各2校）の情報を集約し、行事カレンダーとして毎年発行し、関係者からとても喜ばれている。学校の先生や地域の区長さんなどから直接行事予定などを聞き取り、BF大野隊の活動予定と合わせて月ごとのスケジュール表を作成し、みんなで描いたイラストと合わせて印刷業者に入稿。三回ほどの校正も自分たちで行うほか、印刷費をまかなうため自分たちで寄付金（昨年度約30万円）を集める。
- (オ) 放課後子ども教室「遊ばせ隊」……大野西小学校では火・水・金曜日の週3回、大野東小学校では火・木曜日の週2回、午後3時から5時まで小学1年生～3年生各25名を対象に放課後子ども教室が行われている。子どもたちは、放課後ランドセルを背負ったまま図書室に集まり、地域ボランティアの「見守り隊」の方々の下で、箸の正しい使い方や紐の結び方、風呂敷の使い方など日本の伝統文化ともいえるべき様々なことにチャレンジし、宿題をすませて「遊ばせ隊」を待つ。授業を終えた4年生以上のBF大野隊「遊ばせ隊」が、終わりの30分をゲームや遊びを自分たちで考えて指導しながら一緒に楽しく過ごす。子どもたちは縦の年齢のつながりの中で遊びを通して、我慢や仲間づくりなど社会のルールを身につけていく。「見守り隊」にとっても、この30分間を「遊ばせ隊」に任せることによって、自分たちの打ち合わせの時間に充てることができている。

ウ その他の活動

このほか、クラブでの活動ではなく、自分たちの「学びを還元」しようと次の5つの活動も行っている。

- (ア) 子ども会ジュニアリーダー研修会講師（中学生せんせい）……毎年、地域の子ども会ジュニアリーダー研修の講師を引き受け、BF大野隊の中学生がゲームや簡単昼ごはんの作り方、プレゼンテーションの方法などを教えている。講師謝金は貴重な活動費となっている。
- (イ) 大学祭等長巻き隊（小学生せんせい）……毎年、大学祭に出向き、BF大野隊の小学生が中心となって大学生や学園祭参加者に長巻きの指導をしている。
- (ウ) 春休みキャリアアップ講座（先輩から後輩へ）……広島県教育委員会主催のパイオニアスピリット事業に参加した代表3名が、後輩たちに学んだことを伝えようと1泊2日の合宿をしたことがきっかけで始まり、昨年度はパソコン教室を実施している。
- (エ) 講演会企画……自分たちの活動を通して気づいたことをみんなで話し合おうと講演会や研修会を企画している。これまで、美化びか隊が川に捨てられていた自転車を拾い上げたことがきっかけで、「あなたが解

決！大野のゴミ問題」を実施して、子どもと大人が真剣に話し合うということもあった。

(オ) 感謝の会……毎年学年末に、お世話になった「見守り隊」の方々や先生方、送り迎えをしてくれた保護者の方々に感謝の気持ちをこめて歌や踊り、劇などを練習して発表している。

4 成果と課題

(1) 活動の成果

年間にわたり幅広い活動を展開するBF大野隊や支援センターの活動すべてについて論評することはできないが、たまたま調査に伺った2日間に3つの行事を垣間見ることができ、そこで感じたことを述べてみたい。

結論から言えば、BF大野隊の子どもたちは、その設立目的のとおり、地域の温かい見守りのもと自主的にのびのびと活動し成長しているということである。そして、「見守り隊」の方々は、手出し口出しもせず—これは大人にとっては相当な忍耐を要することであるが—あくまでも子どもたちの活動のサポート役としてその環境整備に徹し、子どもたちの成長を自らのことのように喜んでいる。さらに、両者及び両者と地域社会あるいは様々な団体との関係をコーディネートするのが支援センターだが、両者のみならず学校や地域からも絶大な信頼を得てその役割を果たしていると感じた。

ア 放課後子ども教室「遊ばせ隊」の活動

10月22日の午後、案内されて大野西小学校の図書室を訪ねると7～8名の「見守り隊」のほか、すでに4名の「遊ばせ隊」も来ていて1年生と2～3年生の2グループに分けてそれぞれゲームのリーダーシップをとっているところであった。驚いたのは、低学年の子どもたちを相手にきちんとルールを守らせながら楽しんでいることであった。恐らく現場の先生たちでさえこうは出来ないだろうと思えるほどであった。「遊ばせ隊」は、自分たちに与えられた30分をいかに楽しく過ごすか、その日のプログラムを一所懸命考えて組み立てて来るといふ。そして、子どもたちの要求や彼らの体調、あるいは天気のことなどを考慮して現場で柔軟に対処するのである。「遊ばせ隊」の自主性と責任感の強さを見て取ることができた。

一方、放課後子ども教室全体をお世話している「見守り隊」の方々は、自らの経験や能力をもとに子どもたちに前述したような取組をしている。子どもたちにどうすれば楽しくチャレンジしてもらえるかと考え、道具なども自分たちでこしらえている。また、まっすぐ歩けない子どもが多いことに気づき、子どもたちに毎回スクワットを10回やって腰の力をつけるようにした結果5人がまっすぐ歩けるようになったなど、自分たちの経験から今の子どもたちの状況を判断し、相談しながら様々な対応を試みている例などもうかがうことができた。

イ 連絡調整会議

10月22日の夜は定例の連絡調整会議が行われ、参加して会議の様子を見ることができた。

出席者は会員16名と中高生のOB7名で、協議題は広島国際大学学園祭での長巻き作りと遊ばせ隊のポスターづくり、そして各クラブからの11月の活動予定についての報告であった。議長、報告、書記など、すべて子どもたちの中で役割が決まっており、会議はスムーズに進められた。進行や報告に詰まったりすると、OBがそっと近づいていき耳元でアドバイスするなど、あくまでも主人公は子どもたちであるということが徹底されているように感じられた。

会議が終わり、川田さんが作ってくれた炊き込みご飯と子どもたちが作ったらっきょう漬けをいただきながら、OBたちから直接話を聞くことができた。

B F 大野隊に入ったのは、大野隊の地域行事に参加したことや大野隊が作成した行事カレンダーの内容を見たことが大きなきっかけになっているようであった。入って活動してみて良かったことは何だったか聞いてみると、大半のOBたちは、人前で話ができるようになった、友だちが増えた、自信が持てるようになったと答えてくれた。興味深かったのは、いろんな体験ができたが、特に裏方体験ができたことは自分にとって大変貴重なことであったとの答えであった。

逆に、困ったこと、大変だったことを尋ねてみると、事業の準備会議でいきづまりや対立があった時の意見のとりまとめ(それを乗り越えたときの満足感は格別)、リーダーになった時の責任感の重さ、小さい子の指導、などであった。

その他に、「見守り隊」の力のすごさとありがたさ、支え合うことや協力し合うことの大切さを、B F 大野隊の活動を通じて学ぶことができたと話してくれた。

ウ 長巻き隊

10月23日早朝、広島国際大学が手配した大型バスが市民センターに到着し、第12回広島国際大学学園祭で40mの海苔巻き(長巻き)作りを指導すべくB F 大野隊24名のほか応援隊、保護者そして見守り隊の方々が乗り込んだ。

大学に向かうバスの中では、B F 大野隊の会長から長巻き作りを指導するに当たっての最後の確認が行われた。役割分担や自分が担当する場所、そして互いの意思を伝え合う合図の仕草などをチェックし、「今日は全員が先生で、指導する立場だ」ということを強調した。それを受けて「見守り隊」からは、「言葉遣いが難しいから注意するように」とか「動作はきびきびと」などのアドバイスがあった。

本番は大学の学生レストランで行われ、今回で4回目となる長巻きづく

りは、黒瀬牛、卵、紅しょうが、ねぎを巻きこんで見事成功した。参加者は100名ほどで、子どもたちは見事なチームワークで、大人の支援を受けながら一所懸命指導した。ただ巻いただけで終わりというのではなく、40mの長巻きを全員で持ち上げてつながっていることが確認できてはじめて成功となる。ごはんを均等に分けたり、力の入れ方を指導したりと、とにかく息が合わないと簡単にくずれて切れてしまう。B F 大野隊と「見守り隊」のチームワークのすばらしさ、互いの信頼関係の強さを目の当たりにした瞬間であった。それはまた、両者をコーディネートする支援センターの永年にわたる努力の成果とも思えるものであった。

(2) 課題

課題があるとすれば次の三点ではないかと思われる。いずれも、B F 大野隊そのものに関するのではなく、彼らを支える周辺環境の問題である。

まず第一は、支援センターを中心となって支える川田裕子さんに相当な負担がかかっているのではないかと考えられることである。昨年度の状況を見ると、B F 大野隊関連だけで企画運営委員会関係で年間70日以上、連絡調整会議で22日、各クラブの活動がのべ60日以上、その他放課後子ども教室「遊ばせ隊」の活動が2校合わせてのべ196日にのぼる。

それぞれの活動の準備のための仕事を加えると想像を絶するハードワークに違いない。「見守り隊」の方々もそれぞれ役割を担い、支え合っているが、更なる共同で支える仕組み作りが求められていると思う。

第二は、「見守り隊」のことである。この方々の頑張りがB F 大野隊の活動を支える大きな役割を果たしていることは、大野隊のメンバーのみならず地域の方誰もが認めるところである。しかし、その大半の方が経験豊かな人生の大ベテランで、将来的に考えて現在の保護者や地域の方を子ども支援の土俵に乗せ、いかに次世代の「見守り隊」につなげていくのが焦眉の課題であると思われる。

第三は、支援センターの増設である。現在、廿日市市内で支援センターがあつてB F 大野隊のような活動を支援しているのは大野地域だけである。これを全市的に拡大増設することができれば、相乗効果によりB F 大野隊の活性化のみならず前述した二つの課題の解決にもつながっていくのではないかと考えられる。

5 今後の方向性

B F 大野隊は、あくまでも「子どもによる子どものためのクラブ」であるから、そこに子どもたちの意思がある限り自主的に活動は続けられる。また、彼らの活動を支える「見守り隊」や支援センターも、「子どもたちが様々なクラブ運営を通して（クラブは毎年存続を話し合い、その時のメンバーや興味によって体験型のクラブは常に変化）自主的に動くことの大切さや達成感を見守りながら、仲間であつかりながら活動をまとめていく大変さ、喜び等を体得して

いく様子を支える方針は変わらない。」としており、当面は「行政－学校－地域－支援センター－子どもたち」の関係がうまくかみ合って活動が展開されると思われる。さらに平成21年度に大野中学校区学校支援地域本部を立ち上げ、その中の事業として位置付けたことで「行政－学校－地域」で支える体制は確固たるものとなっている。

問題は、前項で述べた「見守り隊」や支援センターの抱える課題である。事前に寄せられた調査票の現在感じている課題の項目の中に「年度によって、子どもたちの参加年齢や地域のかたよりが出るため、その都度、状況に則した対応が必要なため、正直、気を抜けないし、手も抜けない。」とあり、その大変さが実感できる。

さらに、聞き取り調査では現在の保護者に対する様々な意見も聞くことができた。しつけに関すること、そして地域での子育てに関わることが主であった。今の家庭ではしつけはムリだという。なぜなら、保護者がそのようなしつけを受けてこなかったから。例えば、放課後子ども教室に通う子どもたちの中にハンカチを持参しない子どもが多く、そのことを保護者にいくら言っても伝わらなかったとのこと。また、今の保護者は地域への関心が薄く、育成会に入ろうともしないし、地域の役職につくことも避け、子ども会にも入ろうとしない、などである。

日本中どこにでもありそうな悩みだが、彼らはそれに対して、子どもたちから保護者に伝えてもらうことを通じて親を変えようと考えている。放課後子ども教室での学びを家庭の中に持ち帰ってもらったり、子どもたちの活動に参加を促したりと、時間もかかり、根気のいる取り組みだと思うが、これが実現できたときには、前項で述べた課題の大半が解決するに違いない。

【保護者の感想】

我が家では子ども二人が「子ども教室」、「ビッグ・フィールド大野隊」に入らせてもらっています。ビッグ・フィールド大野隊には、どんな活動をするのか親も子ども知らないまま「子ども教室」の延長のような感じで入りました。

1年を過ぎて、子どもたちが子どもたちで決めて行動し、活動しているのが良く分かりました。同年代の横のつながりだけでなく、“見守り”をしてくださっている年配の方、大学生の方から年下の子どもまで、幅広い縦のつながりをすごく感じました。たまに活動を見るとき、家ではなかなか言うことをきかない子どもが一生懸命動いていて、人間として成長している一面を見ることができ驚くことがあります。また、何かの役を決めるのに自分から手を挙げたと聞き、できるできないにしろ、まず何人かの中で手を挙げたというだけで、少しずつですが自分からやってみようという気持ちが持てるようになったんだと感じて嬉しく思います。

私は子どもたちがビッグ・フィールド大野隊の行事の中で、同年代の子どもが味わっていない、いろいろな体験、経験をさせてもらっていると思うので、とてもありがたいです。美化ピカ隊など、大人の私でさえ、なかなかボランティアでゴミ拾いをする機会が無いのに、子どもたちには頭が下がる思いです。

いま、核家族の中で、なかなか親以外の大人の方に注意される場所が無い分、ここではいろんな方に接してもらいながら優しさも厳しさも味わい、いい経験になっていると思います。そしてこのまま人のつながりを大事にしてほしいと願います。

6 考察

(1) 支援センターの地域社会における重要な役割と可能性

広島国際大学学園祭での長巻き隊に同行した際に、他の地区（阿品）から

応援隊として参加していた小学校3年生と5年生の保護者から貴重な話を聞くことが出来た。今回は支援センターの川田さんの紹介で、子どもたちと一緒に参加したとのことである。子どもたち自身の手で様々な活動をやらせたいというのがその理由であった。自分たちの地元にも子ども会はあるものの大人のレクリエーションの場になってしまっていて、子どもたちはお客様になっている。何とか子どもたちの自主性を育てたいと、川田さんに相談して地元で通学合宿も始めた。しかし、地区の保護者は様子見で、他の地区からの児童の参加の方が多かった。地域の方は、「大野地区のように、地域の子どもは地域で育てていきたい」とのことであった。

ここにも支援センターの地域社会における重要な役割と可能性が見て取れる。

【保護者の感想】

コーディネーターに声をかけていただいて、4年生から参加させていただくようになりました。外ではおとなしく、学校では“今日は誰とも話をしなかった”という日が多くある我が子が、みんなと活動していくうちに自分から積極的に活動に参加し、仕事をこなしていく姿にびっくりしました。最近では、「明るくなったね」「良く話をするようになったね」という声をかけていただくようになりました。

「我が子がビッグ・フィールド大野隊に入った」ことを知り合いに話すと、たいていの方が「大変でしょう?」「子どもが包丁を持って料理するのって危ないでしょ」「見守りの人って厳しいでしょ」などの声が多くあるけど、私はそうは思わないし、子ども自身でいろいろな経験をし、危険な事、周りの状況を見て行動できるようになれた事、お互いが仲間のことを思いやる気持ちを持てるようになった事、自分でもできるようになったという自信をつけられた事など、完璧ではないかもしれないけれどすごいと思います。また、それを温かく見守って指導してくださる見守り隊の方へ感謝するとともに、私も見守り隊の方や子どもたちに教えられることも多く、恥ずかしくない大人にならないといけないと改めて考える時間は、私にとってもとても大切だと思います。

大人が敷いたレールの上をただ動くだけの子どもではなく、自分で判断して動ける子どもに育ててほしいと思うので、ビッグ・フィールド大野隊の活動はそうなれるように地域行事へボランティアという形で導いてくれる活動だと思います。しかし、端から見ると厳しいだけの団体に見えるのかもしれませんが、一緒に参加させていただいて、他の見守り隊の方と子どもの様子を間近で見ているとそう思えたのかもしれませんが。

日頃は子どもらしくのびのびしていても、いざ活動時間になると、きびきびとした行動でがんばっている姿は、胸が熱くなる時があります。

限られた人数で参加してくださる見守り隊の方のお世話により、家庭ではなかなかできない経験をさせていただき感謝の気持ちでいっぱいです。

私は我が子もいるし、できる時だけの見守りなので申し訳ないのですが、本当の見守りの方は時間や労働の負担、いろいろ細かいことに心配りをさせていただいている精神的負担が大きすぎるのではと思うことがあります。

もっとたくさんの方や保護者の方にこの活動を知っていただき、賛同してくださる方が増えるといいなと思います。

陰でたくさんの方に支えていただいているからこそ、活動できることを子どもに伝え、皆様には感謝の気持ちでいっぱいです。いつもありがとうございます。

(2) 子どもたちの居場所

大野市民センター1階、正面入口を10mほど入った右側に支援センターの事務所がある。BF大野隊の拠点でもある。間口一間半、奥行き四間ほどのせまい空間に、イベントで使用する様々な道具が左右の壁の床から天井近くまで所狭しと積み上げられている。中央には長机が置かれているが、何となく雑然としてとても落ち着けるような場所ではない。しかし、子どもたちに

としては最高の居場所のようなのである。学校の帰りに、「ただいまーっ」と気軽に立ち寄り、宿題をしたり、遊んだり、話し合ったりして過ごす。川田さんは見守るだけ。部屋からは笑い声が絶えないという。互いの強い信頼関係がこのような雰囲気を作っているのだと思う。地域にこのような場所があるということは、子どもたちの成長にとって極めて重要なことではないだろうか。

(3) 「見守り隊」の方々の情熱

活動を視察し、話を伺ってつくづく頭が下がるのが「見守り隊」の方々の取組である。筆者も地元でおやじの会を運営し、仲間と共に地域の子どもたちに自然体験や生活体験を提供しているが、手出し口出し無用というのはとてもできることではない。つい、口が出て手が出てしまう。子どもたちに対する深い信頼と愛情がなければ、あそこまで忍耐強くはなれないと思う。

彼らは口をそろえて「子どもに活動の場ときちんとした指導をすれば何でも可能になる。そしてそれが子どもたちの自信になる。」という。BF大野隊の今の会長も、一年生の時には自分の名前を言うのにも涙を流していたのに、それが今では堂々とリーダーシップを発揮している。そうした子どもたちの成長を見るのが「我々の喜びであり財産だ」と語ってくれた。こうした大人の存在こそ「地域の宝であり財産」だと思う。

(山本 信也)

<聞き取り調査協力者>

所 属	氏 名
大野子どもクラブ(ビッグ・フィールド大野隊) コーディネーター	川田 裕子

第4章 特色ある全国の事例

第4章 特色ある全国の事例

1 「地域課題の解決と学生ボランティアの活躍」 － N P O 法人クラブパレット (石川県かほく市) －

～分類1～

地域課題の解決に寄与するボランティア活動 (地域課題の解決、地域社会のニーズに応える事例)

1 N P O 法人クラブパレットの団体概要

当法人（以下クラブと表記）はスポーツを通じた地域づくりを目的として、平成14年5月18日に設立した。スポーツ教室やイベントの開催、体育施設の管理業務、健康づくり事業の受託等を行い、会員数は1,589人（平成22年12月現在）となっている。運営は有給のスタッフ（常勤、非常勤、専任サッカーコーチ）に加え、無報酬の理事を含む多くのボランティアによって支えられている。

2 「パレット教育学院」の取組

(1) パレット教育学院の概要

当クラブでの特徴的な取組の一つに「パレット教育学院」がある。この取組では、小学生の長期休暇期間中（春休み、夏休み、冬休み）に、学習、スポーツ、キャンプ・川遊び・海遊び等の野外活動、近隣のリサイクル工場や市議会議場などの社会見学、タケノコ掘り体験、料理教室、書道教室、海岸清掃など様々な体験機会を提供し、異学年交流、異世代交流を通じた児童の健全育成に寄与することを目的としている。

パレット教育学院は平成18年12月に第1回目の取組がなされた。その後、宿泊体験、天体観測、県外クラブとの合同開催等様々なプログラムを取り入れながら、平成22年12月に開催された「パレット教育学院‘10冬」に至るまで全13シーズンの実績を数えている。延べ参加者児童数は700名を超え、運営に携わった学生ボランティアスタッフも延べ300名近くになっている。

(2) 地域とクラブが抱えていた課題

当クラブでは夏休みの週末に様々なスポーツ体験教室を企画してきたが、思うように参加者が集まらなかった。その理由を知るために、小学生の児童を持つ保護者に意見を聞いたところ、「せっかくの夏休みの週末は家族で出かけたい。平日にイベントがあったとしても、親が共稼ぎで送迎できないため参加できない。けれど、子ども達は家でゲームばかりしていて時間を持て余しているし、今しかできないことを本当は親としては体験させてあげたいと考えている。」という現実問題が明らかになった。また、「長期休暇中の平日日中に、安心して子どもを預かってくれる場所がほしい。」という託児所的な役割も保護者からは求められていることが分かった。

(3) 学生ボランティアへの期待と Win-Win の関係づくり

長期休暇中の平日日中にプログラムを行う場合の課題に運営スタッフの配置がある。そこでクラブが着目したのが大学生ボランティアであった。かつてクラブでは夏休みの水泳教室を企画した際に、金沢大学水泳部の学生に指導を依頼したことがあった。指導に関わった学生たちに聞くと、「教育実習に向けてのいい事前研修となった。」「子ども達に指導することで、自分自身を見直すきっかけとなった。」「機会があればまた参加したい。」といった前向きな答えが返ってきた。クラブとしては一方的なお願いとして捉えていたが、ボランティアをする学生にとっても得るものが大きいということがわかり、その後の積極的な声かけへとつながった。

「パレット教育学院」開始当時は学生ボランティアのイベントへの関わりは、当日の運営補助のみであったが、回数を重ねるごとに、徐々に事前の企画運営段階から関わる体制に移行されている。プログラムの発案はもとより、使用施設の調整、講師との交渉、募集チラシの制作、実行予算の積算、事前研修会の開催、事後報告会（保護者を招いて）の実施など様々な部分で学生ボランティア



【企画会議】

が主体的に活動を進めている。このことは学生ボランティアにとってのやりがいや学びにつながっており、「いろいろな人と関わることができる。」「学校では体験することができない学びがある。」「子ども達の喜ぶ顔がうれしい。」「保護者のニーズを知ることができる。」といった意見が出ており、学生にとっての自己実現や成長の場ともなっている。運営においては多少危なっかしい部分があったり、直前まで準備に追われることなどもあったりするが、それらも含めて学生にとってはよい経験となっているのではないかと。また、年齢が近い学生ボランティアは子ども達にとって親しみやすい存在であり、絶大な人気を誇るとともに、よきロールモデルとしても子ども達の目に映るようである。参加者であった小学生が卒業後に中学生ボランティアとして活躍しているのはその証明である。さらに、子ども達の喜ぶ姿を通じて保護者にも学生ボランティアの活躍は伝わっているようである。

3 成果と課題

(1) イベント集客からスタートした地域課題とその解決策

パレット教育学院の取組は、そもそも「どうしたらイベントに小学生を集めることができるのか？」という全くのクラブ本位の考えからスタートしたものであった。しかしながら、地域のニーズを探る過程において、長期休暇中の平日日中に子ども達が様々な体験をする機会がなく、その原因には共稼ぎや核家族化といった社会構造上の課題があることが分かってきた。クラブとしては、イベントへの集客はもとより、地域社会における課題を解決するための手段として、学生ボランティアの存在に注目した。その目論見は、①確かな集客をもってイベントが継続でき、子どもたちに様々な体験機会を提供できていること。②新聞や市広報誌に掲載されるなど、活動の認知度

が地域で増してきていること。③学生が地域で活躍し、自己実現を達成する場が生まれたこと。④次世代へつながる中学生ボランティアも誕生していること。といった点からも当初の期待以上の成果を上げていると評価している。

(2) 学生ボランティアゆえのジレンマ

学生ボランティアの最大の課題は世代交代である。多くの大学生は4年で卒業を迎える。そのため、長く経験を積んだ学生リーダーはいずれ卒業し代替わりを迎える。特定のメンバーのみを育成することでは継続的に力を発揮してくれるのではなく、メンバーが入れ替わるごとに育成をし直さなくてはならない。ただし、この課題は捉え方によっては、事業や組織のマネリ化を防ぐためのよい機会であるとも言える。また、ともすれば無責任になりがちなボランティアに企画運営をゆだねるためには、ボランティアを束ねるクラブ職員のコーディネート能力が問われる。しかしながらこの点においても、この事業を通じて職員のコーディネート力向上の機会となっていると捉えることもできる。

4 重要なのは「ボランティア」ではなく「ボランティアを活かす仕組み」

当クラブは「100年続くクラブ」を目指している。同様にこの「パレット教育学院」の事業においても、今後の活動の継続及び更なる充実を目指す。そのために何よりも重要なことが次世代育成、すなわち人材育成であり人材教育である。すでに述べたとおり、中学生ボランティアの誕生などその兆しは見えている。それを確固たるものとしていくためには、設立間もないこのクラブ自身が活



【中学生スタッフ】

動を継続していくための基盤整備をしないといけない。なぜならばボランティア活動が地域課題の解決に寄与するレベルで継続的に行われるためには、「ボランティア活動」そのもの以上に、地域課題を把握し、必要な事業を構築し、ボランティアをコーディネートすることができる優れた人材の配置が必要だからである。

これからの地域を変えていくのは、一人一人の市民である。自分たちの地域の課題は自分たちで知恵を出し合い解決する。そしてそのプロセスの連鎖の中でみんなが住んでよかったと思える街づくりが達成されるのである。そのために当クラブがこの地域でできることを真剣に考え、取り組んでいきたい。

(NPO法人クラブパレット クラブマネージャー 西村 貴之)

<委員からのコメント>

地域活動には、様々なレベルがあります。当事例は、常勤有給の専門職員から補助職員を配置。また、専用事務局、活動施設を備えた事例です。全国の総合型地域スポーツクラブのモデル事例として取り上げられています。

活動を自立、継続するには、マネジメント強化が大切です。戦略的に基盤づくりに取り組み、見事な成果を上げている当事例は、総合型地域スポーツクラブだけでなく、分野を越えて参考となる取組と見えています。

機会を見て、実際に訪問して研究する価値あります。

(藤井 誠)

2 「英国青年ボランティアの受け入れ」

—北海道洞爺湖町洞爺国際交流協会—

～分類 1～

地域課題の解決に寄与するボランティア活動

(地域課題の解決、地域社会のニーズに応える事例)

1 英国青年ボランティアの受入

洞爺湖町では、平成3年9月より英国のスコットランドにある「プロジェクト・トラスト」より派遣される英国青年ボランティアの受け入れをしている。その英国青年は「日英ギャップイヤー計画」により派遣され、毎年9月に2名が来町し翌年7月までボランティア活動をしており、現在は第20次となる英国青年が活躍をしている。

その派遣元となる「プロジェクト・トラスト」(THE PROJECT TRUST)は、昭和43(1968)年に英国スコットランドの北西にあるコール島に非営利の教育団体として設立された青年派遣機関である。現在までに5,400人以上の17～19歳の青年を世界中に派遣し続けている。平成22年度は世界で約50カ国(ブラジル、チリ、キューバ、ドミニカ共和国、ガイアナ、ホンデュラス、ペルー、ボツワナ、レソト、マラウイ、モロッコ、モザンビーク、ナミビア、南アフリカ共和国、タンザニア、ウガンダ、中国、香港、マレーシア、スリランカ、タイ、ベトナム、日本等)に約200名のボランティアを派遣している。17～19歳の青年は1年間にわたって全く異なる文化や生活習慣に身を置くことで、自身の成長やその地域の人々への理解を深める機会を提供するという方針の下に実施されている。

英国青年ボランティアは「日英ギャップイヤー計画」により派遣されており、17～19歳の高等学校を卒業し、プロジェクト・トラストによって選考された青年が日本で滞在し、受入団体の監督の下で福祉や教育分野のボランティア活動を行いながら、地域の国際交流の促進に貢献すると同時に青年自身の異文化理解、日本語の習得、地域住民とのふれあいを通じて視野を広げ、次代を担う青年を養成する人材育成計画である。

また、派遣されている英国青年ボランティアは「ギャップイヤー」という制度にて来町している。英国では、大学入学前に学業以外の活動を行うユニバーシティ・ギャップイヤー制度がある。ギャップイヤーとは英国の大学制度の一つで、入学資格を取得した18～25歳の学生に、社会的見聞を広めるため、入学までに1年の猶予(GAP=すき間)期間を与える制度である。学生は外国に出かけたり、長期のアルバイトやボランティア活動に従事したりしている。大学は、学生がギャップイヤーを過ごすのを積極的に応援し、雇用者もこの時期に得る経験を有意義なものとして評価をしている。自主的に学ぶ姿勢、自分の力で問題を解決する能力、自立の精神、国際性といった資質が得られるとの評価。ギャップイヤーは大学に入る前にとるのが普通だが、別の時期にとってもよいとされている。例えば、学部の途中、大学院進学の前といったようにである。毎年10万人の18歳になる英国人がこのようなかたちで、大学生活を先送りしており、毎年およそ8人に1人の高校卒業生がこの制度を選択している。

さて、本町での英国青年ボランティアの活動は次のとおりとなっている。

月曜日 午前保育所（虻田地区）、午後児童クラブ、ジュニア英会話

火曜日 洞爺高等学校

水曜日 洞爺中学校、夜間は一般の方の英会話教室

木曜日 午前保育所（洞爺地区）、午後ジュニア英会話

金曜日 隔週で洞爺温泉病院、保育所

また、社会教育事業や学校行事、地域の団体活動（よさこい、アフリカ太鼓、剣道、柔道、茶道等）や地域のイベント（洞爺湖マラソン、洞爺湖ツーデーマーチ等）にも積極的に参加しており、過去には柔道で黒帯、茶道では免状を取得した青年もおり、そういった活動から、当町での英国青年は学校での英語指導のみならず、保育所から社会教育



【小学校での英語の授業】

育事業や地域の団体活動等により町に溶け込んでおり、町内で見かけると子どもから高齢の方々まで手を上げてあいさつ等するのが当たり前になっている。

また、洞爺国際交流協会の方々や英会話教室に通う方は「晩ご飯食べにおいで」、「次の休み買い物と一緒にいくよ」等々、全国的に地域コミュニティが薄れていく中でまだまだ洞爺地区においては人と人のつながりが保たれている。

2 洞爺国際交流協会

日英のボランティア交流計画に伴い、一年間のボランティア活動を志す、英国ボランティア青年（2名）を旧洞爺村（現在は洞爺湖町）で受け入れ、その受け皿として、平成3（1991）年洞爺村国際交流協会（現在は、洞爺国際交流協会）を設立し、様々なボランティア活動を通し、町民と英国青年ボランティアとの相互交流を進めて20年に至る。現在会員数は75名。主な活動は、週1回の英会話教室、学校支援ボランティア、地域のボランティア活動等である。英国ボランティア青年と町民の交流を通して、諸外国の生活・文化等を学ぶことで国際的な視野の拡大と向上を図っている。

（1）「英国ツアー」

洞爺国際交流協会では、英国青年ボランティアとのふれあいから、話に聞く国、その青年を育んだ国とはどういうところなのだろう、とのことから5年ごとに「英国ツアー」を企画している。

「英国ツアー」では英国青年ボランティアOBや家族を招きレセプションを開催し、その後青年宅へホームステイをして異文化を肌で感じている。人によってはお米やお茶を持っていき、日本食やお茶を振る舞ったりもしている。年を追うごとに英国青年ボランティアOBも増え、15周年記念の「英国ツアー」ではスコットランドにも足を運んでいる。

(2) 英会話教室

英会話教室を初級者向けの「親しみクラス」と上級者向け「学びクラス」の2クラスを週1回開催している。平成20年に本町で開催された「G8北海道洞爺湖サミット」では、英会話教室に通うみなさんが学んだ成果を生かし、語学ボランティアとして、多くの外国から見えた方々のおもてなしに貢献した。併せて、在日英国大使を招いての野外パーティーも開催している。



【英会話教室】

(3) 学校支援ボランティア

本町では、洞爺湖町学校支援ボランティア指導者登録事業にて、たくさんの地域の方々に小中学校で活躍していただいております。洞爺国際交流協会も団体登録をして、各学校で英語をとおり児童生徒とふれあいながら学校応援団として活躍をしています。

来年度から、新学習指導要領により小学校でも外国語教育が本格スタートするが、英国青年ボランティアと併せて国際交流協会のみなさんにもますますの活躍が期待されている。

(4) 設立20周年

平成22年8月に設立20周年記念式を挙行し、英国青年ボランティアが日本で活動をスタートする際にご尽力された興梠 寛 氏（昭和女子大学教授、日本ボランティア学習協会理事）に記念のご講演をいただき、また当初の各関係の方々によるパネルディスカッションも開催された。英国からも関係の方や英国青年ボランティアOBもたくさん駆けつけてくれ、喜びを分かち合った事業となった。

(5) 「地域づくり総務大臣表彰」受賞

前記の活動等により、平成22年度「地域づくり総務大臣表彰」受賞が決まり、12月東京都内で開催された表彰式に会長が出席した。会長は「20年という草の根の活動が評価され、まさに会員の力の結集だと思う」と語っていた。ささやかながら受賞祝賀会と意見交換会も開催され、会員一同30、40周年に向けあらたな特色ある事業展開をしていこうと誓い合ったところである。

(洞爺湖町教育委員会社会教育課 社会教育主事 大森 康弘)

<委員からのコメント>

21年の活動持続、地域ボランティアの働き、当時の村、今は町の公費による経費支援に驚く。それ以上に感銘を受けたのは英国青年ボランティア2名と地域の子ども、若者、年配者たちとのふれあい。その光景は地域の一員そのもので違和感がない。マンネリに陥らない秘訣は地域総ぐるみの支援ということなのだろう。日英両国の21世紀型の新しい文化の形成に寄与していくであろう。大きな希望を抱かせられる。

(吉永 宏)

3 「地元青年団員の中学校への訪問活動」

—大阪府泉佐野市青年団協議会—

～分類 2～

住民のニーズから生まれたボランティア活動

(地域に生じたニーズがボランティア活動に発展する経緯が明示できる事例)

私たちの住む泉佐野市は、大阪府南部に位置し、人口およそ 10 万人。水ナスやキャベツなど代表する農業が盛んな農村的な要素と関西国際空港や大型商業施設が建ち並ぶりんくうタウンといった都市的な要素の二つの面を持ち、「だんじり祭り」が有名なところである。

市内にはその「だんじり祭り」の要ともいえる青年団員がおよそ 1,000 人いる。また、「だんじり祭り」だけでなく、一年中を通して、盆踊りや清掃活動、ボランティア、人権学習、地域活性化イベント等にも取り組んでいる。

そんな青年団が、子どもたちとりわけ中学生と関わり始めたのが 7 年前のことである。

1 中学生との出会い ～地元中学校への訪問活動～

小中学生による校内暴力が世間で話題になったことはまだ記憶に新しい。

あるニュース番組で、ある中学校で、割られたガラス、壊れた下駄箱、落書きだらけの廊下にはゴミが散乱している状況の中、子どもたちが学生生活を送っていると取り上げられていた。その中学校というのが、自分たちの母校でもある、地元にある中学校だった。

市内にある五つの中学校のうち、当時の生徒数およそ 750 人。この学校の生徒たちに変化が現れ始めたのが数年前から。とりわけ平成 16 年度の 3 年生は、入学当時から授業中の立ち歩きや遅刻などが目立ち、2 年生になる頃からその行動が激しさを増し、教師への暴力も頻繁に起きていた。

このような噂を聞き、この中学校に熱意を持った教師が、希望して転勤してこられた。その教師は、当時決して優等生とはいえない私たちに体ごとぶつかり、様々なことを教えてくださった恩師だった。着任以来、キャンプやよさこい、自由に出入りできる教室、様々なことを試してみたが、どれも結果には結びつかなかった。廊下の吸い殻を黙々と拾い続けても、目の前でゴミくずを落としていく生徒たちの姿に、壁を感じ始め、注意をすると突然周りの備品に当たり始めたり、叱られたこと自体を理解できないような態度に、「かつての子どもたちと今の子どもたちはどこかが違う」と感じていたようだ。

学校だけで対応しても解決の糸口がなかなか見えない状況の中で、中学校から地域の諸団体に協力依頼があり、中学校再生委員会が結成された。そこから、青年団員による中学校への訪問活動が始まった。団員 2～3 名がグループになってローテーションを組み、仕事を休んで主に午前中の授業中に学校を訪問し、授業を抜け出している生徒や休み時間にたむろしている生徒たちに声を掛けてまわった。問題を起こしている生徒を無理やり連れ戻したり、叱りとばすのが目的ではない。自分たちもかつてそうだったように、勉強についていけないらだち、受験が近づくにつれて増してくる不安、そんな

気持ちを少しでも理解して和らげてやりたい、そんな思いが私たちを動かしているからだ。学校も教師もどんな取組をしてもどこかで子どもたちを見下ろしてしまう。だから自分たちは同じ目線で語りかけるよう心がけた。そうするとみんな素直なところを持っていることがよく伝わってきた。自分も勉強では苦しんだ方なので、彼らの気持ちもよく分かった。地域の子どもたちが大事な中学校生活で、勉強への不安やいらつきばかりを感じたまま、楽しかった思い出を一つも残せないのではかわいそうだ。そんな思いだけはしてほしくなくて毎日通った。2月の下旬、卒業まで1か月を切り、子どもたちと一緒に何か学校に残せる物を作れないか。そう考えた私たちは、子どもたちが壊した下駄箱2体の修理を思いつく。ある日曜日、声を掛けた生徒たちが一人また一人と学校に姿を見せた。また、教師の呼び掛けにも応えてくれた。問題ばかり起こしていた生徒たちが、はじめは一人二人だったが、朝7時に登校し自ら壁の落書きを落とし始めた。そして、一人また一人と加わり、3年間を過ごした学校を、自分たちの手できれいにして卒業していった。その子たちの卒業式以降は、月に1度足を運ぶ程度になり、現在では行っていない。中学校は落ち着きを取り戻したが、問題が全く起きなくなったわけではない。



【朝の清掃活動】

「先生ばかりが必死になって頑張っているときに、地域がどうサポートできるのか」そんな思いで取り組んだが、本来は教師と生徒との関係づくりが基本。何か起こればサポートできるように地域としてのつながりは保ち続ける必要がある。

2 自分との出会い ～ダンス部発足から夢へ向かって～

あるやんちゃな子を「高校へ行かせてやりたい」という思いからある人に相談した。その人に、「本人がそう思っているのか？」と聞かれて困り、言葉に詰まった。本人の思いや姿を表面しかわかっていなかったことに気付いた。彼は、学校には通っているが教室には入っていなかった。学校へ行っても誰にも相手にされない、学校さえもおどろきな指導をする。そんな事は子どもたちにも響かない。子どもたちに聞いてみても自分が何をしたいのか、高校へ行きたいか、など自分が何者であるかさえわからないように思えた。

ある日、子どもたちと話をする中で、「熱くなれるものを見つけようや」と呼び掛け、「ブレイクダンス」をやってみたらどうかと勧めてみた。そして、地元の高校へお願いし高校生との交流も図った。その高校生たちが、クラブ活動を含め学校生活を生き生きと過ごしている姿を見て、刺激を受けた様子で、高校からの帰り道、彼らから「高校へ行きたい」という言葉がこぼれた。

ダンスを始めて、まずしたことは礼儀を身につけることだった。頭を下げること、靴をそろえること、あいさつをすること、とりわけ頭を下げることは子どもたちにとって嫌なことではたかなくないことであったと思うが、特に大切にしていた。自分たちの中学

校にダンス部を作りたい、自分たちを認めてもらいたいという子どもたちの意思を大切に
するため、別室登校でもいいという学校側の意見を尻目に、自分たちの教室へ入らせ
た。そして、ダンス部を作ってもらいたいという作文を書き校長先生に頭を下げて願
いし、ダンス部が発足した。その後、3年生が入試ということもあり、学習会にも取り
組むようになった。学習会には、学校の先生、卒業した高校生など身近な人たちに先生
になってもらった。また、作文にも力を入れた。それは、子どもたちの考えを文字に変
えることによって、自分を知り、取り戻し、見つけ、変え、自分探しをしてほしいとい
う思いを持ったからである。私たちもまた、子どもたちの学力や思い、考えなどをリア
ルタイムに知ることができた。最初は、「書けない」世界をさまよっていたが、次第に書
くことから逃げなくなり、ひらがなばかりの文だったが、自分の文を見て、自分を知り、
自分を変えたいという思いの第一歩だと感じた。この時には、書かされたのではなく、
自分を文字に変えたというべきではないだろうか。それから、私たちとの壁は崩れ、本
当の意味で話すことができる関係になった。3年生だった9人の生徒は、全員が高校受
験し、5人が公立高校、後の4人も定時制、単位制高校に進学し、今では後輩の指導も
している。彼らは自分が少し見えたのだと思う。



【体育館での記念写真】

学校に行けない不登校の子の対策や居場所はたくさんある。しかし、学校には行くが、
教室に入れないうちもいる。その子たちに
教師を含め周りの大人が、どのように手を
差し伸べてあげられるかも大変重要なことだ。
しかし、自ら本当の自分に出会うというこ
とは成長する上で最も大切な事である。その自
分探しの環境を、ゆっくりゆっくり時間をか
けて作ってあげることで、子どもたちは「真
の自分」「正直な自分」「新しい自分」そして
「大きな夢」を探し出すことができる。

そして今回卒業した彼らが、当時の自分たちのように様々な悩みや憤りを感じている
後輩たちに、3年間で得た楽しみや苦勞、経験などをどのように教え、伝えていくかが
重要だ。またこのような新しい地域コミュニティを形成していく必要がある。

(泉佐野市青年団協議会 会長 西野 茂)

<委員からのコメント>

泉佐野は、だんじり祭りや盆踊りなどで地域ごとの地元意識が強い所。青年団も活
発に活動している。その青年団が母校である中学校の一大事に立ち上がった。中学生
を対象にした事業に取り組む団体は極めて少ない。思春期という不安定な時期にある
からであろうか。通学合宿やボランティア活動などにも一緒に取り組んでいる。中学
生の直近の先輩でありながらも、あくまでも彼らの伴走者として一緒にゆっくり、そ
して熱く歩んでいる。

(山本 信也)

4 「高月小学校で夢を語る会」—滋賀県長浜市立高月小学校—

～分類 2～

住民のニーズから生まれたボランティア活動
(地域に生じたニーズがボランティア活動に発展する経緯が明示できる事例)

1 組織・運営体制

滋賀県琵琶湖の北西に位置する高月小学校は、現在 335 名の児童が学んでいる。

平成 19 年 8 月に地域の絶大なる支援を受けながら地域と共に子どもを育てる教育活動の一環として『高月小学校で夢を語る会』が地域住民の手によって発足した。

これは、先人の文化を伝え知恵や経験を生かした活動をすることが、子ども・学校・そして参加される皆さんの三者のためになり、年齢を超えてふれ合い、刺激し合い、お互いが幸せになれるという「三方よし」の考えに基づいている。発足当初、約 30 名のボランティアの方が会員として登録され「できる人ができることから始めよう」を合言葉に、息の長い無理なくできる活動を展開していくことが確認された。そして、子どもを中心とした温かなまなざしのあふれる学校づくりを目指し、体験や交流ができそうなことを熱心に話し合われ今日に至っている。

この活動は、基本的に毎月 1～2 回、授業に支障が出ないように 40 分の昼休み時間に実施され、毎回多くの児童が興味深く熱心に参加している。その他にも、総合的な学習の時間や各教科等の学習支援にも活動している。

2 実際に取組まれた内容

体験・交流の場で！

- ・どじょうすくいの実演・クイズ王大会・腹話術・竹馬・バルーンアート・雪像づくり・人形劇・かき餅焼き・どんぐり手芸・ミニ生け花・ちんどんやさん
- ・クイズ王大会・手品・注連縄づくり・剣玉づくり
- ・ペットボトル風車・餅つき大会・紙飛行機

展示の場で！

- ・昔の道具・地域の美術館としての展示（ちぎり絵、油絵、手作りアート）

学習支援の場で！

- ・米作り・地域行事の由来・昔の暮らし・和楽器の演奏・漢字検定



【ミニ生け花づくり】

体験・交流活動では会員の方々が念入りな事前準備をされている。例えばペットボトル風車づくりでは、約 2 カ月前から準備に取りかかられている。まず、風車の部分となるペットボトルを全児童数分確保され、機械で適切な大きさにカットし鮮やかな色のペンキを吹き付ける。乾燥をさせた後、羽根を取り付ける部分に穴を空け正確にはまり込

むように調整し、最後に、ペットボトルの支え軸となる鉄線を適切な長さに切り揃え準備が整う。そして前日に全ての材料が学校まで運び込まれ、子どもたちがすぐに作業に取り組めるようにする。羽根の取り付けは容易なもの鉄線を折曲げるのには一苦労。慣れない手つきで一生懸命取り組みでき上がった時には歓声が起こる。夢を語る会の方々は、「子どもたちの驚きや喜びの声を聞くのが私たちの一番大きな励みです」と、口をそろえて言われている。毎回、活動の様子は地元の新聞社が取材に来られ滋賀県版に掲載されるとともに、学校もホームページや校報で詳しく発信し地域と一体となった取組に称賛の声をいただいている。

3 成果と課題

(1) 成果

- 夢を語る会の「子どものために」という思いと「夢を語る」ことへの感謝の心が互いの願いが噛みあった活動になりつつある。
- 子どもの祖父母の年代に当たる夢を語る会のメンバーは、「純粋な子どもたちとふれあえる喜びは何にも勝るものがある」と話されている。また、メンバーと子どもたちのふれあいは、メンバーの生き甲斐にもなっている。



【ペットボトル風車づくり】

- 「1枚の写真」という活動では、子どもたちは文字通りに写真を1枚だけ撮ってくる。もっと純真な子どもの考えや思いに近づかなければならないと再認識できた。
- 夢を語る会のメンバーには、地域のボランティアグループに加入している人が多く、発足当時は町内のボランティアグループと連携をとりながら「どじょうすくい」「ちんどんやさん」等の演技をステージで披露していただいたが、ボランティアグループ間の連携がさらに広がり町外や他地域からも応援を求めることができた（銭太鼓や玉すだれ等）。

(2) 課題

- 夢を語る会の活動時間が、月曜の給食後から5校時までの約40分間に限られていること。
- 何人の子どもたちが来てくれるのかわからないという不安。また、そのための活動材料の準備や事前のアンケートなど一つの活動に数回の準備が必要な時もあること。
- 時間内に活動を終わらせる難しさ（工作関係であれば、どの段階まで準備しておいて、どの活動を子どもにさせるかの見通し。決めた活動が子どもにとって楽しく、新しい発見であったり驚きであったりと、目を輝かせて取組める充実感があるかどうかなど）。
- 3年目を終えるに当たって、活動内容がマンネリ化していないかどうかの見直しと

子どもたちが真剣になって取り組む活動になっているかの見極め。

- 「夢を語る会」のメンバーの高齢化に伴う問題と新メンバーの募集方法（月別の活動を、責任者を決めて実施する。餅つきなどの大きな活動はメンバー相互が連携して準備物の手配や指導、後始末ができるよう一つの自治会のメンバーに任せる、等）。

4 今後の方向性

【さまざまな学習支援】

- ・ 田んぼの学校、生活科の昔の遊び、昔の生活道具の説明などゲストティーチャーとしての活動の発展、継続。
- ・ 家庭科ミシン授業補助のような授業補助活動を更に広げていく（例えば、算数のグループ学習補助や理科実験補助、音楽科の伴奏や合奏指導実施等）。
- ・ 環境整備活動と補助（花木の展示、学級花壇の手入れ、葉の刈り込み、スクール農園の世話等）。
- ・ 検定活動実施（漢字検定、観音検定、パソコン検定、びわ湖検定等）。

以上の分野が独立して活動を展開する中で、各分野のメンバーによる自主運営ができるよう働きかけていきたいと思う。

また、それに伴う運営経費を確保し、更に充実させるため「夢を語る会」を支えてくださるボランティアの発掘が急務であると考えている。

（長浜市立高月小学校教頭 浅野 茂伸）

<委員からのコメント>

滋賀県はかつて「近江商人」と呼ばれた人びとが“つくる喜び”“売る喜び”“買う喜び”の「三方よし」の精神の伝統を誇りにする地域である。高月小学校『夢を語る会』の活動は、その精神を現代に体現した“子ども”“学校”“ボランティア”のそれぞれが喜びを分かちあう「三方よし」の学校とコミュニティによる協働活動とあってよい。

児童数約 300 人の小さな学校の校長は、昼の時間帯 40 分をコミュニティの教育力に委ね「地域の皆さんに頼りっぱなしです」と感謝する。予算はゼロで、教師の手伝いも困難な状況だ。が、そのことが住民の主体性と創意工夫の精神に灯を点けた。3 人の「推進調整役」が地域の生活の知恵や手工芸、一芸に秀でる人や文化伝承者などを発掘し、リユース・リサイクルをモットーにお金をかけない“ハンドメイド”な体験教材を提供する。

“スモール・イズ・ビューティフル”な“実践型”学校運営協議会はとても輝いている。

（興梠 寛）

5 「子ども大学かわごえ（C U K）」

－ N P O 法人子ども大学かわごえ（埼玉県川越市）－

～分類3～

ボランティア活動とネットワークづくり

（組織化や協働により地域のネットワーク化に役立つボランティア活動の事例）

1 組織・運営体制

（1）運営組織

子ども大学かわごえ（C U K）は、平成 20 年 2 月 22 日に N P O 法人子ども大学かわごえとして設立され、平成 21 年 3 月から運営を始めた。

組織は、理事 9 名と一般会員 49 名の組織で、全員が本業を持つ無償ボランティアである。常勤の者はおらず、70%の会員が川越市民である。運営体制は学長を中心とする教学と理事長&事務局長を責任者とする経営に分かれ、業務は、①学生募集、②講師招請、③教室の手配等授業手続き、④授業の実施、そして⑤資金調達と経営などからなっている。

会員（ボランティア）相互のコミュニケーションは、基本的に電子メールの C U K デジタルネットワークを主とし、委員会形式を取り、またその他は授業の折などお互いに顔を合わせて意見を交わしている。学生（児童）・保護者と会員の間には、C U K コミュニティ・デジタルネットワークが構築されており、毎回の授業の前 30 分間にホームルームを開き、情報の交換を行っている。

平成 22 年度の運営予算は 230 万円であるが、収入源は授業料、会費、民間助成団体の助成金、企業や個人の寄付金である。行政からの補助金は一切受けておらず、子ども大学かわごえは名実ともに「市民立」大学である。

平成 22 年度に埼玉県で初めて実施された県内の 1,900 の N P O 団体を対象とする埼玉県 N P O 大賞のコンペで C U K は大賞に次ぐ 2 位の優秀賞を受賞した。

（2）学生（児童）と教師

本学で学ぶ学生は小学校 4～6 年生で、当初 50 名を予想していた受入れ人数だが、応募の多さから平成 20 年度 116 名、平成 21 年度 100 名、平成 22 年度 172 名を受け入れた。実際には学生の送迎を行う保護者 100 名前後も講義に参加している。

講師は川越市内にある東京国際大学、東洋大学、尚美学園大学を中心とする大学教授および実務専門家、そしてメディアでの著名人もいるが、基本的に謝礼はゼロであり、ボランティアとしての参加をお願いしている。

（3）地域関係者

事業運営に当たり、教育委員会の協力を得ることで、川越市、鶴ヶ島市、川島町内の公立&私立の小学校 42 校から大勢の応募があり、上記 3 大学を中心に講師を迎え、

東京国際大学を中心に教室等の施設や機器の無償提供を受けている。その他中学、高校、川越商工会議所、市民団体、川越市民などから様々な協力を得ている。

2 取組の内容

子どもたちへの教育支援及び市民からの教育改革の一助として、ドイツで初めて創設された子ども大学を参考に、子どもたちに知的刺激、知的好奇心を与え、学ぶことへの楽しさの感覚を覚醒させることを理念として、川越に所在する東京国際大学、東洋大学、尚美学園大学の教員の協力を得て、2008年、わが国初の「子ども大学かわごえ」を立ち上げた。川越市や鶴ヶ島市の小学4～6年生を対象に、子どもたちが抱く社会や自然の様々な“なぜ”（なぜ人は死ぬのか？なぜ戦争が絶えないのか？）に答えるため、大学教授が専門的なテーマを、大学の教室でやさしく教え、知的好奇心を刺激している。授業は月に1回、土曜日の午後の実施である。

3 成果と課題

日本型の子ども大学を目指すC U K教育の3本柱は、純粋学問的なテーマを追求する「はてな学」、キャリア教育の「生き方学」、郷土を知る「ふるさと学」であるが、そのうちの「生き方学」では体験学習の場として、平成22年3月に学園祭“こどもがつくるまち「ミニかわごえ」”を実施し、子どもたちに職業体験・体験教育をさせた。喜々として活動する子どもたちの姿には、教室での理論的学習と実践的学習が自己の中で統一した実感的喜びを見たように思えるし、保護者達も大感激であった。

現在までに21回の正規授業を実施した。授業のタイトルは「なぜ飛行機は空を飛ぶことができるか？」「なぜカメの甲は六角形か？」等々である。大勢が受講する一斉授業を補完する意味で、少人数のワークショップやゼミも実施している。

子ども大学の教室では同伴した保護者も一緒に授業を受けており、親子共学により追加的な教育効果が出ている。

保護者へのアンケートで、子ども大学で学んだ結果、子どもがいろいろなことに興味を持つようになり、授業で聞いた話を基に自分で辞書やインターネットで調べたりして、学び方や行動に前向きの変化が出てきたという回答を多くの保護者から得ている。

平成22年に埼玉県の上田知事や教育委員会が子ども大学に共感し、子ども大学かわごえをモデルにして県内6地域に新たに子ども大学を開校し、一地域から県内へ、そして全国へと教育改革が更に一歩前進することになった。

4 今後の方向性

(1) 資金的強化

子ども大学かわごえは「市民立」大学で、運営資金を会費、授業料、民間助成団体助成金、寄付金で100%まかなっている。今後、事業拡大のため賛助会員を増やして小口の資金を増やす一方、冠講座を設けるなどの方策で大手企業の協力を得ることを検討している。

(2) 子ども大学設立拡大の支援

平成 22 年度事業で埼玉県内 6 か所に子ども大学が出来たが、現在、幕張、鎌倉など首都圏のあちこちで子ども大学を立ち上げる機運が出ている。我々は創始者として積極的に設立を支援し、今後、全国に“新しい学びの場”として子ども大学のネットワークを広げていきたいと考えている。最近、文部科学省生涯学習推進課にも関心を持っていただいております、バックアップを期待している。

(3) 国際展開

日本子ども学会が子ども大学かわごえに関心を持ち、学会のホームページで何度も紹介記事を日英華の 3 か国語で掲載した。現在ドイツの子ども大学ゲッチンゲンと交信しているが、将来中国、韓国、ベトナム等のアジア諸国へ日本型子ども大学の輸出を図っていきたい。

(子ども大学かわごえ 事務局長 酒井 一郎)

<委員からのコメント>

本事例は N P O 法人が運営する「市民立」大学である。地元・川越市内の 3 大学と連携し、地域の小学生に勉強（刻苦勉励）から学問（真理探究）への一歩を踏み出すことを支援している。「はてな学」「生き方学」「ふるさと学」の 3 分野に分けてそれぞれの大学が工夫して提供する授業内容のユニークさや、市民団体等との地域ぐるみの幅広い連携の成果に注目したい。

また、学園祭“こどもがつくるまち「ミニかわごえ」”は、職業体験・市民体験をする実践的なまちづくり学習の場となっている。

(松澤 利行)

6 「こばやし発！ はしれ ぞうれっしゃ」

—宮崎県小林市青年団協議会—

～分類3～

ボランティア活動とネットワークづくり

(組織化や協働により地域のネットワーク化に役立つボランティア活動の事例)

小林市青年団協議会は、平成6年度の全国青年大会を皮切りに平成13年度までの間に合唱の部で6回、演劇の部で3回の最優秀賞を受賞するなどの実績を持つ。その青年団が「こばやし発！ はしれ ぞうれっしゃ」に取り組んだのは、平成9年度からである。

1 「こばやし発！ はしれ ぞうれっしゃ」

平成6年全国青年大会のアトラクションで披露された世田谷区民による「ぞうれっしゃがやってきた」(作詞：清水則雄、作曲：藤村記一郎)に感銘を受けた本会が、住民との協働による活動の一環として始まったのが事業の経緯である。「こばやし発！ はしれ ぞうれっしゃ」事業の主催は、本会とぞうれっしゃ実行委員会である。初演時は、本会主催事業として実施し、翌年からは市教育委員会主催事業の中の一つとして、実施(平成21年度まで12回)されている。青年団員はもとより市内の保育園・幼稚園児、その保護者、小学生、中学生、高校生そして一般までおよそ200人から300人もの出演者がステージでおよそ50分の合唱組曲「ぞうれっしゃがやってきた」を上演するものである。発表までの間に合同練習、レクリエーション活動を通して、青年と子どもたちの交流活動が行われるなど、地域のイベントとして定着している。

2 組織運営体制

実行委員は、すべてが青年団員で構成されるが、会長ではない団員が実行委員長を務め、委員に次期役員候補を取り込み、次年度の活動にもつながるよう組織している。青年団とは別な名前を掲げることで、他団体や他市町村の若者にも参加を呼び掛けるための「実行委員会」体制である。他団体や他市町村青年団の役員会、定例会等にお邪魔して、「ぞうれっしゃ」への協力のお願いや実行委員会への参加も依頼していた。本会以外の視点を取り込むことで、本会の一事業から地域の事業として広い視野で運営していくこともねらいにあり、そのことが団員の責任感や企画運営に携わるスキルアップ、リーダーとしての成長を促す結果にもつながっていった。

3 取組の内容

職種や年齢に関係なく一緒に活動できる事業の企画運営を学ぶこと。これはこの事業の大きな魅力である。ほかにも「ぞうれっしゃ」という合唱組曲を手段として、①平和への思いや命の尊さをみんなで学ぶこと、②園児から高齢者までと幅広い年齢層の参加

をみて、歌を通して世代間で交流を図ること、③子どもをはじめとした地域の人と一緒に事業をすることで人と人のつながりができ地域が活性化すること、などを目標としていた。

本会の年間スケジュールから具体的に見ていくと「ぞうれっしゃ」を一年間の事業の終点に置き、年間計画を組むことが、事業の進め方である。その中で子どもとの交流事業を年3回程度、他団体や他市町村青年団との交流事業を2回程度行い、「ぞうれっしゃ」の基礎づくりとする。実行委員会は例年9月に発足させ、そこを中心とした合唱練習や会場演出などの構想づくりを開始した。月に一回程度の全体合同練習などを行い、そのたびに参加者のモチベーションを上げ、本番にピークを持って行く。ここでも青年団員が潤滑油となり、いろんな年齢層の方々と練習の合間などに交流を行うことが目標達成のためのポイントであった。

4 成果と課題

実は「こばやし発！ はしれ ぞうれっしゃ」は、一度幕を閉じている。隣村との合併へ向けた準備の影響で開催時期や場所など様々な問題が持ち上がり、共催の小林市と青年団とで検討を重ねた結果、開催を断念せざるを得なかったからである。当時、会長であった私自身には8年間走り続けてきて「少し休憩してみよう…」という気持ちもあった。

しかし、この開催断念への反響の大きさは、団員の予想をはるかに上回るものであった。「なぜ?」「楽しみにしていた」「また参加したい!」そんな参加者や参加児童の保護者からのたくさんの声に自分たちの活動、そして「ぞうれっしゃ」について、1年かけてそれぞれに真剣に考えることとなった。そこまでこの活動が、市民に浸透していた事業であったことに改めて気付かされる格好となった。ある保護者から「このような事業があることをこのまちの誇りと感じていました。ぜひ、再開を」という声が届いたりもした。

新小林市となって迎えた平成18年度「ぞうれっしゃ」の再開を決めた。それは9回目の「ぞうれっしゃ」ではなく、新小林市の青年団協議会による「新しいぞうれっしゃ」だった。今までおざなりになっていた運営やぼやけていた「ぞうれっしゃ」をやることの意味がこの年はっきりと見えた。その意味においてこの年の「ぞうれっしゃ」は団員にもOB、OGさらには何より参加いただいた皆さんにもかけがいのないものになった。

それから続けられた「ぞうれっしゃ」も今年度になって再度、幕を閉じた。原因は単純に団員不足にある。人と人の関係が希薄になっているのは都市部だけでなく、若者が人との交流に距離を持ち、団体での活動にも抵抗感を示すようになってきている。また、会としても時代を読んで活動内容をシフトチェンジすることも必要であり、しっかりと自分たちの思いを伝えることができていないことも一因かもしれない。同じ思いを持つ仲間作り、その世代交代など様々な問題を抱えている現状にある。

6 今後の方向性

本会が行う「こばやし発！ はしれ ぞうれっしゃ」の知名度は、ある程度認知され、

昨年度は作詞・作曲の先生までお見えになり、一緒に歌った。そして自分たちの活動についても関心をいただき、感激した。さらには、毎年会場にお見えになるという女性からも「毎年、素晴らしい歌声をありがとう」とお声掛けをいただいたりした。

現状では団員の確保が急務にあり、これが一番難しいことである。しかし「ぞうれっしゃ」は活動の一つであるが、青年団活動というものは仲間がいるからこそできる。そしてその仲間との交流で人間として成長していけるものである。自分がそうであったように、仲間から、活動からたくさんものを学び、たくさん宝物ができた。

地域のため、子どものため、と堅苦しく考えるより自分達が楽しめることをやり、それが自分の住む地域のためになる。それぐらいの気持ちでいい。一人でできなければ二人で、二人でできなければ三人で、と仲間を増やしていけばいい。それが青年団体の基本であり、活動の力となる。時代の流れをしっかりと見定め、時には冷静に、時には熱く、時の青年がどこを見ているのかを考えながら仲間を増やすのも楽しみの一つと思えば団員確保も楽しみの一つに変わる。子どもたちから年配の方まで、事業の中で、お互いに名前を知らなくてもお構いなしに活動できる、交流ができる。そんな「自然な交流の場」を作ることが協働の第一歩と感じている。

(小林市青年団協議会元会長 戸高 明廣 (平成16～18年度))

<委員からのコメント>

小林青年団の合唱は見事だ。全国青年大会で6回も優勝経験がある。カラオケで鍛えたのどが、仲間と練習を重ねることによって美しいハーモニーになる。声が合えば心も通い合う。この喜びを体験したことが、彼らの原動力になっていると思う。この喜びを地域に広げようと始めた取り組みの一つが「はしれぞうれっしゃ」だ。今回でちょっと休むようだが、組織は生き物。10数年前も同様だった。そこに若者がいる限り再生は可能だ。

(山本 信也)

7 「ヤンボラにいつる」－福島県会津美里町新鶴公民館－

～分類 4～

ボランティア活動への行政支援

（体験活動ボランティア活動支援センターがきっかけとなり、様々な工夫で地域と一体となって活動している事例）

1 組織・運営体制

平成 15 年 7 月「にいつる体験活動・ボランティア支援センター」が開設され、アンケート調査等の結果から、地域の青少年が体験活動よりもボランティア活動に取り組む機会が乏しいという実態が明らかとなった。そこで、青少年がボランティア活動に意図的・計画的に取り組む環境づくりが必要と考え、平成 15 年 11 月、青少年ボランティアグループ「ヤンボラにいつる」と名付けた組織を結成した。

構成メンバーは、新鶴地域の小学 5 年生から中高生までの登録制で、平成 22 年度は 42 名の会員が登録している。また、商工会、社会福祉協議会、町健康福祉課、幼稚園・小・中学校、高齢者学級などが協力団体として活動を支援している。

2 取組の内容

(1) 年間の活動内容

月	活 動 内 容	活 動 場 所	連携団体等
5	新鶴駅周辺の清掃・花壇整備	新鶴駅前	商工会女性部
6	花いっぱい活動 ※事例 1	新鶴公民館	高齢者学級
7	七夕かざり作り ※事例 2	高齢者福祉センター	社会福祉協議会
8	幼稚園の清掃(ワックスがけ・窓みがき)	新鶴幼稚園	新鶴幼稚園
9	町敬老会のお手伝い(席の案内・お弁当配り)	新鶴小学校体育館	町健康福祉課
9	お年寄りへの手作りクッキープレゼント	高齢者福祉センター	社会福祉協議会
10	秋の花いっぱい活動(球根植え)	新鶴公民館	
11	体験活動(クリスマスケーキ作り)	会津自然の家	
12	一人暮らしの高齢者への年賀状送付	新鶴公民館	社会福祉協議会
1	体験活動&1年間の反省ミーティング	新鶴公民館	

(2) 活動の実際

ア 事例 1 従来の活動を合同で実施した取組「高齢者学級との花いっぱい活動」

新鶴地域には高齢者学級「新寿(しんじゅ)学級」があり、学級生は自分たちで立てた計画の下、月 1 回程度の学習活動を行っている。活動にはボランティア活動も取り入れられており、公民館の清掃などが行われていた。6 月の「花いっぱい活動」はもともとヤンボラにいつるで実施していた活動であったが、新寿学

級の学級長さんとの会話の中で「子どもたちと一緒にふれあいたい」という思いをお聞きし、一緒に花植えをすることを提案、実現することとなった。

実際の活動では、慣れない手つきの子どもたちにベテランの高齢者のみなさんが花の苗の扱い方や植え方、水やりのしかたなど教えながら楽しく花植えができた。ヤンボラにいつる会



員の中には新寿学級生のお孫さんもあり、孫と一緒に花植えができることで、更に喜びも大きかったようである。ヤンボラにいつるとしても、大人数で楽しく、しかも教えていただきながらできることで、大変心強く感じている。この活動はその後新寿学級の計画の中にも定着し、子どもたちとのふれあい、異世代間の交流ができる大切な時間となっている。

イ 事例2 活動日の調整により活動の機会を拡大した取り組み「七夕かざり作り」

新鶴地域では、社会福祉協議会が毎週木曜日に生きがいデイサービス「ふれあいサロン」を実施している。ヤンボラにいつるでは毎年9月に敬老の日にちなんでお年寄りへの手作りクッキープレゼントを行ってきた。ふれあいサロンの担当者と打ち合わせをする中で、もっと一緒に活動ができないかという話題になった。しかし平日開催のため、学校がある子どもたちにとって実際に活動することは難しい。夏休みなどを利用すれば木曜日の活動も可能ではないかということから、ふれあいサロンで夏休みの時期に行っていた七夕かざり作りをヤンボラにいつるがお手伝いする形で実施することとなった。

子どもたちは工作が大好きであり、夏休み中であることからたくさんの参加者があった。折り紙で星の形の作り方を子どもたちがお年寄りに教えた。お年寄りに分かりやすく説明するために、ゆっくりはっきり話すことや何度も繰り返して教えるなど、子どもたちには自然と相手を思いやる姿が見られるようになった。一緒にかざりを作りながら「家はどこ?」「毎日どんなことをして遊んでいるの?」など会話もはずみ、みんなで七夕かざりを完成させると大きな感動が得られた。

7月、9月と同じお年寄りの方たちとふれあう機会を持つことにより、お互いがより身近な親しい存在となっ



てきている。「また来年も楽しみにしていますよ」というお年寄りの言葉は、子どもたちのボランティア活動に対する満足感や達成感につながるとともに、次の活動への大きな励みとなっている。

3 成果と課題

- (1) 「ヤンボラにいつる」は「地域のために自分のために、できるときにできることを！」をモットーとして、自分たちの住む地域だからこそできるボランティア活動を行ってきた。各種団体と連携してきたことによって、地域から期待される組織に育ってきたことを嬉しく思う。さまざまな活動を通して子どもたちの心の中に、お年寄りを思いやる心、地域を大切に思う心、そして新鶴地域の住民であることの自覚も育っているものと思われる。さらにこうした青少年の活動が、地域の活性化や教育力の向上につながっていることを信じたい。
- (2) 小学5年生から高校生までの組織であるが、中高生は部活動等に忙しく実際の活動は小学生の力に頼っているのが現状である。たくさんの参加を可能にするような実施日・時間の調整や、魅力ある活動内容等を工夫し、今後も地域に根ざした活動を継続していきたいと考える。

4 今後の方向性

ヤンボラにいつるの活動がより活発となっていくためには、子どもたちの生活の母体となっている学校との連携が必要であると考えます。学校でも心の教育に力を入れている今、ボランティア活動を地域ぐるみで推進していくことは大変重要である。地域に小学校、中学校が1校ずつという連携が図りやすい条件を生かし、今後は更に子どもたちがボランティア活動に取り組みやすい環境を整えていければと考える。

(新鶴公民館 鈴木 昌子)

<委員からのコメント>

本事例の特徴としては、幼稚園から高齢者学級まで幅広い年代層とふれあいながらの活動であることに加え、地域のさまざまな団体との連携が円滑であることが挙げられる。支援センター（公民館）のコーディネート機能が十分発揮されている証である。また本文中に記述はないが、「ボランティア・ダイアリー」と称する活動内容を記録しておく会員証があり、会員⇒活動を証明してくれる人（認印）⇒支援センター長（証明印）⇒学校⇒会員という流れによって、地域ぐるみで活動を評価し、支援していくシステムが確立されている。

(松澤 利行)

第5章 まとめ ー地域活動から学ぶー

第5章 まとめ —地域活動から学ぶ—

本章では二つの点を明らかにすることを意図している。

第1点は活動事例調査についてのふりかえりである。各委員が分担して現地を訪問しての報告は個々の活動全般にわたって詳細に述べている。

その内容から読者は多くの学びと示唆を得るに違いないと想定するが、ここでは多様多岐にわたる活動の展開から汲み取ることのできる共通点に焦点を当てて考察する。

第2点は地域活動を更に積極的に展開するための方策を明らかにすることである。とりわけ、地域活動をより一層活発に展開するための各地域の「体験活動ボランティア活動支援センター」の役割について考察する一助としたい。

すなわち新しい地域社会を目指し、どのような課題にどのように取り組むことが有効かについて考える。

急激な質的・量的社会変化に対応する「新たな『公共』」の理念と実践に基づく地域活動の開発が待たれているとの視点から地域活動の社会的意義について考える。

1 事例の特徴と活動の意義

地域活動はいくつかの構成要因によって成立する。その重要な一つが“課題”である。

課題は活動展開の目的を明示した目標であり表現である。現状と理想とのほさまにあって生起する問題への対処を提示している。

課題は個人もしくは集団の考えやすなわち価値観に基づく使命を表している。社会に課題を提起することにより多くの人からの支持を得ることを期待する。

すでに第2章で示したように本調査研究委員会は「地域課題の解決に寄与するボランティア活動」「住民のニーズから生まれたボランティア活動」「ボランティア活動とネットワークづくり」「ボランティア活動への行政支援」の四つに分類して研究を進めた。これらの四つの領域は隣接し重なり合っていることに留意し事例の特徴とその意義についてとりあげる。

(地域の絆の強化)

「人形浄瑠璃で地域をつなぎ」は伝統芸能としての人形浄瑠璃の伝承という課題への取組である。

地域に伝わる各種の伝統芸能が後継者不足、継承環境の弱体化、社会の無関心、現代ライフスタイルからの遊離などによって継承が困難となっている。地域が直面している生活に関わる問題は深刻であり、伝統芸能の継承に関わるゆとりがなく、人形浄瑠璃継承かそれとも生活課題への対処かというジレンマが先行する。

人形浄瑠璃継承者が高齢化しているので青年の手で人形浄瑠璃に取り組み、その果実として「農村舞台」保存を可能にしようと発意し、人形遣いの手法を学ぶことになった。その継承のための日常的努力を一層加速させたのはイベント開催への挑戦であった。集落に存在する「農村舞台」を用いたイベント開催のために広く支援を求めた。求めざるを得なかったからである。イベントは成功し、世代と地域を超えた絆がいかに大切であ

るかということに気づき、絆の相互扶助力を見直す成果を得た。

（支援者の出現）

「チューリップのお庭」はボランティアとしての活動を地域の自発的参加のボランティアが支援するという構図による展開である。

砂場、水場、自然とのふれあい、安全を配慮した子ども遊び場づくりをテーマとし、両親が主体的に参加して活動を進めた。そのことが地域の潜在的貢献力を刺激し、地域のある人の厚意により無償で土地を継続的に使用することが可能となった。

経験や技能を提供する支援者の自発的参加も実現した。このことについて自分も関わりたいという個人や集団の行動が支援する働きとなって表面に現れた。地下水が勢いよく噴き出した姿の様であると言えよう。

日本人の中にはボランティアとして位置づけられることに違和感を持つ人がいるかもしれない。それに対して支援は明解である。篤志家というイメージと重なっている面もあるが、支援することは私の選りですと言われる。

新しいアクションが地域に影響を与え、同志的な思いと共振し、必要な支援を誘発する点が「新たな『公共』」の実践例となるのではないか。

（ネットワーキングによる活動の展開）

ネットワーキングの思想的原理は「民主主義に基づいた市民社会の実現」であり、市民の自立と連帯を基礎とする。

個人及び集団が分野、目的、方法を超えてつながることによってそれぞれの活動を一層強め、向上させ発展させることを目的とする。現代のパーソナル・コンピューター機能を先取りしたと位置づけできるかもしれない。

「おうみ未来塾『仕事人と語ろう』グループ」の10期生6人によって進められている地域貢献プロジェクト「おうみ未来塾『仕事人と語ろう』」は、ボランティア活動が人と人をつなぎお互いを生かし合いながら成果を収めている事例である。

6人のネットワーキングを生かして地域の仕事人—その分野のスペシャリストを選び、子どもたちに仕事の特色と大切さを興味深く紹介する活動である。人と人のつながりの深さと広がり活動の幅と内容を支え、有意義な取組となっている。

ネットワーキングは真実を求める同志的つながりを強め、活動を有意義に展開する力となることを実証する理念と実践である。

（新しい役割の開発と実践）

地域の特性によって地域活動の展開は多様な形をとり活動の主導者も異なる。行政が活動の主導者となることに対して抵抗感を抱く人もあるが、その選択は地域に委ねるべき事柄であり否定的な面として取り上げることは避けなければならない。

「さって子どもによる子どものための情報誌づくり」の最大の特徴は市民と行政の協働による子どもセンター活動の展開である。市内の中学校PTAから推薦されたボランティアが教育委員会からコーディネーターとして委嘱され、活動センターのスタッフと

して活動する。

保護者、教育関係者及び公共施設、職域などが体験活動ボランティア活動の展開に必要な情報を共有し地域ぐるみの教育活動を展開し、公共性と活動の継続性を保持させる。

子どもたちの積極的参加を実現する条件として最も重要なことは、活動が地域に広がることによって地域からの強力な支援を新たに獲得することである。行政と地域の協働の開拓は「新たな『公共』」の未来に続く一つの方策として期待される。

（支援と創意）

調査研究で取り上げた活動事例は自治体職員、自発的参加のボランティア、支援者のいずれであっても努力を傾けて活動を展開している点が共通している。地域が直面している問題の解決に最大限の努力をつぎ込み、地域ぐるみの支援を獲得しようとの働きである。

青少年健全育成、高齢者介護、自然環境保持など地域が直面している様々な問題の解決はその分野に所属する者のみの役割ではない。地域総ぐるみで取り組む活動成果を期待している。

「大野子ども体験活動・ボランティア活動支援センター」は子どもと大人が参加し共に楽しむという極めてユニークな活動であり、創意工夫に基づいた活動の展開を特徴とする。

情報化社会の現今、魅力に乏しい活動では子どもと地域にアピールできない。低調な参加であれば課題解決の道が閉ざされる。その壁を大野の事例は超えている。

人口過疎と高齢化が進行し地域の相互扶助力が弱まっていると指摘されるが、そのことは現実であるとしても指摘だけでは問題解決につながらない。

まず、身近な問題を取り上げて解決法を提案し、実践することによって得られる達成体験を地域の中に蓄積する。そのことを通じて地域の力が強まる。従来の行政（官）と民間との二区分に固執するのではなく、新しい協働関係を地域に築くことが主たる目的であり必須事項である。

各地の活動事例はその先導として貴重な学習素材を提起している。

2 活動推進の鍵

活動を推進するきっかけは社会状況にしたがって多様な形をとるが、ここでは各事例の活動契機を取り上げ、その特徴と留意すべき点について考える。

（枠を超える個人の発意）

いつの時代でも変化と混乱の社会に直面すると、それまでのしきたりや思考にこだわらない新たな考えを提案し実践するリーダーが現れる。

歴史をふりかえると様々な分野において先導的リーダーを見出すことは容易である。それらのリーダーの適確な評価は後世において鮮やかになる。活躍の当初は社会から無視され気づかれないことがないとしても改めてふりかえられることによって優れた働きであったと認められる。

新しい活動を提案し展開している事例を始動した人の多くは既存の枠組みを超えて活動課題を捉えようとする。

問題解決、課題達成、活動の選択などをこれまでの仕組みに基づいて取り上げ対処することは既存の枠—社会システムに適合させる作業にとどまる。複雑な現代社会で生起する新たな問題を全体として把握することによって初めて解決に近づく。既存の枠組みの中で捉えることによる解決は困難である。

成果をあげる活動事例は既存の枠を超え、結果として地域を活性化させる。

(理想を実現する組織)

活動の展開が個人のレベルにとどまるかぎり限界を伴う。深刻な地域問題の解決を目標とする場合、限界線を越えることによって理想に近づくことが可能となる。そのためには個人としての発意と努力だけではなく集団として組織で取り組むことが必須条件となる。

少人数多人数の幅があるとしても複数の参加者によって構成されている集団をどのように効果的に運営するかは重要な課題である。強力な個性と能力を持つリーダーが導く集団は活動が活発になることが多いといわれるが果たしてそうであろうか。

個人の期待が満たされず、目標とする課題が達成されないと活動が行き詰まり沈滞する。そのような状況のとき、強力に主導するリーダーがいるとメンバーはリーダーに依存する。運営はメンバーの責任だからと参加を呼びかけても反応が鈍く消極的な対応にとどまる。

それに対して活動事例はそれなりの工夫を図って集団の運営を効果的に展開していることがうかがえる。理想を実現する組織の在り方を考える素材として活動事例が極めて有効な情報を含んでいる点に注目したい。

理想を実現する組織の在り方を一般化すると、目指すべき理想すなわち目標をどのように集団の中で共有していくかが核心となる。地域社会の人々との目標の共有が活動を更に積極的に展開し前進する。

(新たな『公共』の視点)

平成12年1月『21世紀日本の構想』懇談会最終報告では「個の確立と新しい公の創出」、平成14年9月中央教育審議会答申では「従来の『官』と『民』という二分法では捉えきれない、新たな『公共』のための活動ともいえるべきものとして評価されるようになってきている」とそれぞれ記述している。

それらの一連の動きが「新たな『公共』」を考えるきっかけとなり今日に至っていると考えてよいであろう。

行政と地域諸団体との関係を従来そのままとせず、新しく協働関係として位置づけるとそのことによって次の諸点が基本的理解として重要事項となる。

- ・活動の目的と目標についての決定手続きを確立し、互いに尊重すること
- ・相手に過度に依存、従属することのないよう意思疎通を重視すること
- ・組織・団体に所属するメンバーの個人的提案について考慮し検討すること

- ・協働関係の実体について広く一般に公開し周知を図ること

3 活動事例から得られる示唆

(異なりから一致へ)

これまで以上に異質性のあふれる社会への対応を模索する時代が到来し、その過程でいかに共通性を見出すかが世紀の課題となっている。しかし、共通性を尊重しているにもかかわらず新しい地平がなかなか見えてこない。

“人類はみな兄弟である”とスローガンを掲げることは容易だが、現実はあまりにも複雑であり深刻な問題に直面している。

人類を破滅に向かわせる諸問題—自然資源の枯渇、無差別殺戮力を持つ核軍事力の増大などに限らず重要な様々な問題に対処するには世代、伝統・文化、政治・経済体制などにおける様々な異なりを認めあい、将来目標を創りだし共有することを目指すべきである。

地域活動をより活性化するためには有効な方策の選択が必須であるが、活動を支える基礎的な理念について見逃してはならない。

各地の活動事例は方法や内容に関して多くの示唆を与えるが、それ以上に重要なことは、活動展開の基礎にある思想すなわちどのような人間観、社会観に基づいているかである。方法論だけではなく基礎にある考え方について事例から学ぶことを可能としたい。

新しい社会の実現を目指す行為が「新たな『公共』」を創り出す一歩であると期待するからである。

(展開過程の重視)

地域活動は内容とその進め方との二つの側面によって成り立つ。内容が豊かであり、参加者の期待に応えることは活動展開の生命線である。

例えば、活動の評価において目標をどの程度達成したかということを経験の一つとして採用し量的に数値化し得ることが可能だとしても、それだけでは参加者の満足の様子や程度を把握したことにはならない。活動中の笑い声の大きさ、強さについての数値を測ることは可能だが笑い声が意味している感情を明らかにすることはできない。どのような内容の活動なのかということと、どのように活動を展開しているかとは次元の異なる問いだからである。

活動内容に魅力を抱いて参加したと説明されても、そこに参加している仲間に出会うことが楽しいからという本音が隠されている場合がある。本人が気づかないことさえ多い。

地域活動の多くは状況の変化を受け、たえず変化する。その変化に即応して柔軟に対処し、参加者の満足、目標の達成、団体の維持を図らなければならない。それは過程を重視することによってはじめて可能となる。

(活動の成果をもたらす要因)

成果をあげていると見られる活動事例には共通して重要な要因のあることが理解される。成果は目的に沿って設定された目標への到達とその集団のメンバーの満足が好まし

い結果として示されることを意味している。

すでに述べたように量的評価だけではなく質的評価すなわち活動過程についての評価という側面が重要である。成果をあげている活動と成果をあげていない活動とを二分して比べると成果に関わる要因を明らかにすることが可能となる。

その活動に関わっている個人及び集団が重要な要因の一つとなる。どのような影響を活動の展開に与えるか、それは人あるいは人たちの経験や能力によって定まってくる。

その活動を推進している人あるいは人たちが情熱的と表現されるような強いエネルギーを傾けて取り組んでいることが共通している。それらの情熱はどこから来て、どのように燃えあがっているのかは個別な背景によると考える。

個々の背景は別として、直面している現状の問題をどうしても解決したいとの危機感のような思いを抱いている点が共通しているのではないか。問題の解決とその責任を社会や行政など他に委ねるのではなく、私たちがしなければとの当事者意識が強く働いているからであろう。注視すべき点である。

今回の調査によって人間の絆が重要であるだけでなく、その絆をつくっている個人の価値観によって成果が左右されるということが明らかになった。その内容の一つが当事者意識である。

昨今、社会にある問題に対して他人事として対応する風潮が強い。実践家の言葉を借りると、他人事意識は“無関心”に他ならない。

人口過密の大都市地域で日常のつながりが希薄なため人との接触において他人事として対応しても格別に奇異な行動として受けとめられない。それに対して、限界集落・準限界集落などの地域では傍らにいる人は他人ではない。他人として対処することはできない。

自然災害の際、相互扶助が人口過密・過疎にかかわらず発揮されるというのは他人事ではないという意識が危機的状況だからこそ強く働く。地域活動の成果は諸問題に対する当事者意識の強弱に大きく左右される。

関東大震災の3日後に小学校が再開したことが記録されている。その実体は焼け跡の路地に箱を並べ、その上に板を置き机とし、近所のお年寄りが教師となって教えた。次代を担う青少年育成は他人に任せられない我が身のことだからという当事者意識が強く働いた事例である。

(‘ない’は‘ある’への入り口)

かつてNPOのリーダーが“僕の村には病院がない、交通信号がない、映画館がない、カラオケホールがない、パチンコ店がない、高校がない…、しかし、よそにないものがある、きれいな水、高い山、豊かな森、たくさんの生きもの…そして人情…”と言ったことがある。

ないもの、ないこと、ない機会などをいくら数えあげても‘ある’状況への展開には至らない。そうではなく、あるもの、あること、ある機会を見出すことができれば新しい状況を創り出す道を歩くことを可能とする。

活動費についての公的な財政支援がないからということで立ち止まるのではなく、必

要なのだから行動したことによって地域から寄付を受けたという事例があった。子どもたちの育成は、本来、家族と地域の役割であり責任であるとの当事者意識が働いたことによる行為であろう。決して他力本願ではない。

活動の推進の役割を明確にすることが行政による支援の第一歩である。体験活動ボランティア活動支援センターの役割として明示されている情報の提供、活動についての相談、調査・研究、指導者養成の実施には財政的裏づけが必須であることは当然であり、だからこそ地域のボランティアのスタッフ、コーディネーター、支援者との協働が必要とされるのである。

‘ない’から‘ある’をつくりだす活動の転回を期待したい。

4 結びにかえて

委員の一人として関わったことについての感想を以下に述べる。

地域で生活していることの意味と重みそして課題は当事者でなければ理解できない。訪問させていただいた地域についての私の理解は未だ浅いとしてもこの機会をとおして様々な学びを得ることができた。

学習には定型学習と非定型学習があり事例研究は後者としての学びとして位置づけられ有意義であり、地域の課題は他と共通することでもあり相互に情報を交換する機会を活かすことが求められている。

活動に参加し推進している人々が誇りをもって目標に向かっていくことを知り、将来に対する希望と期待を感じることができた。協力していただいた方々に心から感謝を申し上げたい。

(吉永 宏)

平成22年度 奉仕活動・体験活動の推進・定着のための研究開発

体験活動ボランティア活動支援センターの役割に関する調査研究 報告書

平成23年3月

文部科学省
国立教育政策研究所
社会教育実践研究センター

〒110-0007 東京都台東区上野公園12番43号

TEL (03) 3823-0241

FAX (03) 3823-3008

リサイクル適性 (B)

この印刷物は、板紙へ
リサイクルできます。

Research Report 2010

体験活動ボランティア活動支援センターの役割に関する調査研究報告書

